那谷桃の木山古窯跡

発掘調査報告書

1991

石川県小松市教育委員会

那谷桃の木山古窯跡

石川県小松市教育委員会

例　　言

1．本書は、石川県小松市那谷町に所在した、那谷桃の木山古窯跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、県営公害防除特別土地改良事業ー梯川流域地区ーの実施に伴い石川県教育委員会が小松市教育委員会の協力を得て実施した緊急発掘調査報告書である。

3．発掘調査は、昭和53年10月２日から11月22日にかけて行い、高橋　裕（石川県教育委員会文化財保護課）・小村　茂・宮下幸夫が担当し、調査補助員として田島正和があたった。また、考古地磁気測定は富山大学理学部教授広岡公夫氏に依頼した。

4．出土品整理及び報告書作成は宮下・望月精司が担当し、下記各氏の協力を得た。

＜遺物の分類・復元＞　打田外喜代、伊藤節子、山口美子、金森和美、若山智賀子
成毛覚美

＜遺物の実測・トレース＞　宮田佐和子・江野直子

＜遺物の拓本＞　打田外喜代

＜遺構のトレース＞　江野直子

5．報告書の編集及び執筆

本書の編集は、小村指導のもと、宮下・望月が担当した。

執筆は、第１章・第２章・第３章を宮下が、第４章・第５章を望月が担当した。

6．本書で示す方位は、すべて磁北である。尚、第１図には国土地理院発行25,000分の１地形図（昭和62年発行「小松」「動橋」）を使用した。

7．調査の実施及び報告書作成にあたっては、以下の方々、機関。団体から御協力と御指導を賜った。記して謝意を表したい。（敬称略　50音順）

内堀信雄　折戸靖幸　北野博司　木立雅朗　田嶋明人　福島正実　湯尻修平

石川県小松土地改良事務所　石川県立埋蔵文化財センター　小松市那谷町有志

小松市林町有志

8．発掘調査費用は、石川県農林水産部耕地整備課が負担し、出土品整理・報告書刊行費は小松市教育委員会が負担した。

第１章　　位置と環境

石川県の加賀地域は、白山大汝峰に源を発し、美川で日本海に注ぐ県内最大の河川である手取川により北加賀と南加賀に分けられる。いわゆる南加賀は、西に日本海、東に白山前山丘陵を形成する能美・江沼の両丘陵に挟まれた地域で、南に橋立台地と白山前山丘陵に挟まれた江沼盆地北に手取川と梯川に挟まれた能美平野が広がる。

この江沼盆地と能美平野の中間位置に柴山潟・今江潟・木場潟（現在、今江潟の全面と柴山潟の４割が干拓により消失）からなる加賀三湖とこれにより形成された潟埋積平野・三湖台地が広がり、東南を白山前山丘陵と境を接し、いたるところで小谷を形成している。加賀温泉郷の一つである粟津温泉は、林町より東南方にのびる谷の中程に位置している。この粟津温泉より那谷町をとおり山代温泉へ主要地方道が通っている。この道路の那谷町をすぎたあたりで、分校町へ抜ける県道が分岐している。本窯跡は、この分岐点よりやや分校よりに入った小谷の東斜面に位置していて、南加賀古窯跡群に含まれる窯跡である。

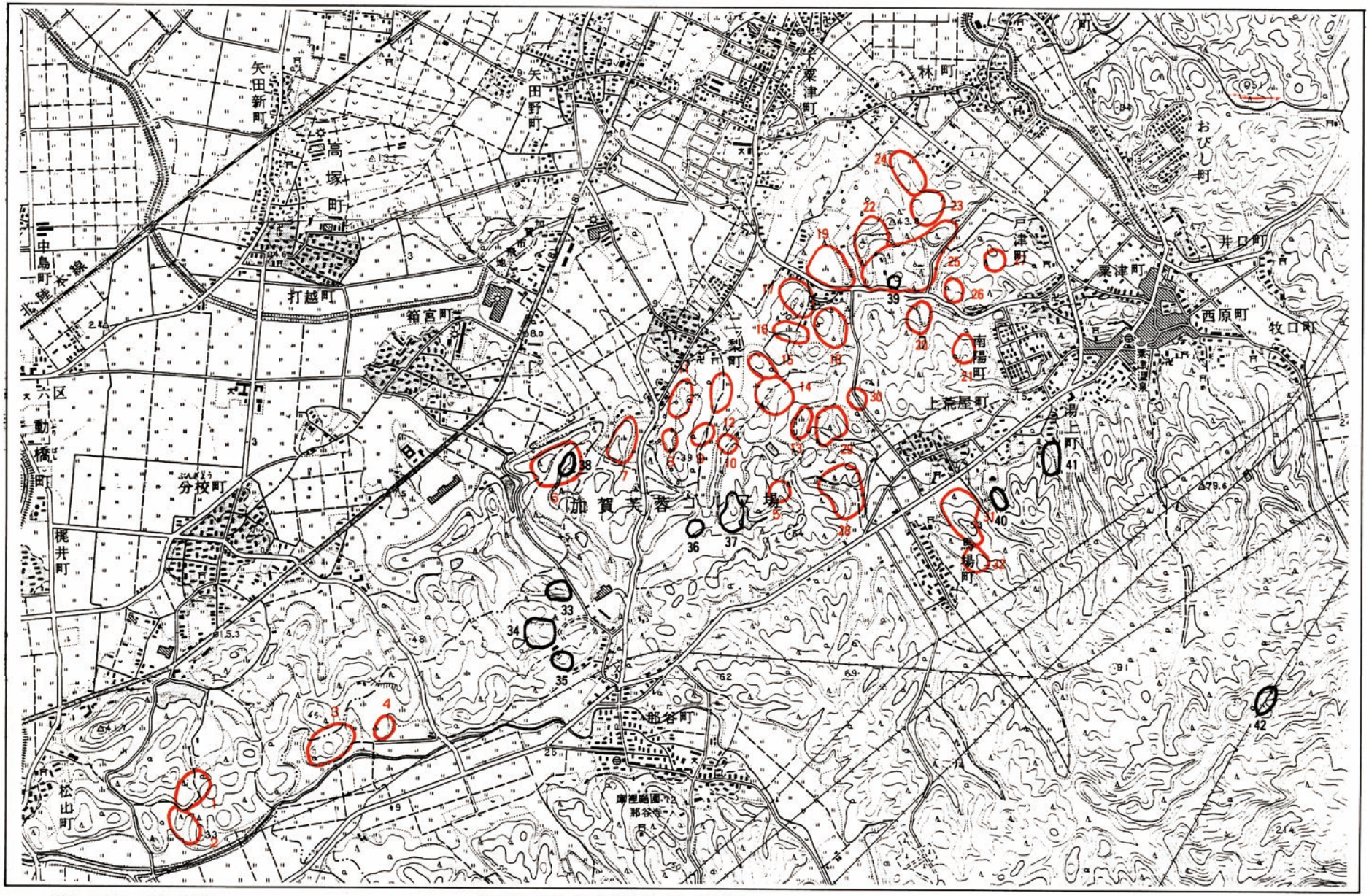
南加賀古窯跡群は、白山前山丘陵のうち、江沼盆地の東端をなす動橋川とその支流の那谷川及び加賀三湖の木場潟に注ぐ馬場川の開析により形成された、標高40～100ｍの低丘陵地帯に存在する須恵器・埴輪・土師器・瓷器窯跡を総称したもので、県内最大の規模をもつ。

この窯跡群の出現は、ほぼ６世紀初頭頃と考えられ、二ツ梨東山４号窯跡がこの時期に相当すると思われ、当古窯跡群において発掘調査が実施されたもののなかでは最も時代が古い。また、二ツ梨トノサマイケでは埴陶兼業窯が営まれ、三湖台に所在する古墳へ供給されている。６世紀代では、この二ツ梨地区と、南加賀古窯跡群の西端部を占める分校・松山地区及び那谷地区（本窯跡の西隣の金比羅山古窯跡　那谷川水系域）で操業がなされている。

以後、生産を拡大して行くが、最も栄える時期は本窯跡の操業が行なわれた８世紀の前半頃で、窯場の拡大に伴って窯跡数が急増する。８世紀代では、二ツ梨地区で新たに５箇所で操業が開始される一方、この時期を最後に那谷川水系域での窯業生産が終了し、後半には収束・統合の傾向を見せる。

このことは９世紀には顕著に現われ、生産規模は縮小していく。窯跡も、箱宮地区で新たに操業が開始する以外は、戸津・二ツ梨地区において存続しているのみである。しかし、戸津地区を中心として、９世紀の終わり頃に生産が再興され、生産量は爆発的に増加し、再び盛期を迎える。また、各地区で瓦の同時焼成が見られる。当古窯跡群での須恵器生産は、10世紀を最後に見られなくなる。

瓷器系中世陶器（加賀古窯製品－加賀古陶）の生産は、須恵器生産の終了から現在までのところ、二世紀近く後の12世紀末に開始されたと考えられる。二ツ梨オクダニ窯で操業が開始され、その後生産地点が分散したと考えられる。更に後の那谷ダイテンノウダニ窯の時期に至り拡大的な展開を迎え、大甕の量産化が認められる。次の時期は、生産が安定した展開をみせていて、那谷カミヤ窯と湯上ユノカミダニ窯がこれにあたる。後、生産がユノカミダニ窯に集約され、西荒谷カマンダニ窯に移転し、14世紀後半頃かおそくとも15世紀の前半頃に操業が停止すると現在は考えられる。



赤色―古代　黒色―中世

第１図　南加賀古窯跡群窯跡分布図）S＝125,000）

No.	窯跡群名	備考
1	分校	1972　大聖寺高校郷土研究部調査（1～3号窯）
2	松山	
3	那谷比羅山	1982.83.84　県立埋蔵文化財センター調査（1～11号窯）
4	那谷桃の木山	1978　小松市教委調査（1～2号窯）
5	二ツ梨カセイデ	
6	箱宮ドウガヤチ	1969　大聖寺高校郷土研究部調査（5号窯）
7	矢田野ナガオヤマ	
8	矢田野向山	1986　小松市教委調査(1号窯)
9	二ツ梨ワキガマ	
10	二ツ梨横川	1988　小松市教委調査（灰原部分）
11	二ツ梨ガマダニ	
12	二ツ梨東山	1984　小松市教委調査（1～5号窯）
13	二ツ梨サンマイダニヤマ	
14	二ツ梨トウゲヤマ	
15	二ツ梨マルヤマ	
16	二ツ梨トノサマイケ	埴陶兼窯（1～3号窯）、土師器窯（4～6号窯）
17	二ツ梨豆岡山	1981　小松市教委調査(1号窯)
18	二ツ梨マメオカヤマムカイヤマ	1983　小松市教委調査（1～3号窯灰原部分）、瓦陶兼業窯
19	二ツ梨一貫山	1970　小松市教委調査（1・2号窯）、土師器窯（8・9号窯）
20	戸津オオタニ	
21	戸津アナヤマ	戸津2号窯　北陸大谷高等学校地歴クラブ調査
22	戸津六字丘	1982・86　小松市教委調査（1～4号窯）
23	林オオカミダニ	1988・89　県保存協会調査（1・2号窯）
24	林タカヤマ	製鉄跡・炭窯との複合遺跡であるため林ま遺跡と呼称する。
25	戸津トヅ	1974　県・市・戸津古窯跡調査委員会調査（5号窯） 1975　小松市教委調査（9号窯） 1981～84　小松市教委調査（須恵器窯24基、土師器窯18基、地下式平窯1基、中世窯1基、炭窯1基）
26	戸津ワクダニ	戸津1号窯　北陸大谷高等学校地歴クラブ調査
27	戸津ショウガダニ	
28	上荒屋ジャモンダニ	
29	上荒屋サンマイダニ	
30	上荒屋	
31	上荒屋ホウジョウヤマ	1986　小松市教委調査（3号窯） 瓦陶兼業窯（1号窯）
32	馬場ニカヤマ	
33	那谷コテンノウダニ	1969　北陸大谷高等学校地歴クラブ調査　1977　小松市教委調査
34	那谷ダイテンノウダニ	1973　小松市教委調査（1・2号窯）
35	那谷カミヤ	1977　小松市教委調査
36	那谷カナクソダニ	1969　北陸大谷高等学校地歴クラブ調査（1号窯）
37	二ツ梨オクダニ	1969　北陸大谷高等学校地歴クラブ調査（1号窯）
38	箱宮ドウガヤチ	1969　大聖寺高校郷土研究部調査（1号窯）
39	戸津トヅ	1981　小松市教委調査(13号窯)
40	上荒屋ハカンタニ	
41	湯上ユノカミダニ	本報告書（灰原部分）
42	西荒谷カマンダニ	

注）窯跡群名については、原則として地名の後に字名等をカタカナで付して表記した。ただし、現在までに発掘調査等が実施されたものについては既知の名称を用いた。この名称については、小松高等学校地歴部・近間　強氏の業績に基づくものである。

第２章　調査至る経緯と調査概要

第１節　調査に至る経緯

桃の木山古窯跡の調査は、県営公害防除特別改良事業ー梯川流域ーの実施に伴う緊急発掘調査によるものである。

昭和52年度に小松市梯川流域のカドミウム汚染田の土地改良事業が実施されることになり、水田客土用の土砂採取場に、小松市那谷町地内通称桃の木山が選定された。この計画決定を知った小松市教育委員会社会教育課（当時）は、石川県教育委員会文化財保護課（当時）に対し「土砂採取予定地内に古窯跡が所在する」と連絡した。文化財保護課では直ちに現地確認を行い、灰原部分から多量の須恵器片が採取され、当該地に奈良時代の古窯跡が存在ことを確認した。それをもって文化財保護課は、石川県農林水産部耕地整備課との間でその取り扱いについて協議を行なった。

その結果、当該古窯跡部分は昭和53年度に採取する計画で、昭和52年度は、当該地の北に続く斜面を採取する計画であったため、北側及び東側について分布・試掘調査を実施し、他の埋蔵文化財の所在の有無を調査することとなった。

昭和52年９月19日から９月23日まで、延べ５日間にわたりトレンチ法により試掘調査を実施たが、調査地区には灰原等古窯跡の存在を暗示するような所見は得られず、当該土砂採取予定地内には、古窯跡１基だけが所在するとの結論に達した。その結果、再度、耕地整備課との間で協議を行ない、昭和53年度に緊急調査を実施し、記録保存を図ることで双方が合意した。

昭和53年度に入り、文化財保護課と耕地整備課では、土砂採取の進行状況に合わせ協議を行い、発掘調査は小松市教育委員会の協力のもと秋に行なうこととなった。

第２節　調査概要

発掘調査は昭和53年10月２日より開始した。まず、ブドウ棚の撤去を行い、後、現況の地形図を作成。トレンチを設定し、窯体の確認作業を行なう。６日までに焚口部の壁を検出し、ここより窯尻方に追求する。窯はくりぬきと判明したが上部の土量が多く、壁残存高までの地山の排土に11月１日までかかる。２日より前庭部の掘り下げを開始し、並行して床面の追求を行なう。６日に焚口部に立ったままの炭化木材を検出した。また、清掃を行い、７日には写真撮影、平面図・断面図の実測、後、床面遺物の取り上げを行なった。８日に焚口部から前庭部にかけて掘り下げた結果、焚口部床面下約40cmに床面を検出した。10日には前庭部に土坑状遺構を検出、この掘り下げを行なう。13日に富山大学広岡教授による考古地磁気測定資料採取が行なわれた。16日に下の床面の追求を行い、前庭部に４個のピットとこれより古い排水溝を検出した。18日に写真撮影・図取りを行い、20日には広岡教授による２回目の考古地磁気測定資料採取が行なわれた。

窯体の追求と並行して、灰原及び周辺の調査を行なった。その結果、窯体の左方（南側）に調査時性格不明でカマド状遺構とした遺構が検出された。また、窯体の左やや下方に土坑が２

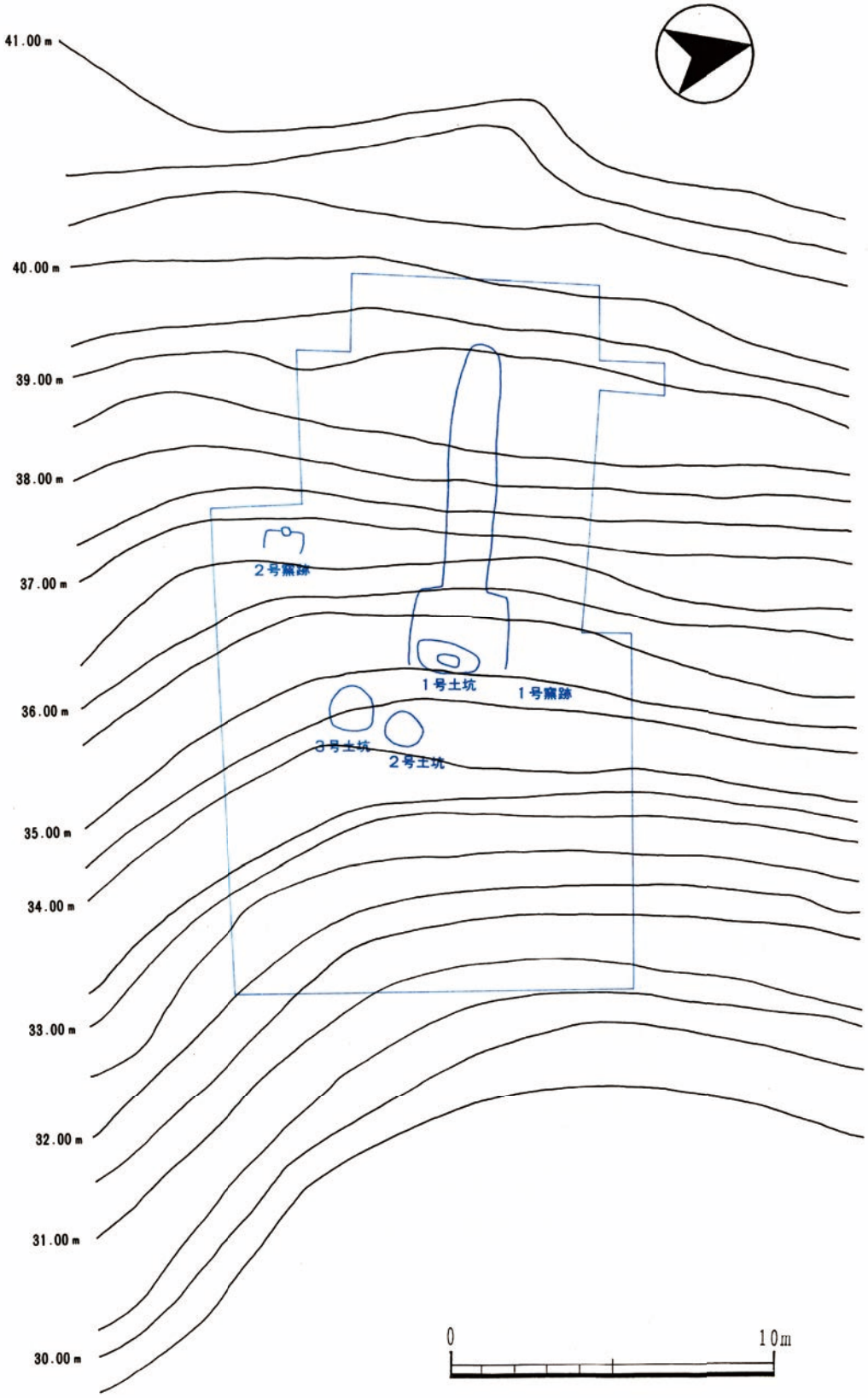
第２図　桃の木山周辺地形図（Ｓ＝１／2,500）

基検出された。

以上の調査と写真撮影・図取りを終え、11月22日に器材の撤収を行い発掘調査を完了した。

尚、昭和52年度の試掘調査時に本窯跡の南東斜面において１個の須恵器及び焼土が若干検出されたので、昭和54年度に、石川県教育委員会の依頼で小松市教育委員会が補足の分布調査を行なった。しかし、新たな遺構・遺物の検出がなく、おそらく耕作時の移動と考えられた。後の出土品整理で、この破片と窯跡灰原出土の破片が接合されたことによってもうなずけるのではなかろうか。

また、ここで不祥事を詫びなければならない。それは、調査が昭和53年と古く、その間小松



青色―調査区域及び遺構配置図
黒色―調査前地形測量図

第3図　桃の木山古窯跡調査区配置図（S=1/200）

市教育委員会の調査事務局の場所が数度移動し、また、整理を行なう場所も同じく二転三転としたため、調査記録のうち最も大切な図面類が紛失してしまい、本報告は、概要報告書の図面等を再掲載しなければならなかった。窯体断面図や灰原の土層図等はそのような理由で載せられなかった。以後の記述も、日誌・調査員の野帳及び概要報告書をもとにしたものである。

第3章　遺　構

発掘調査で検出された遺構は、須恵器窯跡1基（桃の木山1号窯）、土師器窯跡1基（同2号窯）と3基の土坑（同1～3号土坑）であった（第3図）。

遺構は、ブドウ畑としての開墾・耕作の影響をほとんど受けていなく、灰原が若干削平されていたにすぎなかった。以下、その遺構の構造、規模等の概略を述べる。

1．1　号　窯

窯体は、等高線に直交して構築されていて、主軸方位はN－75°－Wを測る。窯尻で、現地表より窯底まで深さ2.8mを計り、焚口よりくりぬいて構築した地下式の無階無段登窯である。窯体は、大きく分けて2回の改造が認められ、これをⅠ次床・Ⅱ次床（最終床）と呼称した。

Ⅰ次床（第4図）は、全長8.2m、幅は焚口部で1.25m、燃焼部で1.35m、焼成部最大で1.6mを測る。床面の傾斜は、焚口より燃焼部にかけてやや下降していて、後、上昇に転じ焼成部では約20度であった。焚口右側より前庭部右側にかけては、幅20～25cm、深さ15cmの排水溝が掘られている。本床は、一部改造及び部分的に修復されていて、その時点で排水溝は埋められている。

Ⅱ次床（第5図）は、Ⅰ次床を崩れた天井や側壁で埋めてかさあげし、地山の黄褐色粘質土を貼って床としている。全長7.5mで床面残存部までは主軸上で8.0mを測る。幅は、焚口部で1.35m、燃焼部で1.5m、焼成部最大で1.6mを測る。Ⅰ次床より焚口部を50cm奥に設け、やや幅を広げている。床面の傾斜は、焚口より燃焼部にかけてやはりやや下降していて、後、焼成部下方で10～15度、上方で約20度であった。

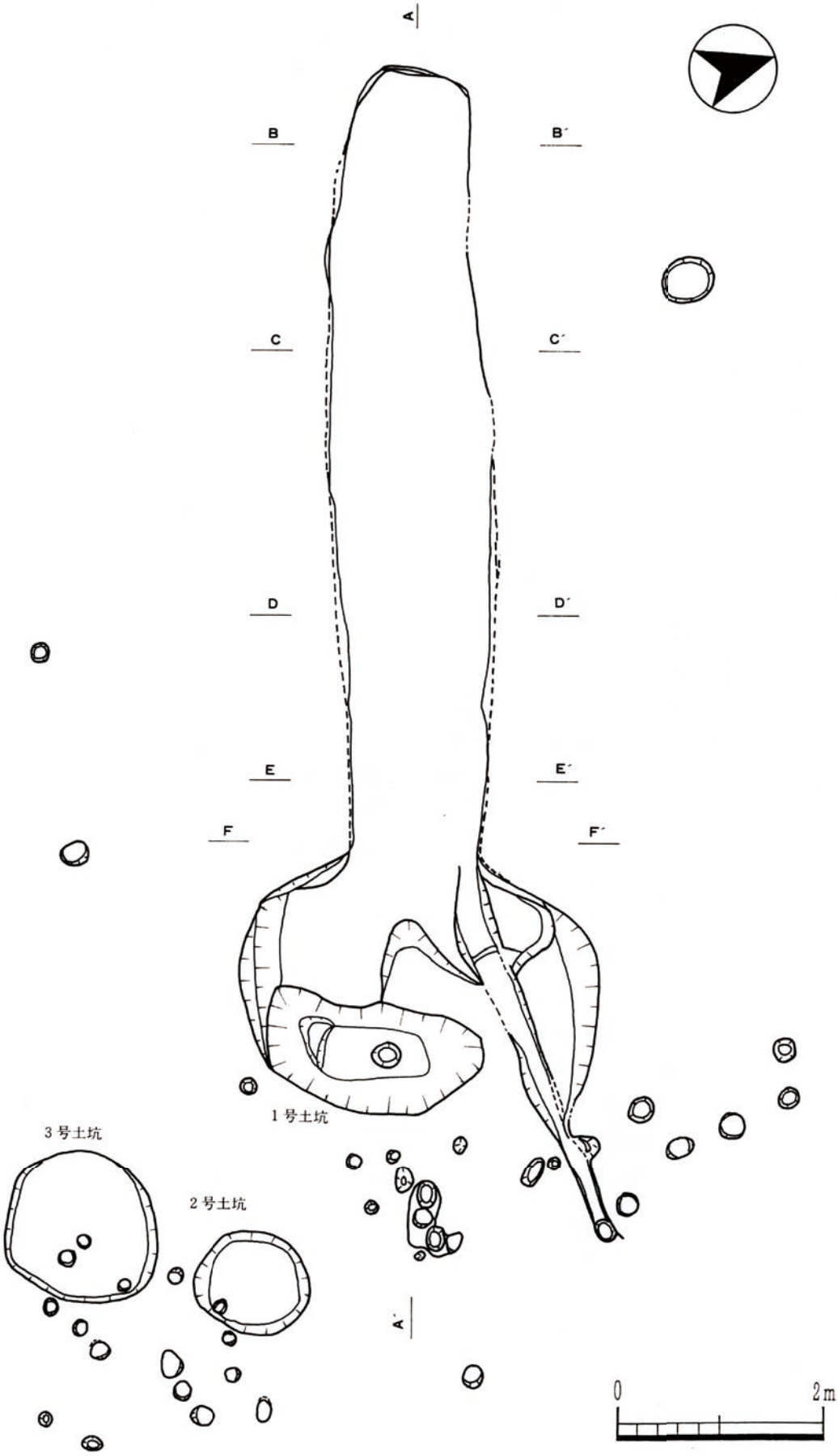
焚口部には、炭化木材が6本遺存していて、3本は立ったままの状態であった。これらは、最終焼成時にとり残されたものと思われ、ほぼ原位置と考えられる。太さは、10～15cm、長さ80～90cmであった。

前庭部には、Ⅰ次床の溝や土坑を埋めて、そのあとに径15～20cmのピット4個が穿たれていた。これにより、前庭部から焚口にかけて、覆屋があったと思われる。

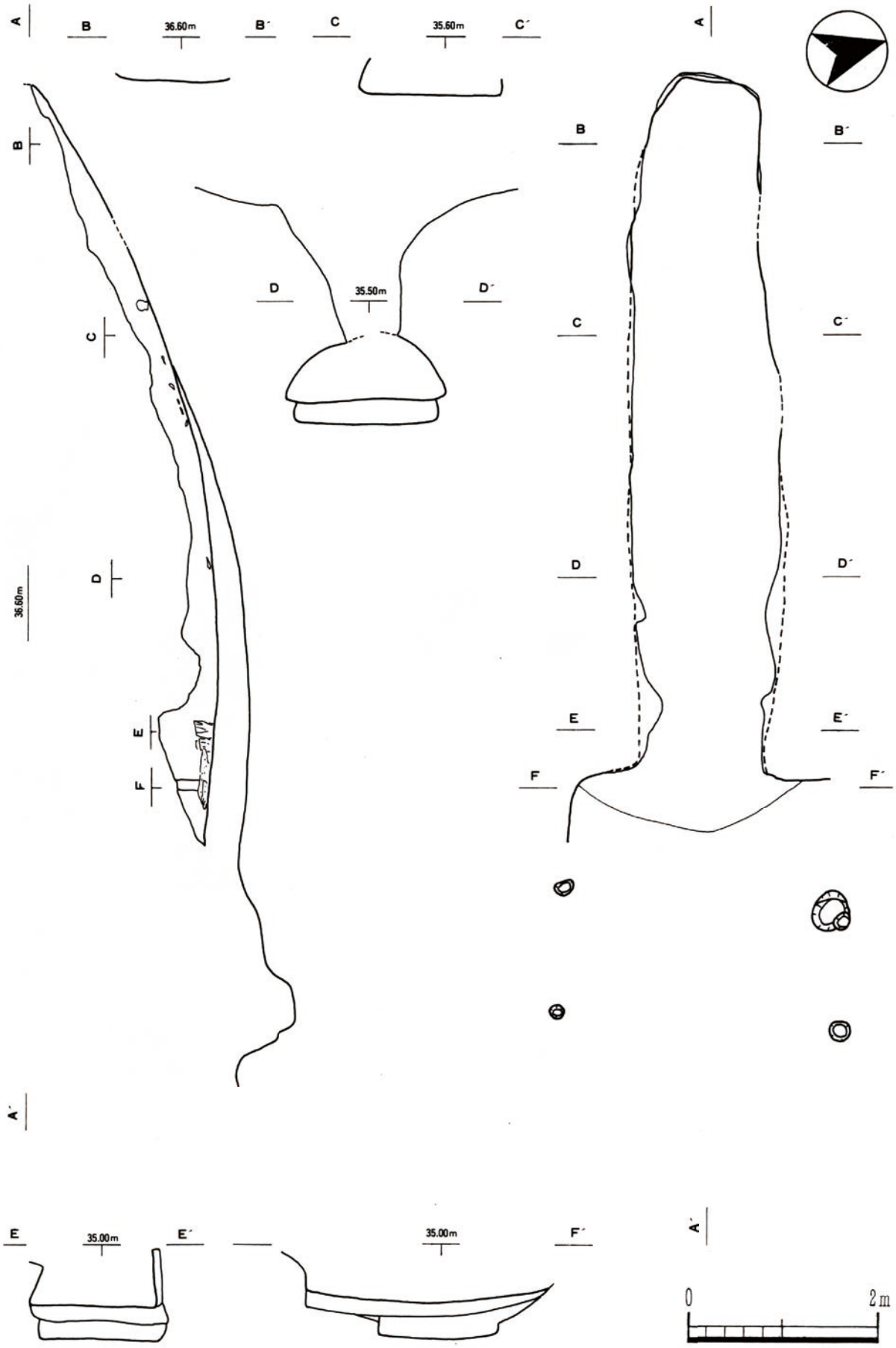
2．2　号　窯（第6図）

1号窯の南側に並行して築かれていた。平面形は、南北105～110cm、東西60～70cmの長方形プランを呈している。西壁部分で地山を20～25cm掘り下げていて、床面は水平であった。壁、床面とも焼けていて、東部分が若干削られていたが遺存度は良好であった。西壁のほぼ中央に径23cmのロート状のピットが穿たれていたが、このピットの中は焼けていなかった。

本窯の床面中央より塗彩土師器片が若干検出された。



第4図　1号窯跡Ⅰ次床及び1～3号土坑実測図（S=1/60）



第5図　1号窯跡II次床及び断面図（S=1/60）

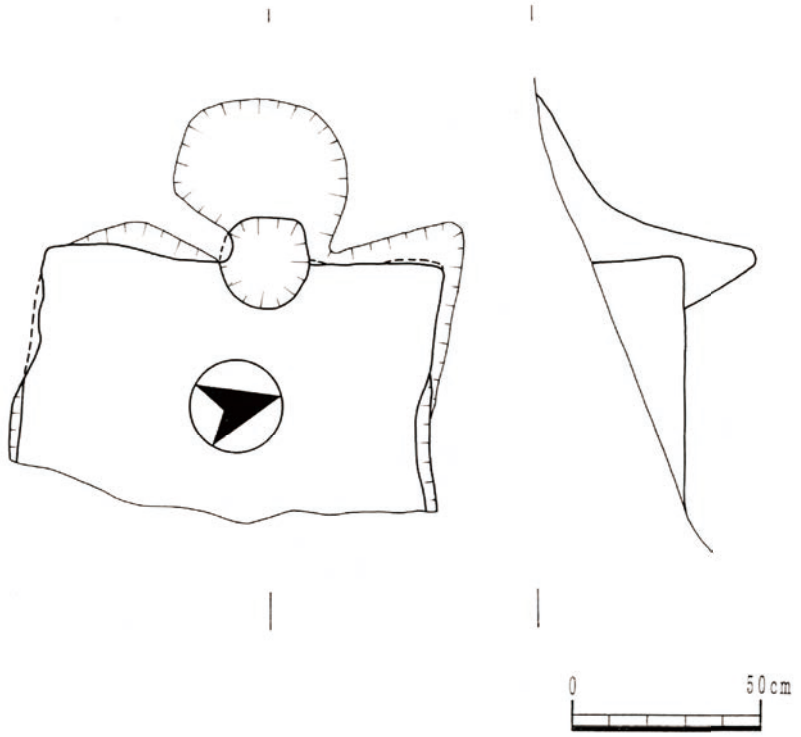
3．1～3号土坑（第4図）

1号土坑は、Ⅰ次床の前庭部に検出されたもので、2.1×1.1mのやや長方形プランを呈し、深さ90cmを測る。おそらく、Ⅰ次床の残灰処理等のためのものと考えられる。

2号土坑は、1号土坑の南東に検出されたもので、1.2×1.0mの楕円形プランを呈し、壁の一部が焼けていたので、土師器窯の可能性があるかもしれない。

3号土坑は、2号土坑の横に検出されたもので、径1.5mの略円形プランを呈している。

なお、前庭部及び窯体の周囲には、径15～20cm位のピットが多数認められたが、柱穴としてまとまったものは、前述の覆屋のもの以外は検出されなかった。



第6図　2号窯跡実測図（S＝1/20）

4．考古地磁気

考古地磁気は、富山大学理学部教授広岡公夫氏に測定を依頼した。その測定結果は、理学部地球科学教室の広岡公夫・岡田宗・吉村勝之・井口滋存の各氏連名で報告を頂いた。

それによれば、桃の木山1号窯Ⅰ次床面はA.D.850±70年、同焚口部はA.D.650±80年、Ⅱ次床面はA.D.840±40年、2号窯跡はA.D.570±50年又はA.D.800±25800年であった。

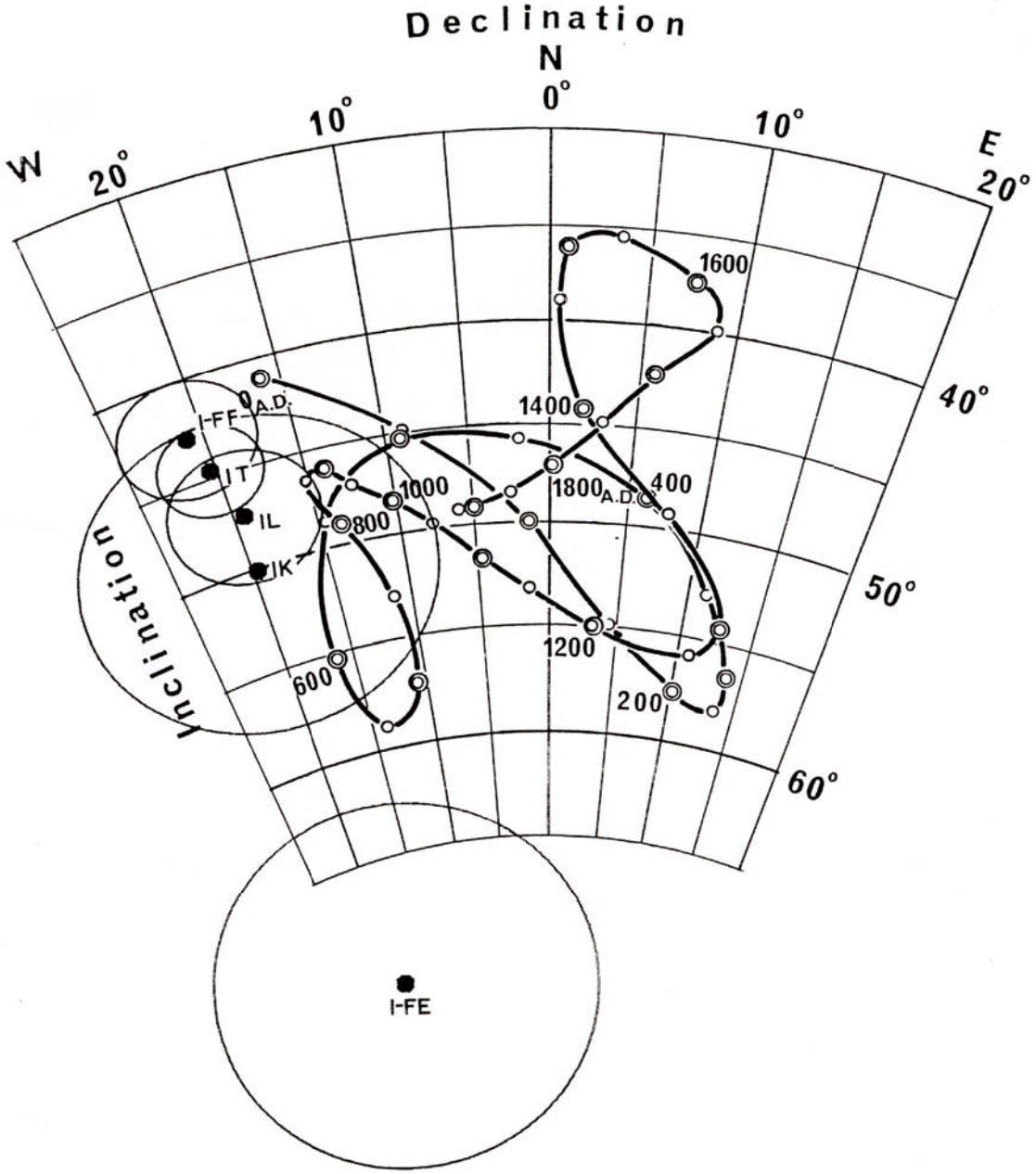
以下、そのデーターを示す。

1号窯Ⅰ次床面	（1－FF）	試料数 15	試料採集年月日	1978.11.13
1号窯Ⅰ次焚口	（1－FE）	〃 11	〃	〃
1号窯Ⅱ次床面	（1L）	〃 14	〃	〃
2号窯	（1K）	〃 11	〃	〃

偏角補正値（°W）は全て4.43

測定結果

	試料個数(N)	平均偏角(°E)	平均伏角(°)	α95(°)	K	磁化強度(emu/g)
1-FF	13	-20.75	42.93	2.98	194.2	4.85E-4
1-FE	10	-19.71	71.13	8.56	32.8	3.63E-4
1L	9	-19.12	47.50	3.31	242.8	5.27E-4
1号窯TOTAL(1T)	22	-20.12	44.80	2.28	186.3	—
1K	8	-19.50	50.25	7.74	52.2	2.22E-4



第4章　遺　　物

当遺跡において出土した遺物は、大半が1号窯跡とそれに伴う灰原から出土した須恵器で、1号窯跡Ⅰ次床から289点、Ⅱ次床から588点、窯体覆土から178点、前庭部から870点、灰原から4518点、周辺の土坑から180点の破片数を数える。また、僅かではあるが、2号窯跡（土師器窯）等から土師器が10点出土している。以下に須恵器と土師器に分けて、各出土地ごとに遺物の説明を加え、編年的な検討を加えてみようと思う。

第1節　須恵器

各出土地の遺物を個々に説明する前に、出土量が多く一器種内で細分できる供膳器などの器種について、あらかじめ分類を試み、その分類基準を呈示しておきたいと思う。

（1）器種分類

坏蓋

当遺跡において出土した坏蓋は、口縁部に返りをもつものと折り返しのものに大別される。返りをもつものは、破片で2個体出土しているだけで、分類するまでには至らない。

折り返し口縁のものは、回転ヘラ切り後回転ヘラ削りを施し、偏平鈕を貼付する点では共通しているが、器形から山笠状に開き、高いタイプ（A）と天井部に平坦部をもつ、やや偏平なタイプ（B）とに分けられる。Bタイプは平坦部に広くヘラ削りを施すものが多く、Aタイプのヘラ削りはやや幅狭に施される。また、口縁端部の形態から、口縁部折り返しが長く、薄手のもの（1）、折り返しが長いが、厚手のもの（2）、口縁端部外面が凹線状に窪むもの（3）、折り返しが短く、薄手のもの（4）、短く厚手のもの（5）の5つのタイプが存在する。そして、さらに、口径から14～18cmのもの（Ⅰ）と、20cm以上のもの（Ⅱ）とに分類できる。

有台坏

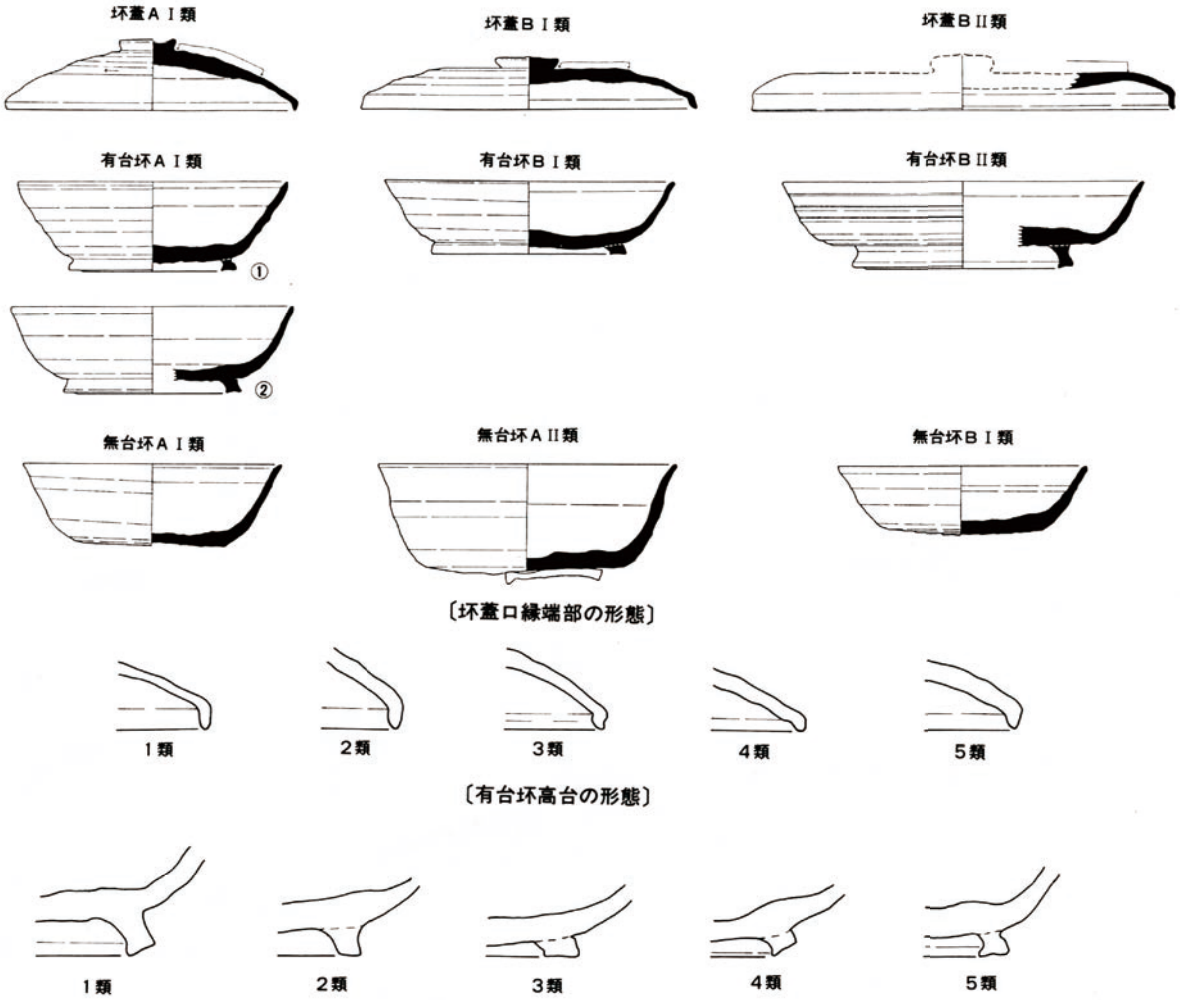
成形技法は底部を回転ヘラ切り後軽いナデまたは未調整する点で共通しているが、坏身の深さにより径高指数30以上の深身のタイプ（A）と径高指数30未満のやや浅身のタイプ（B）に分けられ、高台の形態により、足高のもの（1）、「ハ」の字に踏ん張る形態で、畳付き部が平坦に接地するもの（2）、2の形態で、低いもの（3）、2の形態で、内側接地するもの（4）、高台部付け根がすぼまり、畳付き部が窪むもの（5）とに区分できる。そして、口径から14～16cmのもの（Ⅰ）と19cmのもの（Ⅱ）に分けられる。

無台坏

調整技法は手持ちヘラ削りものや回転ヘラ削りするものも一部見られるが、他は底部回転ヘラ切り後軽いナデか未調整のままにする点でほぼ共通している。しかし、坏身の深さにより径高指数30以上の深身のタイプ（A）と径高指数30以下のもの（B）とに分けられ、器形からさらに、底部が厚手で、底部から体部へ丸く立ち上がるもの（1）と底部がやや薄手で、平底を呈するもの（2）とに細分できる。そして、口径から12～14cmのもの（Ⅰ）と15cm台のもの（Ⅱ）に分けられる。

鉢

底部から丸味をもって立ち上がり、頚部で「く」の字に屈曲して口縁部に至る器形や櫛描き波状文を施すという特殊なものではあるが、ここでは鉢として扱った。良く似たもので、壺や



第７図　坏類形態分類図

坏として扱っているものもある。口径は14～15cmを測る。そして、波状文の施文をもち、底部がやや平底風となるもの（A）と施文しないものでやや丸底風の底部を呈するもの（B）とに分けられる。

すり鉢（篠原遺跡報告書での鉢Ｆ類に相当[1]）

ここでは底部を欠損しているものの、すり鉢と推定される破片も含めて、分類をおこなった。体部外面の整形方法により、縦位の刷毛目調整後ヨコナデを施すもの（A）とヨコナデ調整のみ施すもの（B）とに分けられ、Ｂの中で櫛描き波状文を施すもの（B_1）とそうでないもの（B_2）とに細分される。

短頸壺

胴部の器形によりＡ～Ｃの３つに分類できる。Ａは胴部上位に最大径をもち、肩の張る器形で、ヨコナデ調整を施す。底部には高台が付される可能性が大きい。Ｂは胴部の丸い器形で、外面に平行叩きとカキ目調整、内面に同心円叩きを施す。底部は丸底になると思われる。Ｃは小型品で、上から押し潰したような器形を呈する。

甕

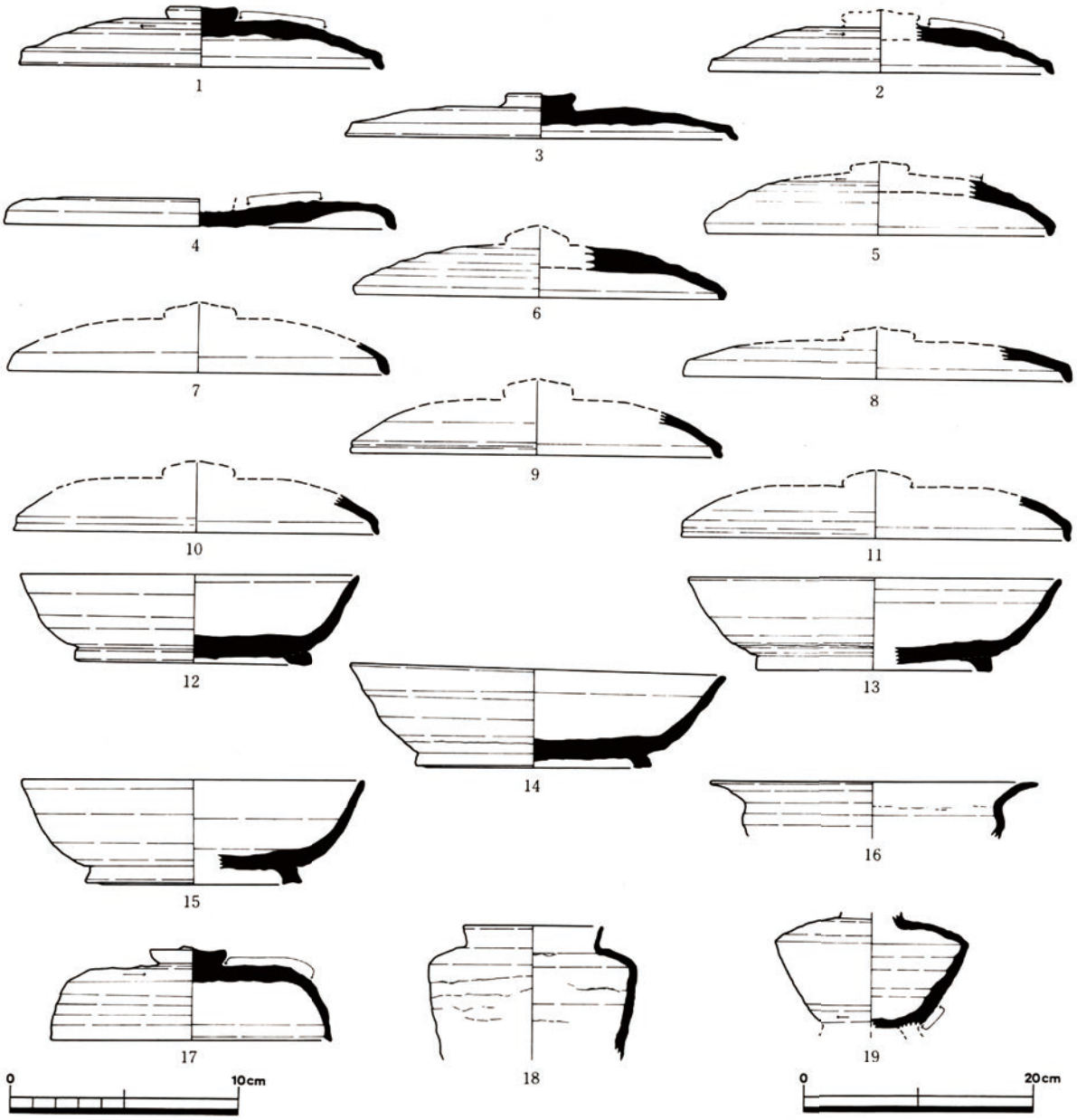
口径により35cm程度の大型品（A）、20～25cmの中型品（B）、12～17　の小型品（C）に分けられる。Ａは口縁部が長く外反し、端面が外傾する器形のもので、口頸部に縦位刷毛目調

整後櫛描き波状文を施し、胴部に外面平行線文叩きと内面同心円文叩きを施すもの。篠原遺跡の甕Aに相当する。Bは口縁部がやや短めで、水平の口縁部端面をもつ器形で、丸く肩の張る胴部をもつ。調整は口頸部ナデのみで、胴部はAとほぼ同様だが、外面の一部にカキ目調整を施すもの。篠原遺跡の甕Bに相当する。Cは口縁部が短く外反し、端面が外傾または水平となる器形のもので、Bと同じような胴部器形をもつ。調整はBとほぼ同様だが、平行線文叩きを消すくらいカキ目調整が顕著に施される。

以上、分類してきたが、他に高坏、甑、長頸瓶（篠原遺跡の瓶A類に相当）、広口瓶（篠原遺跡の壺J類に相当）、浄瓶（篠原遺跡の瓶F類に相当）、横瓶の器種も確認されている。

（2）1号窯跡Ⅰ次床出土須恵器（第8図、写真図版5～8）

Ⅰ次床出土の須恵器には、坏蓋・有台坏・無台坏・鉢などの供膳器、長頸瓶・横瓶・短頸壺の壺瓶類及び大中小の甕類などの貯蔵器が確認できる。個体数の比率は破片数では坏蓋74点、坏類22点（うち有台坏21点）、壺瓶類71点（うち長頸瓶14点、横瓶46点、短頸壺1点）、坏12



第8図　1号窯跡Ⅰ次床出土遺物（1～17はS＝1／3、18・19はS＝1／6）

1点を数え、口縁部計測法によれば、坏蓋79%、坏6.6%、鉢9.4%、短頸壺５%の比率を求めることができる。

１～11は口縁部折り返しの坏蓋。ＢＩ類に属するものが大半ではあるが、僅かにＡ類に近いもの（５・６）もある。口縁端部の形態は１類（１・３・10・11）、２類（２・４・７・８）のような長く下に伸びるものが多く、僅かに４または５類が付くもの（５・６）もある。

12～15は有台坏で、ＡＩ類（15）に属するものが一点ある以外は総てＢＩ類に属する。高台の形態は、図示しなかったものも含めれば、高くしっかりした高台の１類（15）が多く、次いで２類（13・14）が多い。

16は鉢で、底部付近を欠損する。内外面にヨコナデのみを施すＢ類に属する。

18は胴部下位以下を欠損する短頸壺でＡ類に属する。肩部の鋭く張った器形をしており、肩衝壺として扱って良いものかもしれない。また、短頸壺の蓋と思われる17も出土している。

19は口頸部と高台部を欠損する長頸瓶である。

（３）１号窯跡Ⅱ次床（最終床）出土須恵器（第９・10図、写真図版５～７）

この床面遺物は、土器の色調と焼け具合から３つに区分できる。黒色または暗赤灰色に焼け歪み、乳白色の自然釉が厚くまたはゴマシオ状に付着している土器（ａグループ）、灰色または灰白色に普通に焼けている土器（ｂグループ）、外面に緑色の自然釉が厚く付着している土器（ｃグループ）が存在し、前者２つは比較的まとまった出土状況を示している。また、ａグループの土器は　次床の取り残しと思われる土器と接合関係にあるため、焼台としての可能性が強い。これに対し、ｂ・ｃグループは窯体取り残しの土器と思われる。

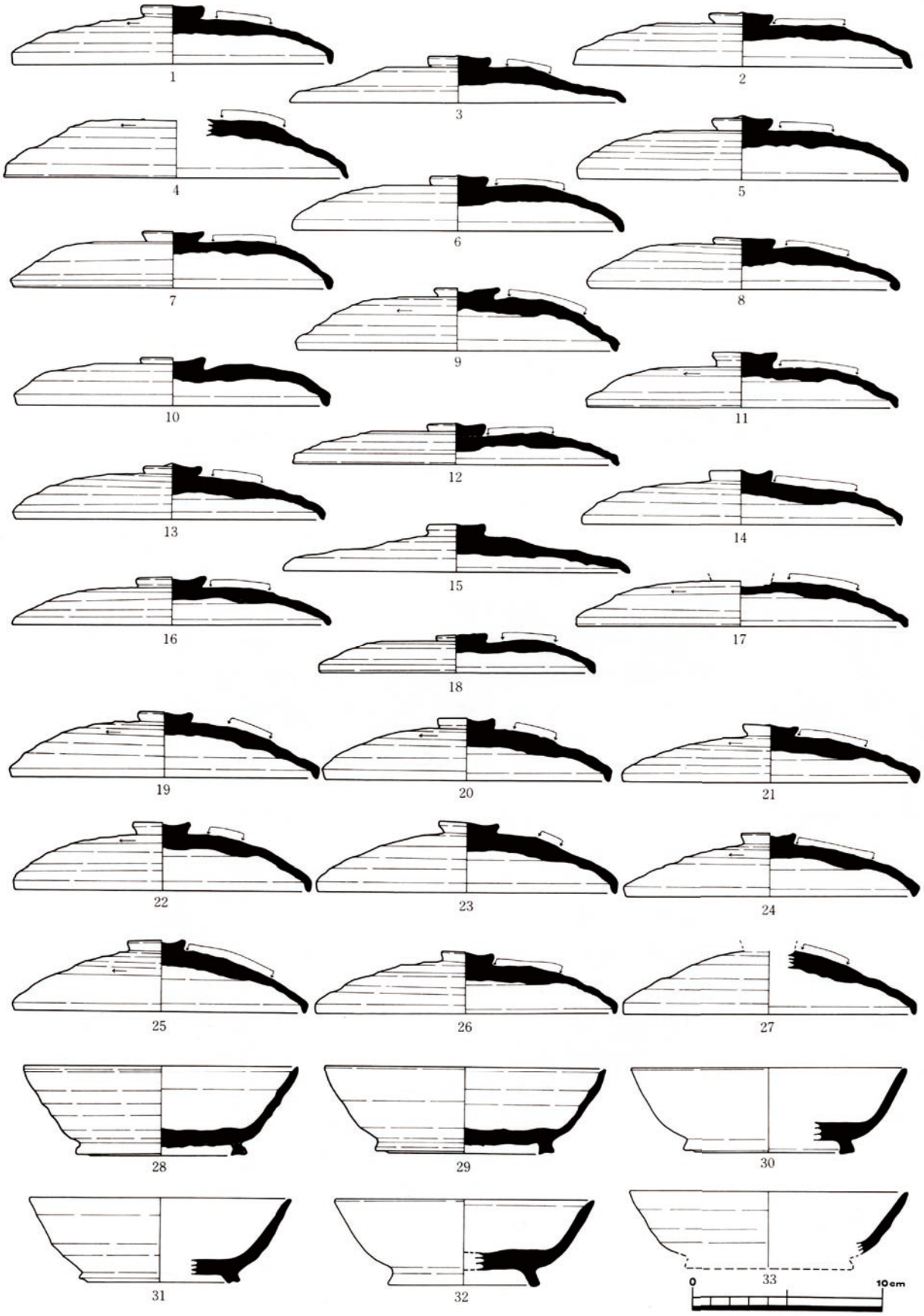
器種は、坏蓋、有台坏、無台坏、鉢、高坏などの供膳器、甑や壺瓶類、坏類などの貯蔵器が確認されている。個体数の比率は破片数で見ると、坏蓋298点、坏類140点（うち有台80点、無台57点）、鉢１点、甑22点、壺瓶類17点、甕類132点を数え、口縁部計測法では坏蓋62.8%、坏28.3%、高坏2.7%、甑2.5%、甕3.7%である。先にも触れたように、ａグループとした焼台の土器やｃグループの土器には坏蓋が多く、上記の器種比率になるのも当然ではあるが、坏身の比率もかなりの量を占めていることを考えれば、供膳器主体の器種組成をもっていることは間違いないと考える。

第９図１～27は折り返し口縁の坏蓋。これらも上記のａ～ｃグループに分けられるのだが、グループによって器形や口径が異なるといった傾向が見られる。つまり、ａグループ（１～15）及びｂグループ（16～18）はＢＩ類に属するものが大半で、ｃグループ（19～27）はＡＩ類に属するといった傾向である。口縁端部の形態についてもＡＩ類とＢＩ類とでは異なった傾向が見られる。ＡＩ類には短く厚い５類（19～25）のものが多く、２類（27）や４類（26）がこれに混じる。ＢＩ類は４類（11～14・16・17）、５類（７～10）のような短いものと１類（１～４）・２類（５・６・15）のような長いものがほぼ同量存在する。

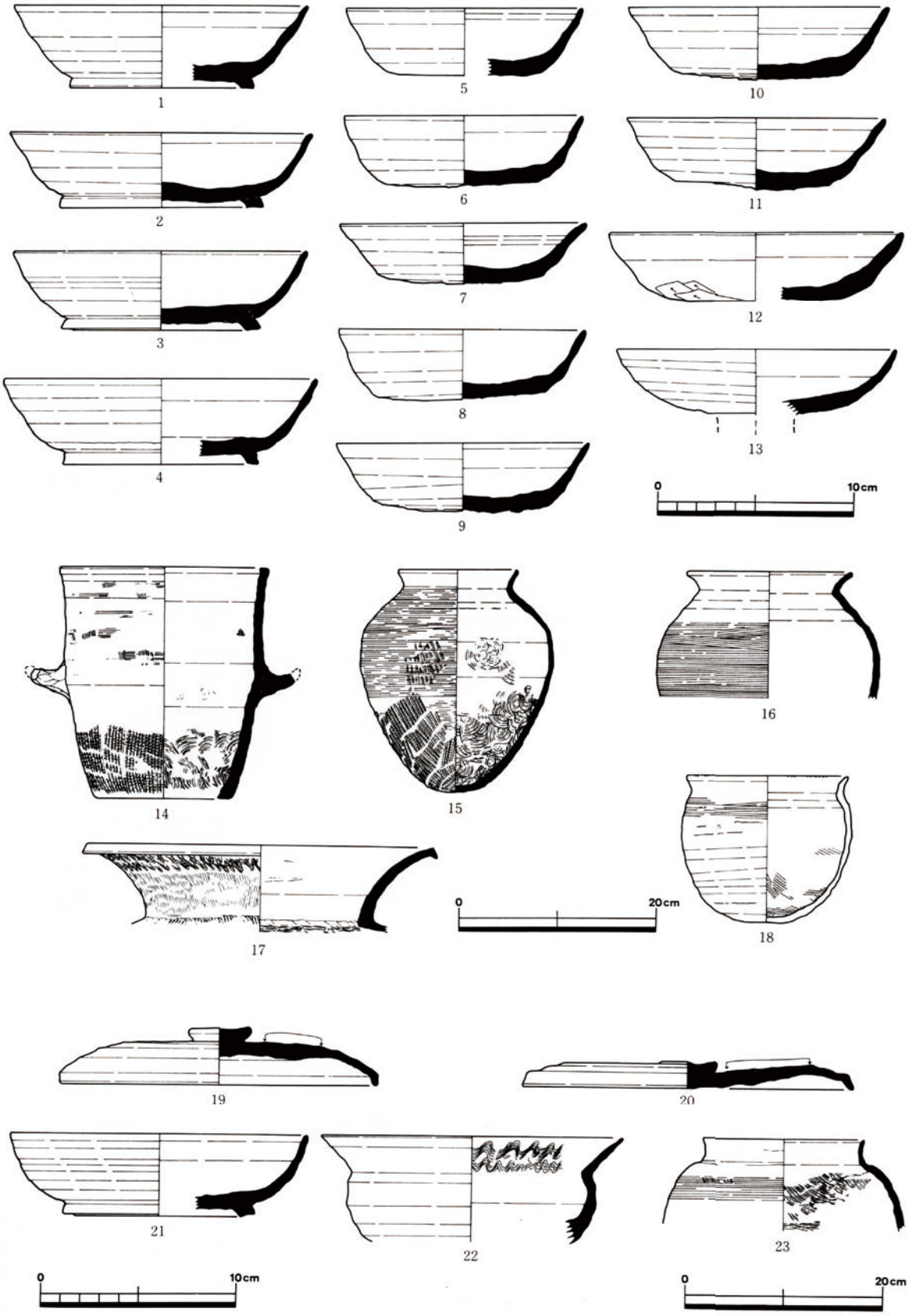
第９図28～33、第10図１～４は有台坏で、ＡＩ類とＢＩ類にほぼ分けられる。ＡＩ類はｃグループに、ＢＩ類はｂグループに入るものが多い。高台の形態はＡＩ類には５類（28・29・３）が付くことが多く、ＢＩ類には２類（１・４）、３類（２・３）が付く傾向をもつ。

第10図５～12は無台坏で、総てB_1Ｉ類に属するｂグループのもの。器形がやや偏平なものとやや深身のものとが存在するものの、底部はいずれも丸底風であり、細分は困難である。また、12のように手持ちヘラ削りの調整技法を施すものもある。

第10図13は脚部を欠損するため断定はできないが、高坏の坏部と思われる。坏部の器形は浅



第９図　１号窯跡Ⅱ次床出土遺物（Ｓ＝1/3）



第10図　1号窯跡II次床(1～17)及び窯体覆土(18～23)出土遺物
(1～13・19～22はS＝1/3、14～18・23はS＝1/6)

い埦状を呈し、器面調整は底部付近をヘラ削り、内面を刷毛のような工具でナデ調整している。

第10図14は甑で、底部から口縁部にかけてほぼ真っすぐに立ち上がるずん胴の器形を呈す。整形技法は上半を刷毛調整、下半を叩き調整その境をカキ目調整によって仕上げている。

第10図15～17は甕。15・16は小型品のC類、17は大型品のA類である。15はC類の中で最も小さく、口径12cmを測り、口縁端部の上端を若干つまみあげる。16は口縁端部を丸く仕上げている。このC類の土器はcグループに入るもので、歪みが著しく、復元不可能な破片が多い。17は口縁端部の下端を垂下させるもので、口縁部上位に櫛描き波状文を2段施す。aグループに属するもので、Ⅱ次床焼台として考えられるものである。

（4）1号窯跡Ⅱ次床覆土出土須恵器（第10図、写真図版7）

器種は、坏蓋、有台坏、無台坏、鉢、すり鉢などの供膳器、長頸瓶、横瓶、短頸壺などの壺瓶類や甕類などの貯蔵器が確認されている。個体数の比率は破片数で見ると、坏蓋75点、坏類25点（うち有台12点、無台11点）、鉢6点、壺瓶類9点（うち長頸瓶2点、横瓶3点、短頸壺1点）、甕類62点を数える。出土量が少ないため、口縁部計測法での比率は信憑性にかけることと、Ⅱ次床に接合するものが多いことから、破片数の呈示のみにとどめる。

15・16は折り返し口縁の坏蓋で、いずれもaグループのBⅠ類に属する。口縁端部の形態は15が2類、16が1類で、Ⅱ次床焼台の土器群に共通する。

17は有台坏で、B_4Ⅰ類に属し、bグループに入る。

18は鉢で、口縁部内面に粗雑な櫛描き波状文を2段（上6条、下4条）に施す。

19は胴部下半以下を欠損する短頸壺。器形は胴部の丸いB類に属し、底部は丸底を呈すると思われる。

（5）1号窯跡前庭部出土須恵器（第11・12図、写真図版6～8）

器種は、坏蓋、有台坏、無台坏、鉢、すり鉢などの供膳器、甑、長頸瓶、広口瓶、横瓶、短頸壺などの壺瓶類、坏類などの貯蔵器が確認されている。個体数の比率は破片数で見ると、坏蓋299点、坏類152点（うち有台74点、無台15点）、鉢18点、すり鉢4点、甑1点、壺瓶類55点（うち長頸瓶22点、広口瓶1点、横瓶2点、短頸壺14点）、甕類340点を数え、口縁部計測法では坏蓋29.9％、坏18.4％、鉢8.4％、すり鉢6％、広口瓶8％、短頸壺7.4％、甕22％である。

第11図1～3は折り返し口縁の坏蓋で、総てB類に属する。1・2は口径17cm程度でⅠ類に、3は22cm程度でⅡ類にはいる。口縁端部の形態は1と3が1類、2が3類のもので、総て折り返しの長い形態である。

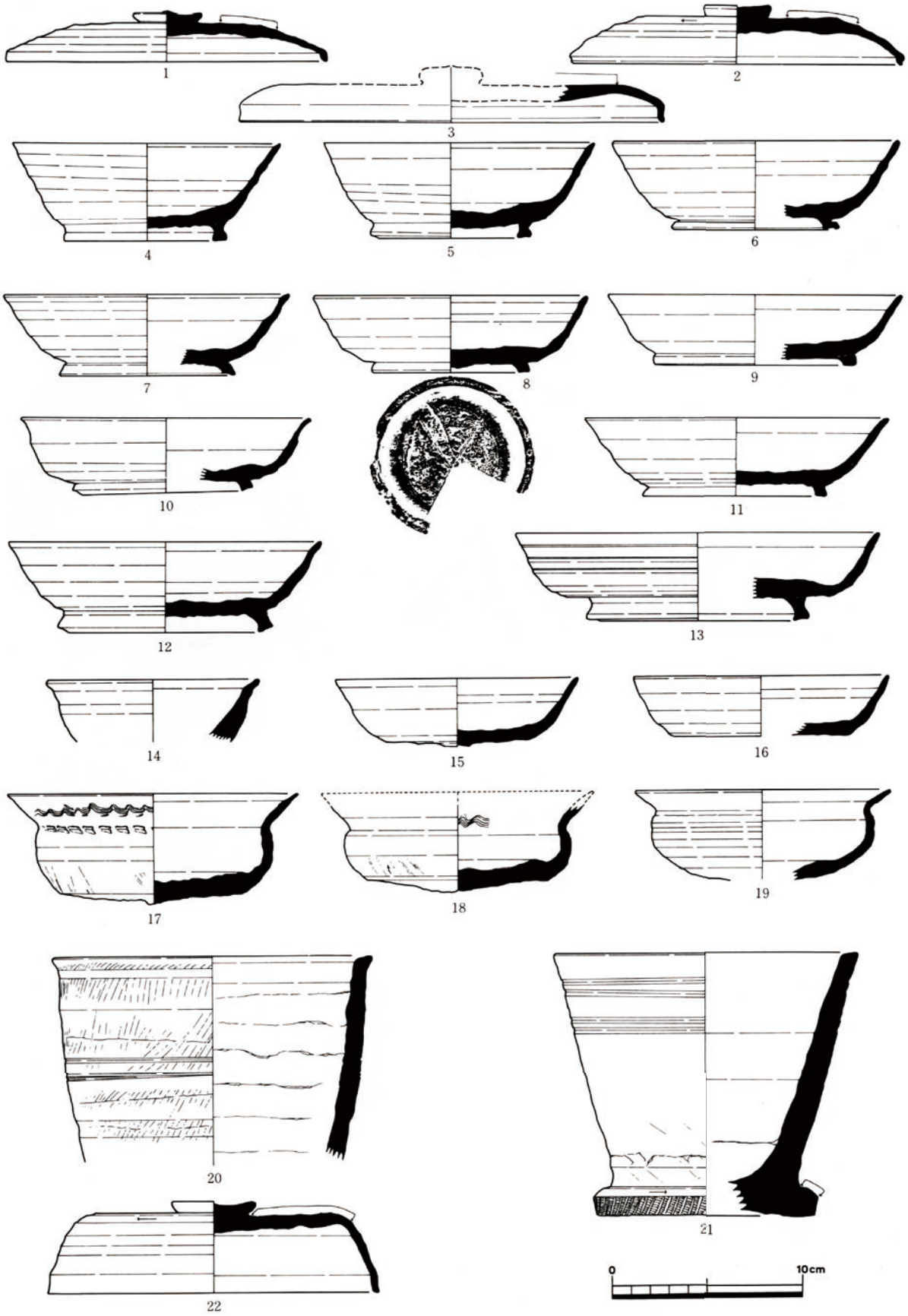
第11図4～13は有台坏で、4～6はAⅠ類、7～12はBⅠ類、13はBⅡ類にそれぞれ属す。高台の形態はAⅠ類には5類が付き、BⅠ類には2類（7・8・11）が多いようである。13は19cm台の大型のもので、胎土や色調から見ても、3の坏蓋とセット関係にあると思われる。

第11図14～16は無台坏。15はB_1Ⅰ類に、16はB_2Ⅰ類にそれぞれ属する。14は底部を欠損する破片であるため、はっきりしたことは言えないが、丸底のぶ厚い底部をもつ可能性がある。器形上、無台坏として位置付けて良いものか判断しかねたため、分類の項目としては扱わなかった。

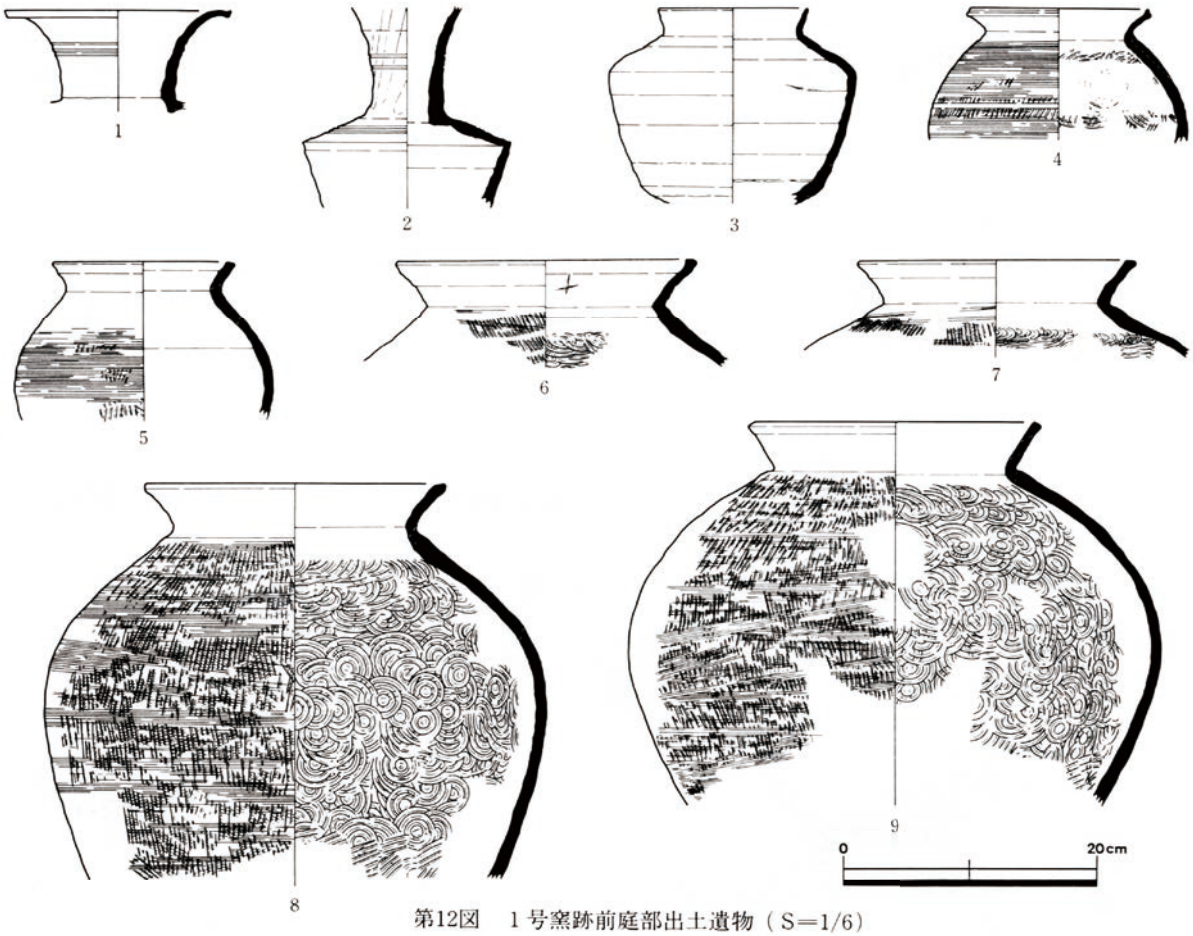
第11図17～19は鉢。櫛描き波状文の有無から17・18はA類、19はB類にそれぞれ分けられる。また、17には波状文の下にヘラ状工具による連続刺突文が施されている。

第11図20・21はすり鉢で、刷毛調整を施すA類とナデ調整のB類（B_2類）とが存在する。

第12図1は広口瓶の口頸部破片。口縁部の外反が著しく、口縁端部の上端を突出させる。



第11図　1号窯跡前庭部出土遺物（S=1/3）



第12図　1号窯跡前庭部出土遺物（S＝1/6）

第12図2は口縁部と底部付近を欠損する長頸瓶の破片である。肩部の屈曲は鋭く、頸部と胴部上位に2条の沈線を施す。

第12図3は底部付近を欠損する短頸壺の破片で、B類に属する。肩部はやや緩く屈曲し、口縁部はやや外傾する。また、短頸壺の蓋と思われる第11図22も出土している。

第12図4～9は甕。口径の大きさにより小型のC類（4・5）と中型のB類（6～9）に分けられる。口縁部の形態はB・C類ともだいたい似ているが、4のような口縁部上端を突出させるものもある。

（6）1号窯跡灰原出土須恵器（第13～16図、写真図版5～8）

器種は、坏蓋、有台坏、無台坏、鉢、すり鉢などの供膳器、甑、長頸瓶、広口瓶、横瓶、短頸壺などの壺瓶類、甕類などの貯蔵器が確認されている。個体数の比率は破片数で見ると、坏蓋1352点、坏類815点（うち有台405点、無台55点）、鉢39点、すり鉢19点、甑1点、壺瓶類224点（うち長頸瓶107点、広口瓶5点、横瓶10点、短頸壺17点）、甕類2059点を数え、口縁部計測法では坏蓋48.1％、坏40％、鉢1％、すり鉢0.8％、長頸瓶2％、広口瓶0.5％、横瓶1.2％、浄瓶0.7％、短頸壺0.5％、甕5.2％である。

第13図、第14図1～3は坏蓋。口縁部に返りをもつもの（第13図1・2）と折り返し口縁のもの（他のものすべて）とが存在する。有返り口縁のものは口縁部の破片で、返りの部分が比較的しっかりと作られており、回転ヘラ削りも口縁部付近まで及び、丁寧な作りをしている。このような形態から、当窯跡群の他の製品よりも古い感じがもたれ、また、いずれの土器も内面に自然釉が付着していることから、当窯跡の製品とは考え難く、混入品として扱いたい。

折り返し口縁のものは、ＡＩ類に属するものとＢＩ類に属するものがある。ＡＩ類に属するものは、口縁端部形態が５類（第13図26・27、第14図１～３）や２類（第13図25）の厚手のものがつくことを特徴とする。また、焼け具合はⅡ次床でｃグループとした緑色の自然釉が付着するものである。ＢＩ類に属するものは、口縁端部形態が薄く長く折り返す１類のもの（第13図３～12）が多く、次いで２類（第13図13～19）、３類（第13図20・21）、４類（第13図22・23）、５類（第13図24）がそれに混じるといった状況である。ＡＩ類は自然釉の付着状態からⅡ次床の製品として考えて間違いないと思われるが、ＢＩ類についてはＩ次床とⅡ次床のどちらの可能性ももつ。しかし、数量の多い、口縁端部を長く折り返す１・２類はＩ次床の製品の可能性が強く、一部Ⅱ次床の製品も含まれるものの、ＢＩ類の大半はＩ次床に伴うものと考えたい。

第14図４～25、第15図１～19は有台坏。ＡＩ類とＢＩ類に分けられ、ＢＩ類に属するものが過半数を占める。ＢＩ類には高台形態２類（第14図４～24、第15図１・２）を付す場合が多く、次いで１類（第15図３～６）、３類（第15図７～９）、４類（第15図10～13）、５類（第15図14～16）と続く。一番ポピュラーな２類の高台が多く付されることは当然の結果であるが、古い様相をもつ、つまりＩ次床の製品と思われる１類が一定量存在する。このＢＩ類の多くはＩ次床に伴うものと考えられるだろう。ＢＩ類に比べ、ＡＩ類に属するものは１割に満たない量で、高台の形態が１類のもの（第15図17～19）と５類のもの（第15図20）とに分けられ、後者のものには緑色自然釉が付着している。前者はＩ次床に、後者はⅡ次床に伴う製品と考えられよう。

第15図21～23は無台坏。総てA_2類の器形を呈し、21・22はＩ類、23はⅡ類の法量である。調整は、前者が底部回転ヘラ切り後軽いナデ調整を施すのに対し、後者は底面を回転ヘラ削り調整によって切り離し痕を消去している。これらA_2類の器形は有台坏ＡＩ類に似た径高指数を示しており、その系譜上の類似性が予想される。そして、23は内面に緑色自然釉が厚く付着している状況が見られ、Ⅱ次床でｃグループとした坏蓋や有台坏ＡＩ類（後者）と共にⅡ次床の製品である可能性が高い。

第16図１は鉢。内外面にナデ調整を施すＢ類に属する。

第16図２・３はすり鉢。外面に刷毛調整を施すＡ類（２）とナデ調整を施すもので、櫛描き波状文をもつＢ類（３）とがある。また、すり鉢の底部と思われる４も出土している。

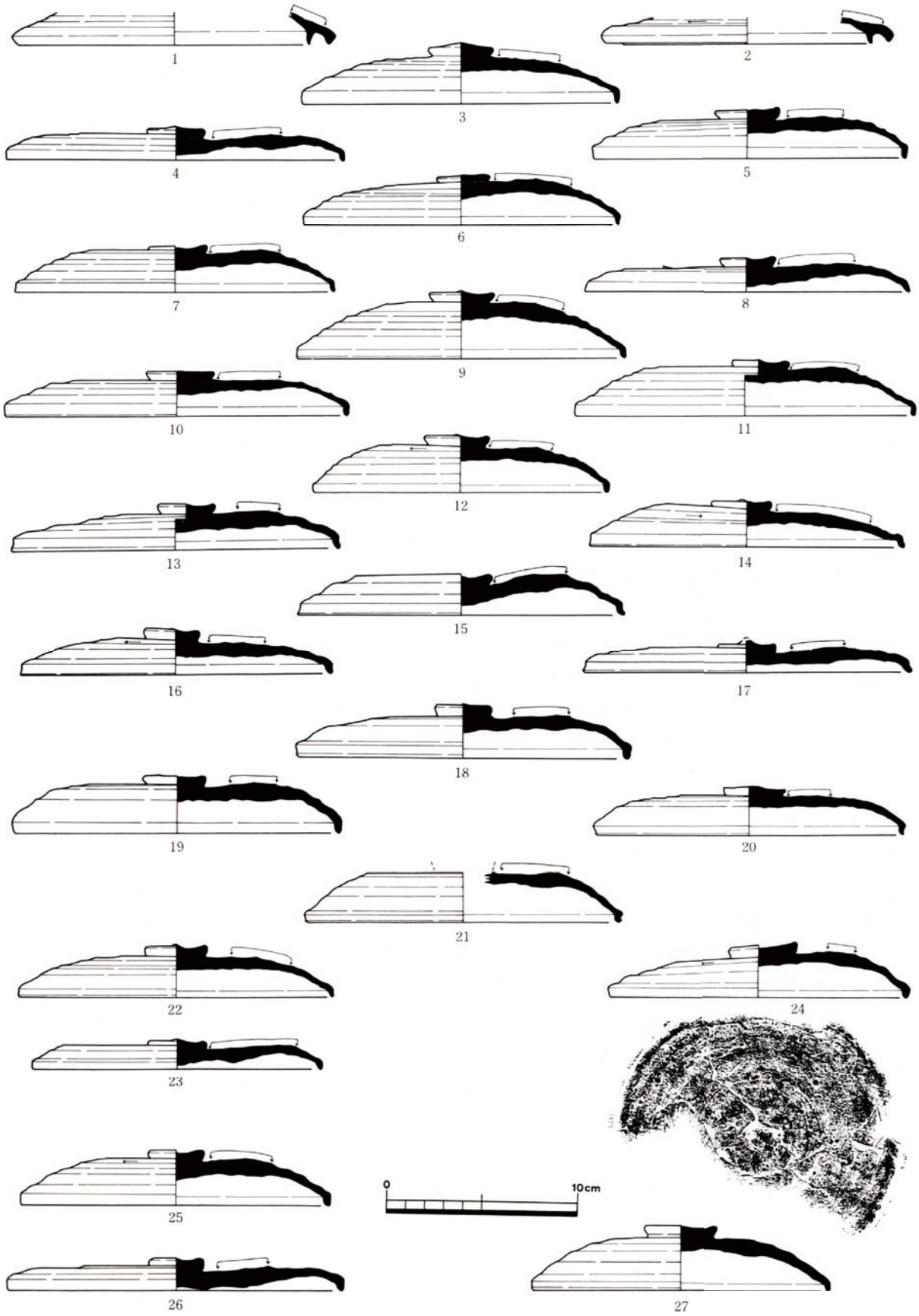
第16図６・７は長頸瓶。６は完形に近いものだが、歪みが著しく胴部がひしゃげている。口頸部の器形は筒状に伸びるもので、口縁部で緩く外反する。口縁端部は丸く仕上げる。７は胴部の破片で、胴上部に最大径をもつ。

第16図８は浄瓶。丸い胴部から細長い口頸部に移行し、端部で短く外反する器形と思われる。

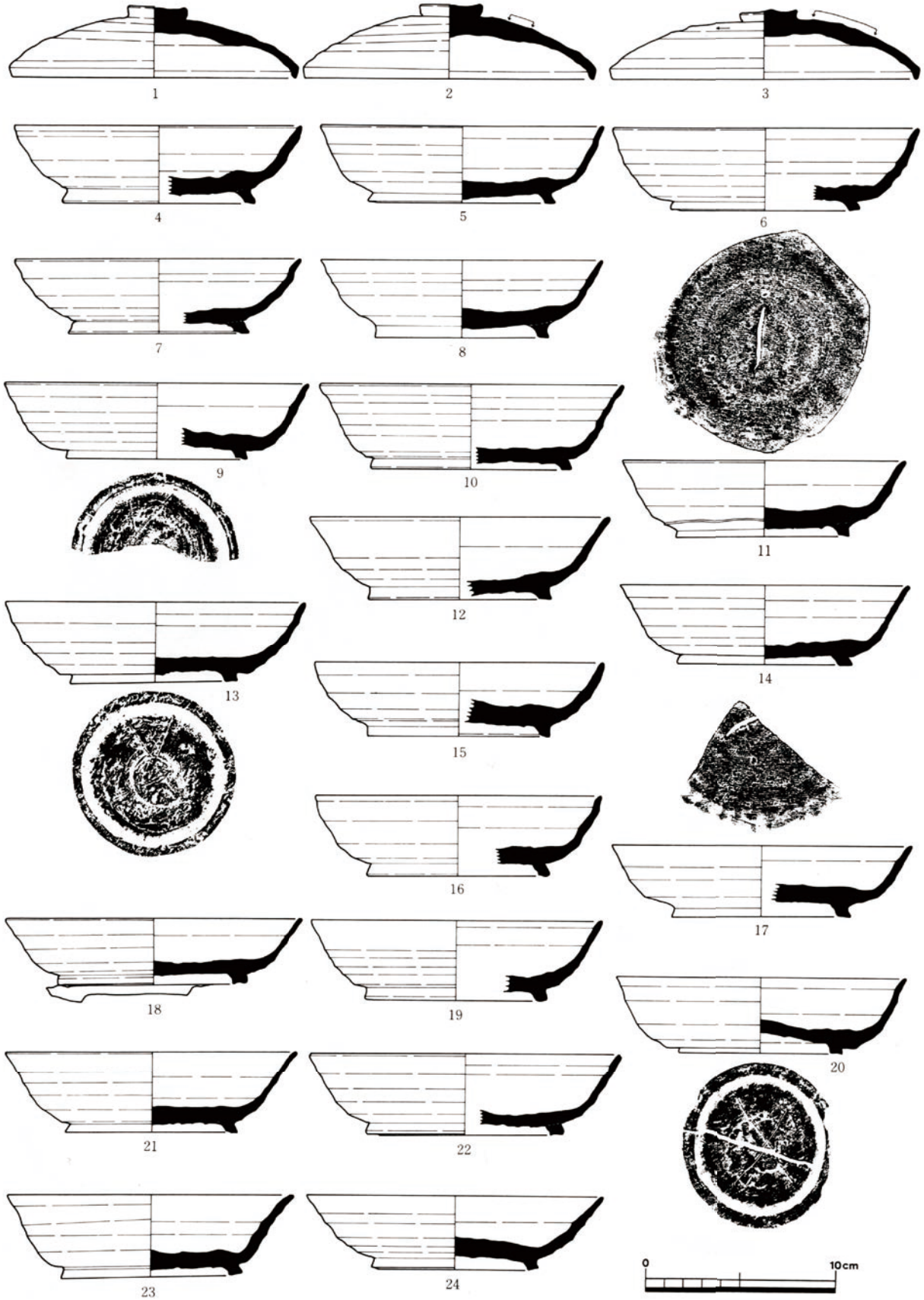
第16図９は横瓶。やや細目の頸部から強く外反する口縁部へ至るもので、口縁端部は丸く仕上げている。

第16図10・11は短頸壺。10はＣ類に属する小型品で、口径よりも胴部径が大きいような潰れた器形を呈する。11は胴部が球形を呈するＢ類に属するもので、胴部の調整は甕と共通する。

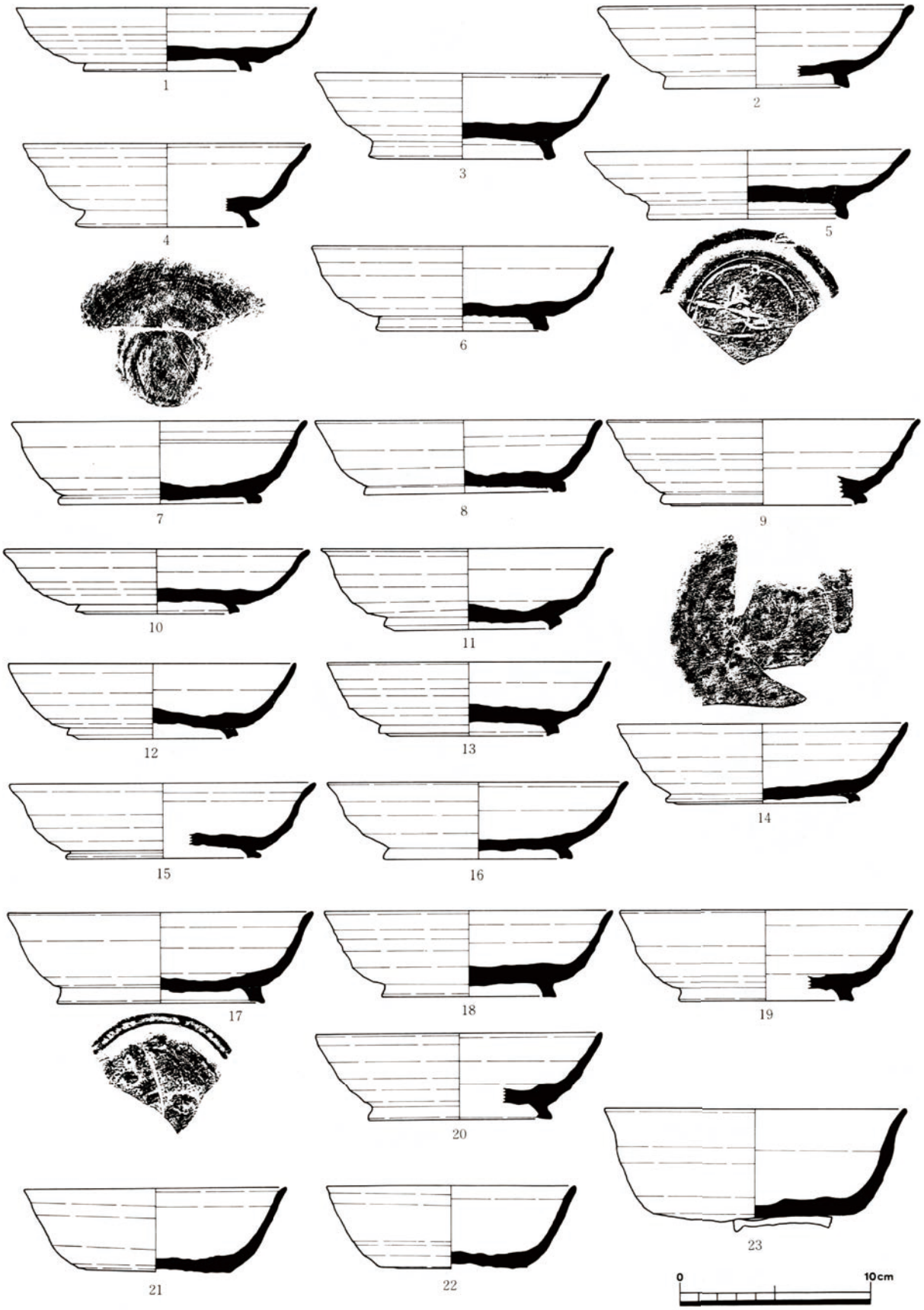
第16図12～18は甕で、Ｂ類（14～18）とＣ類（12）がある。Ｂ類は口縁端部が平坦なものであるが、14・17のような端部の内側が肥厚するものと15・18のような端部外側が肥厚するものとがある。また、13のような土師器的な器形と調整（内面ヘラ削りまたは磨き）をもつ異なった製作技法をもつものもある。



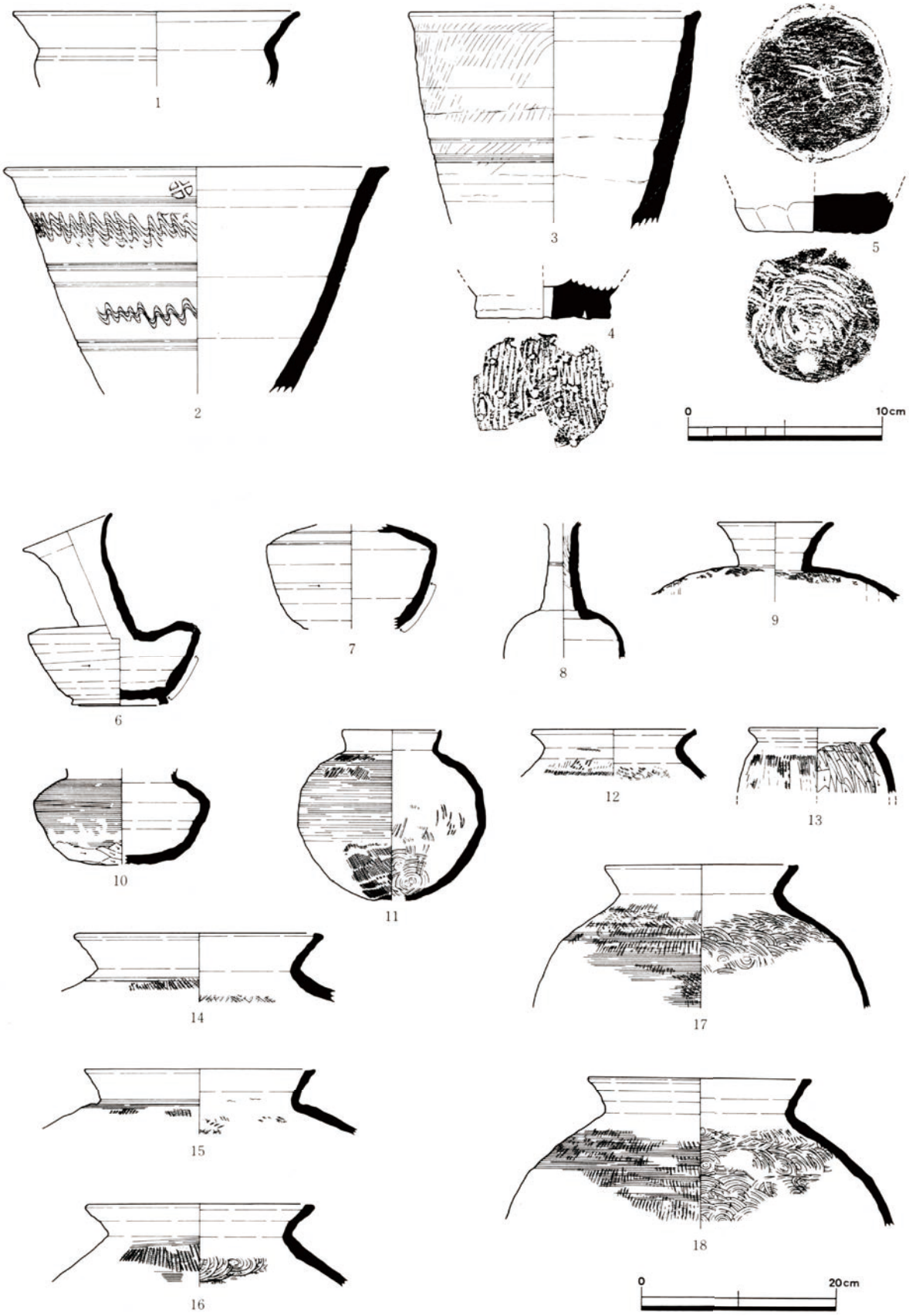
第13図　1号窯跡灰原出土遺物（S＝1/3）



第14図　1号窯跡灰原出土遺物（S=1/3）



第15図　1号窯跡灰原出土遺物（S＝1/3）

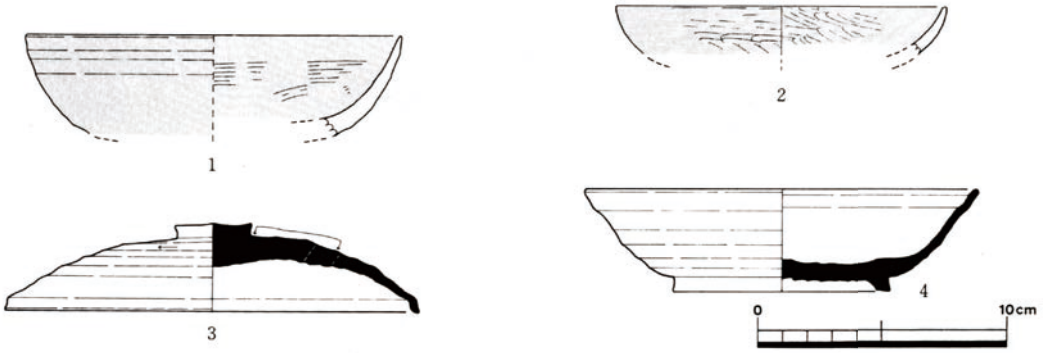


第16図　1号窯跡灰原出土遺物(1～4はS＝1/3、5～18はS＝1/6)

（7）土坑出土須恵器（第17図）

3基の土坑から出土した須恵器は138点を数えるが、ほとんどが破片で灰原や窯体出土のものと接合するものが多いことから、灰原からの流れ込みの製品と考えられる。その中でも比較的出土量が多かった3号土坑の出土須恵器について触れておきたい。

復元実測できたものは3・4の坏蓋と有台坏の2点だけである。3はＡⅠ類に属する折り返し口縁のもので、緑色の自然釉が厚く付着している。折り返しの形態は1類で薄く長く伸びる。4はＢⅠ類に属するもので、高台の形態は2類である。



第17図　2号窯跡(1･2)及び3号土坑(3･4)出土遺物（S＝1/3）

（8）甕の胴部叩き文様（第18・19図、写真図版9）

ここで、甕の胴部叩き文様について全体を通してみて行きたいと思う。甕の胴部叩きについては、最近、内堀信雄氏の研究（内堀1988）が目を引く。氏の分類に基づいて、当窯跡群の甕を分類し、検討してみたいと思う。

叩き文様には、外面で平行線文と格子文（K類）があり、平行線文には木目が掘り込みに対し直行するもの（Ｈａ類）、木目が右上がりに斜行するもの（Ｈｂ類）、木目が左上がりに斜行するもの（Ｈｃ類）がある。内面では同心円文があり、木目の見られないもの（Ｄａ類）と年輪状の木目の見られるもの（Ｄｂ類）が存在する。また、同心円文と平行線文とが融合したようなもので木目の見られないもの（ここでは仮にＤＨ類とする）も存在する。

この叩き文様の組み合わせは、3つのタイプに大別される。文様1類は外面Ｈａ類＋内面Ｄａ類を基本として、僅かに外面Ｈｂ類やＨｃ類がこれに混じる。この文様のものは、外面に一部カキ目調整が施されるものもあるが、一般的ではない。甕Ａ・Ｂ類のどちらにも用いられる文様である。文様2類は外面Ｈｃ類＋内面上半Ｄｂ類、下半ＤＨ類が施されるもので、外面にはカキ目調整を施すものを基本とする。甕Ｂ類にのみ認められる文様である。このほかに、外面Ｈａ類＋内面Ｄａ類を基本として外面Ｋ類がこれに混じるタイプ（文様3類）のものもある。これは外面にカキ目調整と内面にナデ調整を著しく施すもので、甕Ｃ類にのみ認められる文様である。

出土地別に見ると、Ⅰ次床（Ⅱ次床焼台の一群と接合関係にあるため、これも含める）では総て文様1類に属するもので、外面Ｈａ類＋内面Ｄａ類のもの（第18図1～6・8・9）と外面Ｈｂ類＋内面Ｄａ類のもの（第18図7）がある。Ⅱ次床では文様2類（第18図10～14）のみと思われる。文様1類のものが僅かに認められるが、焼台の可能性が大きい。Ⅱ次床覆土出土のものも文様2類（第18図15・16）が主体的で、焼台と思われるような文様1類が僅かに認められる程度であり、Ⅱ次床の製品と共通する。灰原及び前庭部では文様1類（第19図1～8）、

第18図　須恵器甕胴部叩き文様（S＝1/2）

第19図　須恵器甕部叩き文様（S=1/2）

文様２類（第18図17・18、第19図９～15）、文様３類（第19図16～20）がそれぞれ46%、45%、９%の割合で存在する。

最後に年代性と地域性について若干触れておきたい。文様１類のようなＤａ類は８世紀第１四半期以前の時期に北陸に一般的に見られる文様であるのに対し、文様２類はこの時期に共存して見られるものの、その量は少なく、一部の窯跡群[2]で見られる程度である。この時期はＤａ類以外はＤｂ類が従的に認められる程度であり、Ｄａ類で統一された汎北陸的な様相を呈している（内堀1988）。このような状況の中で、当窯跡のＤｂ類つまり文様２類が文様１類とほぼ同率の生産を行っていることや、文様１類と基本的には同じ文様をもつがナデやカキ目調整が著しい文様３類のものが一定量生産されていることは、かなり特質な様相として考えることができ、異なった系譜の技術導入があった可能性をもつ。

第２節　土 師 器

当遺跡の土師器は総破片数で10点と少なく、２号窯跡（土師器窯）、１号窯跡Ⅱ次床、灰原等から出土している。１号窯跡Ⅱ次床から出土した完形の甕を除けば、総て２号窯跡で焼成された製品と考えられる。以下に説明を加える。

（１）１号窯跡Ⅱ次床出土土師器（第図10、写真図版８）

Ⅱ次床の床面に伏せた形で完形の甕が１個体だけ出土している。ほぼ球形を呈する胴部から口縁部で短く外反する器形を呈するもので、器高14.9　程度の小型の甕である。胴部調整にカキ目やヨコナデ調整が施されており、ロクロ土師器として定義づけられるもの[3]の範疇に入ると考える。

（２）２号窯跡出土土師器（第17図１・２、写真図版８）

２号窯跡の床面から５点とその周辺の灰原等から４点の破片が出土している。いずれも内外面に赤色塗彩を施す埦で、ほとんどが身の浅い埦形を呈する無台のものと考えられる。調整技法は器面剥落のものが多いため詳細が不明であるが、ヘラ磨き調整のものが一般的であろう。

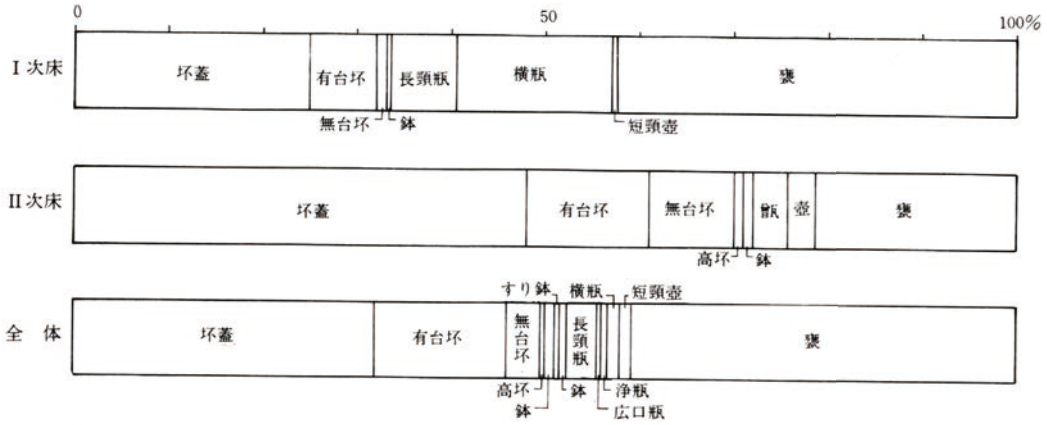
第３節　　小　　結

以上のように、当遺跡出土遺物の説明をおこなってきたわけであるが、まず、１号窯跡の須恵器全体の様相について述べ、次にⅠ次床とⅡ次床の様相の差異について検討を加えてみたいと思う。

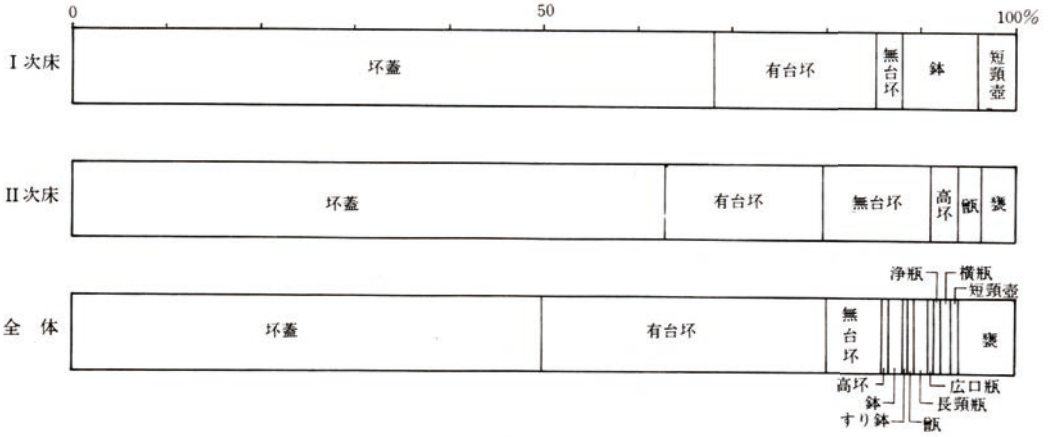
器種の構成は、第20図のグラフのとおり坏蓋と坏身の供膳器が破片数計測法（５割）、口縁部計測法（８割以上）ともにかなり高い比率を占める。次いで多いものは甕、長頸瓶などで、一般的にこの時期のどの須恵器窯跡にも見られるような器種構成の比率を示すと言えよう。Ⅰ次床、Ⅱ次床の床面遺物の構成比率に関しても供膳器が高い比率を占めることは、全体の様相と同じである。しかし、特に坏蓋の量が多い状況がみられる。これは焼台として使用されたものがその半数を占めることから考えれば、当然の結果と言えよう。

次に各器種個々の様相について述べてみたい。まず、坏蓋についてだが、返りをもつ２つの破片を遺物の説明で述べたとおり１号窯跡の製品から除外すれば、総て折り返し口縁のものである。ＡⅠ類、ＢⅠ類、ＢⅡ類の３種が存在する。主体となるのは山笠状に器高の高いＡⅠ類と天井部に平坦面をもつＢⅠ類で、ＡⅠ類は口径14～16cmに、ＢⅠ類は口径16～18cmに法量がはっきりと分かれる。そして、ＡⅠ類には緑色自然釉の着くもの（Ⅱ次床でｃグループとした

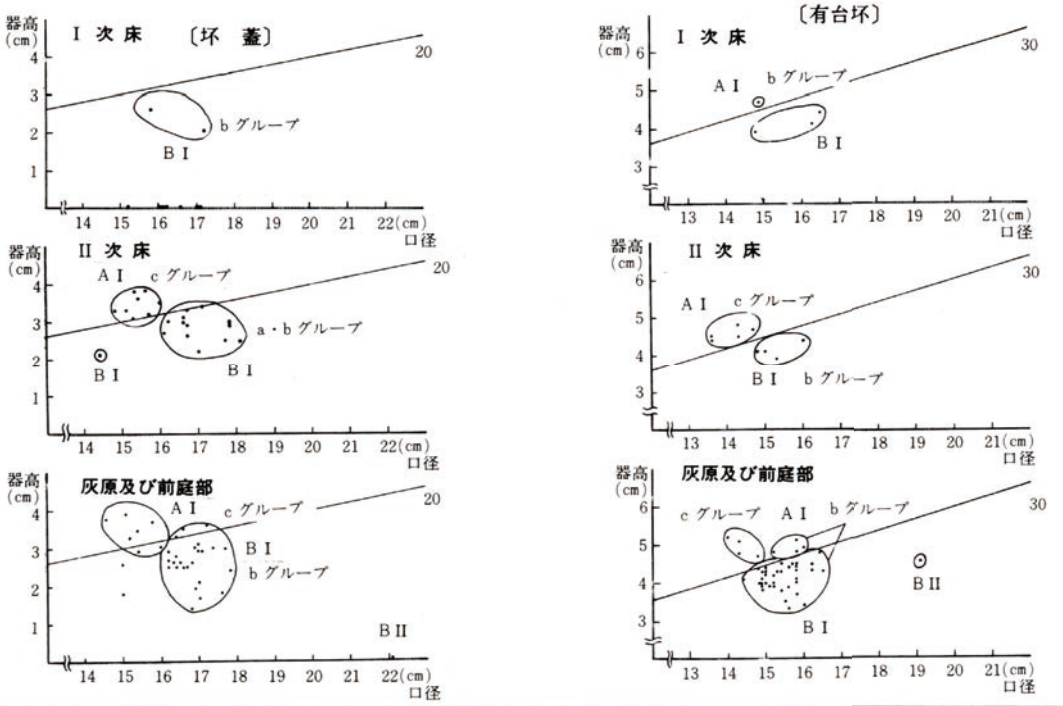
〔破片数計測法による１号窯跡出土須恵器の器種の比率〕



〔口縁部計測法による１号窯跡出土須恵器の器種の比率〕



第20図　須恵器の器種構成比率

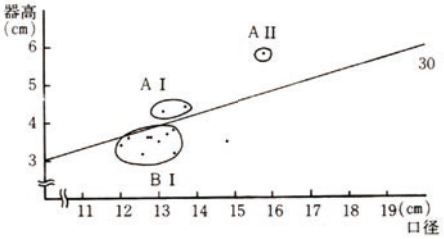


第21図　須恵器蓋坏法量分布図

もの）が大半で、口縁端部が短く厚い５類のものが多いのに対し、ＢＩ類には緑色自然釉の着くものは無く、口縁端部も１類や２類の長いものが主体となる。この２つは明らかに系譜の異なるもので、編年上序列できるものとは考え難い。このほかに法量の異なるＢⅡ類が１点だけ出土している。

有台坏も坏蓋と同様にＡＩ類、ＢＩ類、ＢⅡ類の３種が存在する。しかし、この３つがそのまま坏蓋のものに総て対応する訳ではない。ＡＩ類は坏蓋と同様の緑色自然釉が着き、口径が14～15cm程度のもの（以後ＡＩ類①とする）と緑色自然釉が付着せず、口径が15～16cm程度のもの（以後ＡＩ類②とする）とがあり、前者では高台形態５類が、後者では１類が付く傾向をもつ。そして、ＡＩ類①が坏蓋ＡＩ類のものと、ＡＩ類②が坏蓋ＢＩ類のものとセット関係にあると考える。坏蓋ＢＩ類はこのほかに有台坏ＢＩ類ともセットをなすと思われる。ＢＩ類は口径が16～18cmで、２類の高台が付き、口径やしっかりした形態の高台が付くことでＡＩ類②と共通点をもつ。ＢⅡ類は坏蓋ＢⅡ類とセットをなすと考えられるもので、ＡＩ類、ＢＩ類とはかなり口径の隔たりがあり、２法量の器種が存在することは事実である。しかし、これらは１点だけの出土であり、総体的には１器種＝１法量の原則を守っている坏群であると考えたい。

無台坏はＡＩ類、ＡⅡ類、ＢＩ類の３種がある。ＢＩ類は口径が12～14cm程度で、体部と底部の境が不明瞭な厚手の製品である。これに対し、ＡＩ類は口径では差異は無いが、底部が平底を呈し、やや薄手の製品で、２つが異なった様相を呈す。また、法量の異なるものでＡⅡ類が一点だけ存在し、法量分化の感を匂わせる。しかし、これも有台坏等と同様、全体の様相としては１器種＝１法量の原則は守っているものとして評価できよう。



第22図　須恵器無台坏法量分布図

以上の坏類は明らかに２つの系統の土器が存在している。それは坏蓋ＡＩ類＋有台坏ＡＩ類①のセット及び無台坏ＡＩ類・ＡⅡ類の一群（Ａ群）と坏蓋ＢＩ類＋有台坏ＡＩ類②・ＢＩ類のセット及び無台坏ＢＩ類の一群（Ｂ群）で、後者が北陸で一般的に見られる器形である。Ａ群の系譜については後で述べるとして、Ｂ群土器の、坏蓋が折り返し口縁だけで、口縁端部が長く伸びるものが多いこと、有台坏の高台が長めで、しっかりした作りのものが多いこと、無台坏の底部がやや丸味をおびること、１器種＝１法量を原則としていることなどから判断すれば、平城編年Ｉ期に併行する様相として位置付けられよう。

次に、鉢として扱った、頸部で「く」の字に屈曲する器形のものについて若干触れておきたい。この器種は櫛描き波状文の施文を除けば、北陸地方の窯跡において出土量が少ないものの、似たような器形のものが出土しており、坏や小壺として扱われている[(4)]。しかし、いずれの窯跡も８世紀の第２四半期に位置付けられているもので、当窯跡よりも一型式新しく位置付けられる。このような器種の初源的なものとして位置付けられるかもしれない。

壺瓶類は出土量が少なく多くは語れないが、比較的出土量が多い長頸瓶について触れておきたい。口頸部は筒状に細く伸び、口縁部で外反して口縁端部を丸く仕上げる。胴部はそろばん玉状になるものもあるが、胴部上位に最大径をもって屈曲部より上が平坦になるものが一般的である。高台は比較的短くなり、脚状になるものは無い。当窯跡の前の段階では見られない器形であり、この時期から宮都的な器形が導入されたものと評価できよう。また、口頸部１点の破片ではあるが、広口瓶が出土している。口縁部は著しく外反し、端部を平坦に仕上げている。

広口瓶の出現時期については当窯跡の時期つまり平城Ⅰ期併行とする考え（吉岡1983）とこれに後続する平城Ⅱ期併行とする考え（田嶋1988）がある。しかし、当窯跡で現に出土しており、それに畿内の陶邑窯跡群でも平城Ⅰ期併行には出現していること[5]から考えれば、出現期を当該期に求めることが妥当であり、長頸瓶と共に宮都的器種として導入されたものと評価すべきではなかろうか。

以上、個別の器種から当窯跡群の編年的な位置付けを考えてきたわけであるが、次にⅠ次床（Ⅱ次床の焼台も含める）とⅡ次床の様相及びその時期差について述べてみたい。供膳器についてはⅠ次床で坏蓋ＢⅠ類＋有台坏ＢⅠ類・ＡⅠ類②のセットと僅かに無台坏の破片、つまりＢ群土器で占められる。これに対し、Ⅱ次床ではＡ群土器が主体的で、坏蓋ＢⅠ類＋有台坏ＢⅠ類のセットと無台坏ＢⅠ類のＢ群土器が１～２割出土している。この中から、北陸一般の様相とは異なるⅡ次床のＡ群土器を除外して考えれば、Ⅰ次床とⅡ次床との間で、若干の形態的な差異を見ることができる。Ⅰ次床では坏蓋口縁端部に薄くて長い形態が多いこと、有台坏にＡⅠ類②が存在し、高台の形態が高いものやしっかりしたものが多いこと等の様相に対し、Ⅱ次床では坏蓋口縁端部に薄くて長い形態は存在せず、やや厚い形態が主流であること、有台坏にＡⅠ類②はなく、高台の高い形態は存在しないことといった様相をもつ。Ⅰ次床の様相は飛鳥Ⅳ期併行の折り返し口縁坏蓋＋有台坏の様相を色濃く残したものと考える事ができ、平城Ⅰ期併行の中でも古い時期、能美窯跡群における莇生城山奥窯段階（木立1985）に位置付けられる。Ⅱ次床の様相は上記の様相がやや崩れたものとして評価できるが、形態的にはまだしっかりしており、無台坏も器高の高いものが主体的であることから、Ⅰ次床より後出する様相ではあるが、型式を画するものとは考えられない[6]。この坏類の編年については考察で詳細を述べる。

供膳器の他に床面から出土したものとしては甕が挙げられるが、これも前述したとおり、Ⅰ次床とⅡ次床とでは異なった様相を呈する。Ⅰ次床では叩き文様１類、Ⅱ次床では叩き文様２・３類といった様相の違いははっきりと転換しているものであり、供膳器から求められたⅠ次床とⅡ次床の僅かの時期差から考えれば、同じ叩き道具を採用しなくなったという製作段階での大きな転換があったものと考えられる。これは供膳器でも見られた大きな転換、つまり、１号窯跡の築窯当時での北陸で一般的に見られる様相からⅡ次床時での北陸では一般的でない様相への転換は、異なる技術の導入または異なる技術を有した工人の介入があったことを意味しているのではないだろうか。

それでは、Ⅱ次床の供膳器Ａ群土器や甕叩き文様２・３類の土器はどのような系譜がたどれるのだろうか。同時期の東海と畿内の様相を見てみたい。

東海地方の尾張猿投山西南麓古窯跡群や美濃洲衛古窯跡群[7]では天井部が丸く山笠状に開く坏蓋が折り返し口縁坏蓋の出現時から継続的に見られ、甕の胴部叩き文様２類のような年輪状に木目の残る同心円文が美濃洲衛古窯跡群の尾崎大平１号窯跡において見られるようである。以上の２点においては似た様相をもっているが、坏蓋に伴う有台坏の形態（猿投窯・美濃洲衛窯ともに底部が厚く下に突出する器形[9]、底部に入念なヘラ削りを伴う、顕著な法量分化などの特徴が見られる）や甕の仕上げの調整（猿投窯、美濃洲衛窯にはカキ目調整が見られない）ではかなり異なった様相を示しており、ストレートに東海地方にその系譜を求めることはできない。

次に、畿内地方の様相についてだが、古くから一大窯跡群として大きな勢力を保ってきた和泉陶邑窯を例にとってみたい。中村編年（中村1981）のⅣ型式１段階が当該期にあたると考えられるが、この時期の窯跡[10]の土器は有台坏の底部が平坦であることと甕胴部に外面カキ目調整

及び内面ナデ調整を施すといった類似点以外は共通する部分がなく、系譜を同じくするものとは考えられない。それよりも供膳器A類土器や甕叩き文様1類との共通点が多く、これらの土器群が畿内からの系譜上の流れをもつものとして位置付けられよう。

以上、東海・畿内地方の様相を見てきたわけだが、Ⅱ次床の土器群の直接的な系譜を求めることはできなかった。しかし、Ⅱ次床の土器群を特徴付ける天井部の山笠状に開く坏蓋形態や甕胴部叩き文様Ｄｂ類は尾張・美濃地方、特に美濃洲衛古窯跡群に求められるようであり、ストレートな製作技法の導入でなかったとしても、根本的な系譜は当地に求めることができるかもしれない。このⅡ次床の土器群は先にも述べたように、製作工人レベルでの技法導入によって生まれたもの、つまり美濃洲衛古窯跡群の系譜をもつ技法と陶邑的な（北陸的）技法がどこかで融合され、当窯跡にもたらされたと考えたく、当窯跡在地の製作工人が在地の技法に美濃洲衛窯的な技法を導入させて作り出したものとは考えたくない。つまり、Ⅱ次床の操業段階で、Ⅰ次床操業段階の製作工人とは異なる技術系譜をもつ工人が、介入してきたものと考える。しかし、その系譜がはっきりしない以上、ただの空想でしかないのかもしれないが、問題点を残しつつも仮説を提示してみた。今後、東海地方特に美濃洲衛窯や尾張猿投窯の様相をはっきりと把握した後、再考してみたいと考える。

註

（1）今回の報告で、すり鉢としたものは篠原遺跡器種分類（田嶋1987）の中で、鉢Ｆ類とされたものであり、以下に篠原遺跡の・・・・・・・類と記したものもこれに基づく。

（2）南加賀古窯跡群の中では、戸津六字ケ丘２・４号窯跡（宮下1987）でＤｂ類の存在が確認されているが、その量比は主体的なものとは言いがたく、桃の木山１号窯跡の様相と同質のものとは考えがたい。

（3）北野氏が煮沸形態土師器について考察されたもの（北野1986）の中で、甕ＤⅡ類（ロクロ成形・調整を伴う小型品）として分類されたものである。

（4）小杉流団NO16号遺跡１・２号窯跡灰原において、かなり形態上似ているものが数個体出土しており、報告では坏Ｂとして扱われている（上野他1980、山本他1986）。また、辰口の来丸サクラマチ１号窯跡最終床でも数個体出土している（平田1984）が、体部の形態が壺に近いもので、この器種と同系統のものであるかはまだ問題が残る。

（5）和泉陶邑窯では、当該期に併行すると思われる中村編年　型式１段階の窯跡、ＫＭ269号窯跡、ＫＭ226号窯跡で広口瓶（壺）が出土しており（中村他1976）、中村浩氏もこの時期の器種組成として広口瓶を組み入れている（中村1981）。

（6）桃の木山１号窯跡の編年は以前木立氏によって３期編年がなされている（木立1985）。その内容はⅠ次床を１段階、Ⅱ次床焼台を２段階、Ⅱ次床製品を３段階とし、それぞれ湯屋窯３段階の新～莇生城山奥窯の古、莇生城山奥窯段階の新、来丸サクラマチ窯１段階に併行するものとされている。しかし、この編年案はⅠ次床とⅡ次床焼台が同一のものであること（２者の間で接合するものが多い）からⅠ次床とⅡ次床の２期編年に訂正されるものである。また、Ⅰ次床とⅡ次床の編年的な位置付けに関しても、ここで述べたようにⅠ次床は莇生城山奥窯段階として差し支えないが、Ⅱ次床を来丸サクラマチ窯１段階、つまりサクラマチ３号窯跡に併行するものとは考えられず、莇生城山奥窯段階の新しい様相または来丸サクラマチ３号窯跡との過渡的段階として位置付けたい。

（7）尾張猿投窯の岩崎17号窯式（楢崎1983）及び美濃洲衛窯の尾崎大平１号窯期（渡辺1984）から折り返し口縁の坏蓋が出現するようであるが、その出現する段階からいずれも天井部が丸く山笠状に開く形態をしており、当窯跡と併行期にあると思われる岩崎41号窯式（猿投窯）、地獄洞窯期（美濃洲衛窯）は勿論のこと、９世紀に入るころまで、その作風を残す。ただし、尾張猿投窯と美濃洲衛窯の坏蓋の基本的な形態は同じであっても両窯には若干形態的な差異があり、確実に分けられるようである(内堀信雄氏よりご教示)。

（8）内堀信雄氏よりご教示を受けた。なお、尾崎大平１号窯跡は渡辺編年のⅢ期後半、実年代では７世紀第４四半期に位置付けられている（渡辺1984）。

(9) この底部が突出する器形を特徴とするが、総てがこの形態というわけではなく、底部が平坦なものも一定量存在している。

また、有台坏についても坏蓋と同様、尾張猿投窯と美濃洲衛窯とでは同一の形態を示すわけではなく、若干地域的な差異をもつようである。

(10) 良好な資料としてはＴＫ304号窯跡（井藤他1979）、ＴＫ315号窯跡（井藤・野上他1982）などが挙げられるが、いずれも中村編年では数段階にまたがるもので、Ⅳ型式１段階の単独期に位置付けられる窯跡資料殆どないようである。丹波地方になってしまうが、丹波周山窯址３号窯跡３次・４次操業の一括須恵器（宇野他1982）や消費地の資料ではあるが、平城宮ＳＤ1900Ａ出土の須恵器一括資料（奈良国立文化財研究所1978）をその良好な資料として挙げたほうが良いかもしれない。

引用文献

井藤徹他　1979　『陶邑Ⅳ』　財団法人大阪文化財センター

井藤徹・野上丈助他　1982　『陶邑Ⅴ』　財団法人大阪文化財センター

上野章他　1980　『小杉流通業務団地内遺跡群－第２次緊急発掘調査概要－』　富山県教育委員会

内堀信雄　1988　「須恵器甕類に見られる叩き目文について」『シンポジウム　北陸の古代土器研究の現状と課題（報告編）』　石川考古学研究会　北陸古代土器研究会

宇野隆夫他　1982　『丹波周山窯址』　京都大学文学部考古学研究室

北野博司　1986　「加賀における７～８世紀の煮沸形態土師器」『佐々木ノテウラ遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター

木立雅朗　1985　「能美窯跡群の須恵器編年（１）北群」『辰口町湯屋古窯跡』　辰口町教育委員会

田嶋明人　1987　「篠原遺跡の土器組成とその特徴」『篠原遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター

中村浩他　1976　『陶邑Ⅰ』　財団法人大阪文化財センター

中村浩　1981　「出土須恵器の編年的考察」『和泉陶邑窯の研究』　柏書房

奈良国立文化財研究所　1978　『平城宮発掘調査報告Ⅸ』

楢崎彰一　1983　「猿投窯の編年について」『愛知県古窯跡群分布調査報告（Ⅲ）』　愛知県教育委員会

平田天秋　1984　『辰口町来丸サクラマチ窯跡（資料編）』　石川県立埋蔵文化財センター

宮下幸夫　1987　『戸津六字ケ丘古窯跡発掘調査概要報告書』　小松市教育委員会

山本正敏他　1986『小杉流通業務団地内遺跡群－第６次緊急発掘調査概要－』　富山県教育委員会

吉岡康暢　1983　「奈良平安時代の土器編年」『東大寺領横江庄遺跡』　松任市教育委員会　石川考古学研究会

渡辺博人　1984　「美濃洲衛古窯跡群における須恵器編年」『美濃洲衛古窯跡群資料調査報告書』　各務原市教育委員会

〔土 器 観 察 表〕

須恵器・土師器色調一覧

須恵器	①	灰白色
	②	青味がかった灰白色
	③	褐色がかった灰白色
	④	灰色
	⑤	暗灰色
	⑥	青灰色
	⑦	暗青灰色
	⑧	黄色味がかった灰白色
	⑨	赤味がかった灰白色
	⑩	赤味がかった灰色
	⑪	赤灰褐色
	⑫	赤味がかった暗灰色
土師器	⑬	黄灰白色
	⑭	淡い橙褐色
	⑮	橙褐色

須恵器・土師器胎土一覧

須恵器	Ⓐ	白色微砂粒(φ 1㎜以下)を少量含む
	Ⓑ	白色微砂粒と黒色粒子を少量含む
	Ⓒ	白色微砂粒を通有量含む
	Ⓓ	白色微砂粒と黒色粒子を通有量含む
	Ⓔ	白色砂粒(φ 1～2㎜)を少量含む
	Ⓕ	白色砂粒と黒色粒子を少量含む
	Ⓖ	白色砂粒と赤色粒子を少量含む
	Ⓗ	白色砂粒を通有量含む
	Ⓘ	白色砂粒を多量含む
	Ⓙ	白色砂粒と小石(φ 2㎜以上)を少量含む
	Ⓚ	白色砂粒と小石と黒色粒子を少量含む
	Ⓛ	白色砂粒と小石を通有量含む
	Ⓜ	白色砂粒と小石と黒色粒子を通有量含む
	Ⓝ	白色砂粒と小石を多量含む
	Ⓞ	白色砂粒と小石を極めて多量含む
土師器	Ⓟ	砂粒を少量含む
	Ⓠ	砂粒と小石を多量、赤色粒子を少量含む

1号窯跡Ⅰ次床出土須恵器

図版番号	器種	法量(cm)	成形調整技法	残存率	色調 胎土	焼成	備考
第8図 1	坏蓋	口径15.8 器高 2.6	天井部ヘラ削り 他はヨコナデ	⅕	⑤ Ⓐ	良好	ゆがみ有り 内外面に自然釉
第8図 2	〃	口径15.2	平井部ヘラ削り 内面中央ナデ 他はヨコナデ	¼	外④ 内① Ⓞ	良好	
第8図 3	〃	口径17.2 器高 2.0	天井部に一部ヘラ削り 他はヨコナデ	½	外① 内⑤ Ⓗ	良好	ゆがみ激しい 内外面に自然釉付着
第8図 4	〃	口径17.1	天井部ヘラ削り 内面中央ナデつけ 他はヨコナデ	⅜	④ Ⓒ	良好	ゆがみ激しい 内外面に自然釉付着
第8図 5	〃	口径15.2	天井部ヘラ削り 他はヨコナデ	口縁部のみ⅙	⑨ Ⓖ	やや不良	
第8図 6	〃	口径16.1	天井部ヘラ削り 他はヨコナデ	⅙	外⑤ 内③ Ⓖ	良	
第8図 7	〃	口径16.6	ヨコナデ	口縁部のみ1/16	⑩ Ⓔ	やや良	
第8図 8	〃	口径17.0	ヨコナデ	口縁部のみ1/16	⑫ Ⓔ	やや良	
第8図 9	〃	口径16.2	ヨコナデ	口縁部のみ⅛	③ Ⓗ	良	
第8図 10	〃	口径16.0	ヨコナデ	口縁部のみ⅛	⑥ Ⓐ	良	
第8図 11	〃	口径17.1	ヨコナデ	口縁部のみ1/7	外② 内③ Ⓔ	良	
第8図 12	有台坏	口径14.8 器高 3.9 台径10.4	底部回転ヘラ切り 後丁寧なナデ 他はヨコナデ	ほぼ完形	外⑩ 内④ Ⓞ	良	ゆがみ有り Ⅱ次床焼台(?)と接合
第8図 13	〃	口径16.3 器高 4.1 台径10.5	底部回転ヘラ切り 後ナデ 他はヨコナデ	⅜	外⑤ 内④ Ⓘ	良	僅かにゆがみ Ⅱ次床焼台(?)と接合
第8図 14	〃	口径16.5 器高 4.4 台径10.4	底部回転ヘラ切り 後ナデ 他はヨコナデ	⅓	⑩ Ⓝ	やや不良	ゆがみ有り
第8図 15	〃	口径14.9 器高 4.7 台径 9.4	底部切り離し後ナデ 他はヨコナデ	⅕	⑤ Ⓒ	良好	
第8図 16	鉢	口径14.4	ヨコナデ	¼	④ Ⓔ	良	口縁部にゆがみ有り
第8図 17	壺蓋	口径12.4 器高 4.1	天井部ヘラ削り 他はヨコナデ	⅔	外6 内⑩ Ⓚ	良	ゆがみ有り 内面に土器片と灰が付着
第8図 18	短頸壺	口径12.4 肩径18.4	ヨコナデ 胴部下半にヘラ削り?	¼	外④ 内⑤ Ⓘ	良好	口縁部にゆがみ有り 砂粒溶着
第8図 19	長頸壺	頸径 6.0 肩径17.2	肩部ヘラ削り 肩部ヨコナデ	胴部のみ完形	⑨ Ⓗ	やや良	

1号窯跡Ⅱ次床出土須恵器

第9図 1	坏蓋	口径16.6 器高 3.1	天井部ヘラ削り 内面中央ナデツケ 他はヨコナデ	¼	⑩ Ⓗ	良好	
第9図 2	〃	口径17.8 器高 2.9	天井部ヘラ削り 内面中央ナデツケ 他はヨコナデ	¼	⑤ Ⓛ	良好	外面に白色釉 ゆがみ有り
第9図 3	〃	口径17.7 器高 2.5	天井部ヘラ削り 内面中央ナデツケ 他はヨコナデ	⅔	⑫ Ⓗ	良好	外面に黄白色釉厚く付着 ゆがみ有り
第9図 4	〃	口径17.8	天井部ヘラ削り 内面中央ナデツケ 他はヨコナデ	½	外⑨ 内④ Ⓝ	良好	外面に黄白色釉付着
第9図 5	〃	口径17.1 器高 3.4	天井部ヘラ削り 内面中央ナデツケ 他はヨコナデ	⅓	⑤ ⑫ Ⓛ	良好	ゆがみ有り
第9図 6	〃	口径17.4 器高 3.0	天井部ヘラ削り 内面中央ナデツケ 他はヨコナデ	½	⑥ Ⓞ	良好	外面に黄白色釉付着
第9図 7	〃	口径16.6 器高 3.0	天井部ヘラ削り 内面中央ナデツケ 他はヨコナデ	½	⑤ 一部⑫ Ⓔ	良好	
第9図 8	〃	口径16.1 器高 2.7	外面に釉付着のため不明 内面ヨコナデ	⅔	内⑤⑫ Ⓗ	良好	外面に黄白色釉が厚く付着 ゆがみ有り
第9図 9	〃	口径16.7 器高 3.3	天井部ヘラ削り 内面中央ナデツケ 他はヨコナデ	½	⑫ Ⓝ	良好	外面に黄白色釉付着 ゆがみ有り
第9図 10	〃	口径16.2 器高 2.6	切り離し痕不明 内面ヨコナデ	¼	内⑤⑫ Ⓗ	良好	外面に黄白色釉厚く付着 ゆがみ有り
第9図 11	〃	口径16.2 器高 2.9	天井部ヘラ削り 他はヨコナデ	½	⑤～⑩ Ⓔ	良好	外面に黄白色釉厚く付着

図版番号	器種	法量(cm)	成形調整技法	残存率	色調 胎土	焼成	備考
第9図 12	坏蓋	口径17.0 器高 2.2	天井部ヘラ削り 内面中央ナデツケ 他はヨコナデ	⅓	⑤ 一部⑩ Ⓐ	良好	内外面に黄白色釉付着 ゆがみ有り
第9図 13	〃	口径16.2 器高 3.0	天井部ヘラ削り 他はヨコナデ	⅔	外⑤ 内⑫ Ⓗ	良好	ゆがみ有り
第9図 14	〃	口径16.7 器高 2.9	天井部ヘラ削り 他はヨコナデ	¾	⑫ Ⓗ	良好	外面に黄白色釉疎らに付着 ゆがみ有り
第9図 15	〃	口径18.1 器高 2.5	外面は釉付着のため不明 内面はヨコナデ	½	外⑧ 内⑤ Ⓗ	良好	外面に黄白色釉と土器片付着 ゆがみ激しい
第9図 16	〃	口径16.7 器高 2.5	天井部ヘラ削り 内面中央ナデツケ 他はヨコナデ	ほぼ完形	外① 内② Ⓞ	やや良	自然釉付着 内面に重ね焼き痕
第9図 17	〃	口径17.2	天井部ヘラ削り 内面中央ナデツケ 他はヨコナデ	鈕欠損以外は完形	外③ 内④ Ⓞ	良	ゆがみ有り
第9図 18	〃	口径14.4 器高 2.1	天井部ヘラ削り 内面中央ナデツケ 他はヨコナデ	⅚	① Ⓞ	良	外面に緑色の自然釉付着 ゆがみ有り
第9図 19	〃	口径16.0 器高 3.5	天井部ヘラ削り 内面中央ナデツケ 他はヨコナデ	ほぼ完形	外④ 内① Ⓑ	良好	外面に緑色自然釉一部付着 一部ゆがみ
第9図 20	〃	口径14.8 器高 3.3	天井部ヘラ削り 他はヨコナデ	完形	外④ 内① Ⓕ	良好	外面に緑色の自然釉付着
第9図 21	〃	口径15.3 器高 3.1	天井部ヘラ削り 内面中央ナデツケ 他はヨコナデ	ほぼ完形	① Ⓜ	良好	外面に一部緑色自然釉付着
第9図 22	〃	口径15.4 器高 3.6	天井部ヘラ削り 内面中央ナデツケ 他はヨコナデ	¾	外④ 内① Ⓜ	良好	外面に一部緑色自然釉付着
第9図 23	〃	口径15.6 器高 3.8	天井部ヘラ削り 内面中央ナデツケ 他はヨコナデ	完形	外④ 内① Ⓜ	良好	外面に緑色自然釉厚く付着 若干ゆがみ
第9図 24	〃	口径15.1 器高 3.3	天井部ヘラ削り 内面中央ナデツケ 他はヨコナデツケ	ほぼ完形	外⑥ 内② Ⓐ	良好	
第9図 25	〃	口径15.3 器高 3.8	天井部ヘラ削り 他はヨコナデ	ほぼ完形	④ Ⓚ	良好	外面に緑色自然釉厚く付着
第9図 26	〃	口径15.7 器高 3.2	天井部ヘラ削り 内面中央ナデツケ 他はヨコナデ	⅚	内③ Ⓕ	良好	外面に緑色の自然釉付着
第9図 27	〃	口径15.2	天井部ヘラ削り 他はヨコナデ	½	外④ 内① Ⓑ	良好	外面に緑色自然釉厚く付着
第9図 28	有台坏	口径14.3 器高 4.8 台径 9.0	底部回転ヘラ切り 後ナデ 内面中央ナデツケ 他はヨコナデ	½	外⑤ 内③ Ⓛ	良	
第9図 29	〃	口径14.7 器高 4.7 台径 9.4	底部回転ヘラ切り 後かるいナデ 他はヨコナデ	⅓	① Ⓑ	良	外面体部と内面底に緑色自然釉厚く付着
第9図 30	〃	口径14.3 器高 4.5 台径 9.0	底部不明 他はヨコナデ	⅙	④ Ⓜ	良好	外面に緑色自然釉付着 ゆがみ有り
第9図 31	〃	口径13.6 器高 4.4 台径 8.4	底部回転ヘラ切り 後ナデ 他はヨコナデ	⅙	④ Ⓕ	良好	外面に緑色自然釉付着
第9図 32	〃	口径13.6 器高 4.5 台径 8.0	底部釉付着のため不明 他はヨコナデ	⅕	④ Ⓑ	良好	外面に緑色自然釉付着 ゆがみ有り
第9図 33	〃	口径14.6	体部ヨコナデ	底部欠損の¼	⑥ Ⓙ	良好	
第10図 1	〃	口径15.0 器高 4.2 台径 9.4	底部切り離し後ナデ 内面中央ナデツケ 他はヨコナデ	⅓	外③ 内⑧ Ⓝ	やや不良	
第10図 2	〃	口径15.3 器高 3.9 台径10.4	底部回転ヘラ切り 後ナデ 内面底部ナデツケ 他はヨコナデ	⅕	外① 内③ Ⓝ	良	全体にゆがみ有り
第10図 3	〃	口径14.8 器高 4.1 台径10.2	底部回転ヘラ切り 後丁寧なナデ 内面底部ナデツケ 他はヨコナデ	⅔	外⑤ 内④ Ⓞ	良	全体にゆがみ有り
第10図 4	〃	口径16.0 器高 4.4 台径10.0	底部切り離し後ナ 内面中央ナデツケ 内面中央ナデツケ 他はヨコナデ	⅓	外⑧ 内③ Ⓝ	不良	
第10図 5	無台坏	口径12.0 器高 3.5 底径 7.8	底部回転ヘラ切り 後かるいナデ 内面底部ナデツケ 他はヨコナデ	⅓	外③ 内④ Ⓛ	良	

図版番号	器種	法量(cm)	成形調整技法	残存率	色調 胎土	焼成	備考
第10図 6	無台坏	口径12.2 器高 3.6 底径 7.6	底部回転ヘラ切り 後ナデ 内面中央ナデツケ 他はヨコナデ	⅞	③ Ⓛ	やや不良	若干ゆがみ有り
第10図 7	〃	口径12.6 器高 3.2 底径 8.2	底部回転ヘラ切り 後ナデ 内面底部ナデツケ 他はヨコナデ	¾	外⑤ ① 内① Ⓝ	良	ゆがみ有り
第10図 8	〃	口径12.7 器高 3.6 底径 8.4	底部回転ヘラ切り 後かるいナデ 内面中央ナデツケ 他はヨコナデ	ほぼ完形	外⑧ 内② Ⓛ	やや不良	
第10図 9	〃	口径13.0 器高 3.5 底径 7.9	底部回転ヘラ切り 後かるいナデ 内面底部ナデツケ 他はヨコナデ	ほぼ完形	③ Ⓛ	やや不良	若干ゆがみ有り
第10図 10	〃	口径13.4 器高 3.8 底径 8.3	底部回転ヘラ切り 後かるいナデ 内面中央ナデツケ 他はヨコナデ	⅔	② Ⓛ	やや不良	ゆがみ有り
第10図 11	〃	口径13.2 器高 3.7 底径 7.9	底部回転ヘラ切り 未調整 内面底部ナデツケ 他はヨコナデ	ほぼ完形	⑤④ Ⓜ	良	若干ゆがみ有り
第10図 12	〃	口径14.8 器高 3.5 底径 8.4	底部回転ヘラ切り 後かるいナデ 体部下半に手持ちヘラ削り 内面底部ナデツケ 他はヨコナデ	⅕	⑤ Ⓔ	良好	内面に焼砂溶着 ゆがみ有り
第10図 13	高坏	口径14.4	坏部下半部ヘラ削り後ヨコナデ 内面中央ナデツケ 他はヨコナデ	脚部欠損以外完形	⑩ Ⓞ	良	
第10図 14	甑	口径21.4 器高22.7 底径13.8	胴部中位以上刷毛調整後ヨコナデ 胴部下位平行叩き 一部カキ目調整 内面中位以上ヨコナデ、一部刷毛目 内面下位に同心円叩き	ほぼ完形	④ Ⓔ	良	ゆがみ有り
第10図 15	甕	口径12.0 器高22.8 胴径20.0	口縁部ヨコナデ 胴部上半カキ目、下半平行叩き 内面上半ナデ、下半同心円叩き	⅔	⑥ Ⓘ	良好	外面に緑色自然釉付着 ゆがみ激しい
第10図 16	〃	口径16.6 胴径21.8	口縁部及び内面ヨコナデ 胴部外面カキ目	胴部上半以上⅓	外④ 内① Ⓝ	良	外面に緑色自然釉付着 ゆがみ激しい
第10図 17	〃	口径35.4	口縁部上半に2段の櫛描き波状文、下半に刷毛調整 内面ヨコナデ	口頸部のみ⅕	② Ⓕ	良好	砂粒溶着 ゆがみ激しい Ⅰ次床と接合

1号窯跡Ⅱ次床出土土師器

第10図 18	甕	口径16.4 器高14.9 胴径17.2	口縁部ヨコナデ 胴部上半カキ目、下半は器面剝落のため不明 内面下半は刷毛調整	ほぼ完形	⑮ Ⓠ	良	外面（胴部上半以上）と内面にスス付着 若干ゆがみ

1号窯跡Ⅱ次床覆土出土須恵器

第10図 19	坏蓋	口径16.1 器高 3.0	天井部ヘラ削り 内面中央ナデツケ 他はヨコナデ	⅓	⑫ Ⓗ	良好	ゆがみ有り
第10図 20	〃	口径16.8 器高 1.4	天井部ヘラ削り 内面中央ナデツケ	⅓	外④ 内① Ⓗ	良	ゆがみ激しい
第10図 21	有台坏	口径15.2 器高 4.2 台径 9.8	底部切り離し後ナデ 他はヨコナデ	⅓	⑤ Ⓐ	良	
第10図 22	鉢	口径15.4	口縁部内面に櫛描き波状文を2段に施す 他はヨコナデ	⅙	⑥ Ⓔ	良好	
第10図 23	短頸壺	口径16.8	胴部上位にカキ目調整 胴部内面に同心円叩き 他はヨコナデ	胴部上半以上¼	④ Ⓘ	良好	

1号窯跡前庭部出土須恵器

図版番号	器種	法量(cm)	成形調整技法	残存率	色調 胎土	焼成	備考
第11図1	坏蓋	口径16.8 器高 2.6	天井部ヘラ削り 内面中央ナデツケ 他はヨコナデ	1/6	⑥ Ⓐ	良好	
第11図2	〃	口径17.0 器高 3.1	天井部ヘラ削り 内面中央ナデツケ 他はヨコナデ	1/4	⑨ Ⓐ	良	
第11図3	〃	口径22.2	天井部ヘラ削り 内面平担ナデツケ 他はヨコナデ	1/6	⑥ Ⓑ	良好	外面に自然釉付着
第11図4	有台坏	口径14.0 器高 5.2 台径 8.6	底部回転ヘラ切り 未調整 他はヨコナデ	1/2	② Ⓞ	良好	内外面に緑色自然釉付着
第11図5	〃	口径14.3 器高 5.1 台径 8.5	底部回転ヘラ切り 未調整 他はヨコナデ	1/2	② Ⓒ	良好	内面に緑色自然釉付着 ゆがみ有り
第11図6	〃	口径14.8 器高 4.7 台径 8.8	底部切り離し後ナデ 内面中央ナデツケ 他はヨコナデ	1/2	⑩ Ⓔ	良	若干ゆがみ有り
第11図7	〃	口径14.9 器高 4.3 台径 9.2	底部切り離し後ナデ 他はヨコナデ	1/5	(外④ 内① Ⓗ	良	
第11図8	〃	口径14.4 器高 4.1 台径 8.4	底部回転ヘラ切り 未調整 他はヨコナデ	1/4	① Ⓑ	良好	底面に「×」のヘラ記号有りゆがみ有り
第11図9	〃	口径15.4 器高 3.8 台径10.6	底部回転ヘラ切り 後ナデ 内面底部ナデツケ 他はヨコナデ	1/2	(外⑨ 内② Ⓑ	良好	
第11図10	〃	口径15.2 器高 3.9 台径 9.5	底部切り離し後ナデ 他はヨコナデ	2/3	(外⑥ 内② Ⓑ	良好	ゆがみ有り
第11図11	〃	口径15.9 器高 4.2 台径 9.7	底部回転ヘラ切り 後かるいナデ 他はヨコナデ	1/3	⑨ Ⓞ	良好	
第11図12	〃	口径16.4 器高 4.8 台径11.1	底部回転ヘラ切り 後ナデ 他はヨコナデ	1/2	⑥ Ⓜ	良好	外面高台付近に自然釉及び土器片付着
第11図13	〃	口径19.1 器高 4.6 台径11.7	底部ナデ 内面中央ナデツケ 他はヨコナデ 沈線を3段に施す	1/3	(外⑦ 内⑥ Ⓑ	良好	
第11図14	無台坏?	口径11.1	底部付近欠損のたれ切り離し痕不明 ヨコナデ	1/4	⑨ Ⓑ	不良	
第11図15	無台坏	口径12.8 器高 3.6 底径 7.4	底部回転ヘラ切り 後ナデ 内面中央ナデツケ 他はヨコナデ	1/4	⑨ Ⓞ	やや不良	
第11図16	〃	口径13.4 器高 3.2 底径 9.4	底部回転ヘラ切り 後ナデ 内面底部ナデツケ 他はヨコナデ	1/3	④ Ⓞ	やや良	
第11図17	鉢	口径15.2 器高 5.8 底径 9.5	底部回転ヘラ切り 後かるいナデ 体部下端に縦方向のヘラ削り? 他はヨコナデ 口頸部外面に櫛描き波状文と連続刺突文を施す	1/3	⑥ Ⓕ	良好	
第11図18	〃	口径(推)14.3 器高(推)5.2 底径 9.4	底部回転ヘラ切り 後かるいナデ 体部下端に縦方向のヘラ削り? 他はヨコナデ 頸部付近内面に櫛描き波状文を施す	1/3	② Ⓐ	良好	
第11図19	〃	口径13.4 器高 4.8	底部切り離し後ナデ 他はヨコナデ	1/5	(外⑤ 内④ Ⓐ	良	内外面に自然釉付着
第11図20	すり鉢	口径16.8	外面刷毛調整後ヨコナデ 体部中位に3条の沈線を施す 内面ヨコナデ	体部中位以上1/3残存	⑤ Ⓔ	良	
第11図21	〃	口径16.0 器高13.8 底径11.5	底部回転ヘラ切り 後ナデ 底部側線に平行叩き、その上にヘラ削りを施す 他はヨコナデ 外面に2条の沈線を2段に施す	1/4	(外⑨ 内② Ⓛ		
第11図22	壺蓋	口径17.2 器高 4.8	天井部ヘラ削り 他はヨコナデ	1/4	(外⑥ 内⑫ Ⓚ	良	若干ゆがみ有り
第12図1	広口瓶	口径18.0	全面ヨコナデ 頸部中位に2条の沈線	口頸部3/4	(外⑤ 内① Ⓞ	良	内面と外面一部に自然釉と砂粒溶着 若干ゆがみ
第12図2	長頸瓶	肩径16.8	全面ヨコナデ 頸部と肩部上位に2条の沈線を施す	口縁部と胴部下半以外1/4	⑤ 一部⑧ Ⓔ	良好	
第12図3	短頸壺	口径12.0 肩径19.6	全面ヨコナデ	口縁部～胴部下位2/3	① Ⓝ	良好	外面及び内面の一部に自然釉付着
第12図4	甕	口径14.2 胴径20.6	口縁部ヨコナデ 胴部外面平行叩き後カキ目調整 胴部内面同心円叩き後ヨコナデ	胴部上半以上1/3	(外② 内⑨ Ⓕ	良	外面と口縁部内面の一部に自然釉付着 若干ゆがみ
第12図5	〃	口径14.6 胴径20.6	口縁部及び内面をヨコナデ 胴部外面平行叩き後カキ目調整	胴部中位以上1/2	④ Ⓝ	良好	外面及び内面の一部に緑色自然釉付着 若干ゆがみ
第12図6	〃	口径24.0	口縁部ヨコナデ 胴部外面に平行叩き、内面に同心円叩き	口頸部付近1/6	(外⑤ 内④ Ⓛ	良	口縁部内面に「×」のヘラ記号有り
第12図7	〃	口径22.1	口縁部ヨコナデ 胴部外面平行叩き 内面同心円叩き	口頸部付近1/6	④ Ⓗ	良	
第12図8	〃	口径23.9 胴径40.3	口縁部ヨコナデ 胴部外面平行叩き後一部カキ目調整及びナデを施す 胴部内面同心円叩き、下方で平行叩き	口縁部～胴部下位1/3	(外④ ③ 内③ Ⓔ	やや良	ややゆがみ有り
第12図9	〃	口径23.6 胴径42.6	口縁部ヨコナデ 胴部外面平行叩き後一部カキ目調整 胴部外面の下位に一部斜格子叩き 胴部内面同心円叩き後下位のみ平行叩き				

1号窯跡灰原出土須恵器

図版番号	器種	法量(cm)	成形調整技法	残存率	色調 胎土	焼成	備考
第13図1	坏蓋	口径16.1	返り部は貼り付けによって作出。 回転ヘラ削りを体部下方まで施す 他はヨコナデ	1/12	⑥ Ⓔ	良好	内面に自然釉付着
第13図2	〃	口径14.0	返り部は貼り付けて作出 回転ヘラ削りを体部下方まで施す 他はヨコナデ	1/5	④ Ⓐ	良	内面に自然釉と砂粒溶着 若干ゆがみ
第13図3	〃	口径16.4 器高 3.3	天井部ヘラ削り 内面中央ナデツケ 他はヨコナデ	1/4	(外⑥ 内② Ⓚ	良好	若干ゆがみ
第13図4	〃	口径17.6 器高 1.8	天井部ヘラ削り 内面中央ナデツケ 他はヨコナデ	1/4	③ Ⓖ	不良	
第13図5	〃	口径16.3 器高 2.6	天井部ヘラ削り 他はヨコナデ	1/4	③ Ⓐ	良	内外面の一部に自然釉付着
第13図6	〃	口径16.5 器高 2.6	天井部ヘラ削り 内面中央ナデツケ 他はヨコナデ	2/3	⑧ Ⓜ	良好	外面一部に緑色自然釉付着 ゆがみ有り
第13図7	〃	口径16.6 器高 2.5	天井部ヘラ削り 内面中央ナデツケ 他はヨコナデ	1/3	②⑨ Ⓓ	良好	外面に砂粒溶着
第13図8	〃	口径16.9 器高 1.9	天井部ヘラ削り 内面中央ナデツケ 他はヨコナデ	2/3	④ Ⓚ	良好	外面に若干の自然釉と土器片付着
第13図9	〃	口径17.2 器高 3.6	天井部ヘラ削り 他はヨコナデ	1/3	② Ⓑ	良好	外面に緑色自然釉付着
第13図10	〃	口径17.8 器高 2.4	天井部ヘラ削り 他はヨコナデ	1/2	② Ⓕ	良	外面に自然釉付着
第13図11	〃	口径17.7 器高 3.0	天井部ヘラ削り 内面中央ナデツケ 他はヨコナデ	1/3	(外⑨ 内② Ⓔ	良	外面に自然釉付着及び重ね焼痕有り
第13図12	〃	口径15.3 器高 3.1	天井部ヘラ削り 内面中央ナデツケ 他はヨコナデ	3/4	⑦ Ⓔ	良好	若干ゆがみ

図版番号	器種	法量(cm)	成形調整技法	残存率	色調 胎土	焼成	備考
第13図 13	坏蓋	口径17.0 器高 3.0	天井部ヘラ削り 内面中央ナデツケ 他はヨコナデ	¾	(外④ 内⑥ Ⓛ	良好	ゆがみ有り
第13図 14	〃	口径16.4 器高 2.5	天井部ヘラ削り 内面中央ナデツケ 他はヨコナデ	⅔	⑥ Ⓑ	良好	外面に砂粒溶着
第13図 15	〃	口径17.0 器高 2.1	天井部ヘラ削り 内面中央ナデツケ 他はヨコナデ	¼	④ Ⓔ	良	大きくゆがみ有り
第13図 16	〃	口径16.2 器高 2.5	天井部ヘラ削り 内面中央ナデツケ 他はヨコナデ	⅚	⑥ Ⓑ	やや良	大きくゆがみ及び重ね焼き痕有り
第13図 17	〃	口径17.0 器高 1.7	天井部ヘラ削り 内面中央ナデツケ 他はヨコナデ	½	① Ⓘ	良	外面に自然釉付着 ゆがみ有り
第13図 18	〃	口径17.1 器高 2.9	天井部ヘラ削り 内面中央ナデツケ 他はヨコナデ	½	(外① 内② Ⓑ	良	外面全体に自然釉付着
第13図 19	〃	口径16.9 器高 3.0	天井部ヘラ削り 内面中央ナデツケ 他はヨコナデ	½	(外⑤ 内③ Ⓐ	良好	
第13図 20	〃	口径16.0 器高 2.6	天井部ヘラ削り 内面中央ナデツケ 他はヨコナデ	⅓	⑨ Ⓔ	良	
第13図 21	〃	口径16.2	天井部ヘラ削り 内面中央ナデツケ 他はヨコナデ	½	(外④ 内② Ⓑ	良好	若干ゆがみ有り
第13図 22	〃	口径16.4 器高 2.8	天井部ヘラ削り 内面中央ナデツケ 他はヨコナデ	⅓	⑩ Ⓔ	良好	
第13図 23	〃	口径15.0 器高 1.8	天井部ヘラ削り 他はヨコナデ	¼	⑤ Ⓛ	良好	内面一部に自然釉付着
第13図 24	〃	口径15.4 器高 2.9	天井部ヘラ削り 内面中央ナデツケ 他はヨコナデ	½	(外⑤ 内④ Ⓔ	良好	内面にヘラ記号有り ゆがみ有り
第13図 25	〃	口径16.0 器高 3.0	天井部ヘラ削り 内面平担ナデツケ 他はヨコナデ	⅓	(外④ 内① Ⓕ	良好	外面に緑色自然釉付着
第13図 26	〃	口径17.4 器高 1.7	天井部ヘラ削り 内面中央ナデツケ 他はヨコナデ	⅓	(外④ 内① Ⓓ	やや良	外面に一部自然釉付着 ゆがみ激しい
第13図 27	〃	口径15.4 器高 3.5	外面調整不明 内面中央ナデツケ 他はヨコナデ	¼	(外④ 内① Ⓑ	良	外面に緑色自然釉厚く付着
第14図 1	〃	口径14.6 器高 3.8	天井部ヘラ削り 他はヨコナデ	¾	(外④ 内① Ⓜ	良	外面に緑色自然釉付着
第14図 2	〃	口径15.1 器高 3.9	天井部ヘラ削 他はヨコナデ	¾	(外④ 内① Ⓑ	良	外面に緑色自然釉付着
第14図 3	〃	口径15.8 器高 3.7	天井部ヘラ削り 内面中央ナデツケ 他はヨコナデ	¼	① Ⓓ	良	外面に緑色自然釉付着 若干ゆがみ
第14図 4	有台坏	口径15.0 器高 4.1 台径10.1	底部回転ヘラ切り 未調整 内面中央ナデツケ 他はヨコナデ	⅜	(外⑤ 内④ Ⓚ	良好	
第14図 5	〃	口径14.9 器高 4.1 台径 9.9	底部回転ヘラ切り 後ヨコナデ 内面中央ナデツケ 他はヨコナデ	½	(外⑥ 内② Ⓘ	良好	外面一部に灰かぶり
第14図 6	〃	口径15.8 器高 4.4 台径 9.8	底部切り離し後ナデ 内面中央ナデツケ 他はヨコナデ	⅓	(外④ 内① Ⓜ	良	自然釉僅かに付着
第14図 7	〃	口径14.9 器高 4.0 台径 9.4	底部切り離し後ナデ 他はヨコナデ	⅓	(外④ 内① Ⓛ	良	
第14図 8	〃	口径14.8 器高 4.1 台径 9.2	底部回転ヘラ切り 後丁寧なナデ 他はヨコナデ	½	(外③ 内② Ⓔ	良	
第14図 9	〃	口径15.8 器高 4.0 台径 9.5	底部回転ヘラ切り 後ナデ 内面中央ナデツケ 他はヨコナデ	⅓	(外④ 内① Ⓗ	良	外面に緑色自然釉付着 ゆがみ有り 底面に「×」のヘラ記号
第14図 10	〃	口径15.7 器高 4.5 台径10.6	底部回転ヘラ切り 後ナデ 内面底部ナデツケ 他はヨコナデ	⅜	④ Ⓒ	良	
第14図 11	〃	口径14.8 器高 4.0 台径 9.1	底部回転ヘラ切り 後ヨコナデ 他はヨコナデ	⅓	(外⑤ 内⑧ Ⓐ	良	内外面にヘラ記号らしきもの有り
第14図 12	〃	口径15.6 器高 4.4 台径 9.8	底部回転ヘラ切り 後丁寧なナデ 内面中央ナデツケ 他はヨコナデ	¼	⑪ Ⓐ	良	
第14図 13	有台坏	口径15.8 器高 4.3 台径 8.8	底部回転ヘラ切り 後かるいナデ 内面中央ナデツケ 他はヨコナデ	⅓	② Ⓑ	良好	内外面の一部に緑色自然釉 底面に「×」のヘラ記号
第14図 14	〃	口径15.2 器高 4.2 台径 9.2	底部回転ヘラ切り 未調整 他はヨコナデ	½	(外⑥ 内⑩ Ⓙ	良好	
第14図 15	〃	口径15.1 器高 3.9 台径 9.6	底部回転ヘラ切り 後丁寧なナデ 他はヨコナデ	½	(外⑫ 内② Ⓐ	良	内面にヘラ記号有り
第14図 16	〃	口径15.0 器高 4.2 台径 9.6	底部切り離し後ナデ 内面中央ナデツケ 他はヨコナデ	⅜	⑤ Ⓓ	良好	若干ゆがみ
第14図 17	〃	口径15.8 器高 3.7 台径 9.4	底部回転ヘラ切り 後かるいナデ 内面中央ナデツケ 他はヨコナデ	¼	(外⑤ 内② Ⓖ	良好	内面底部にヘラ記号有り
第14図 18	〃	口径15.5 器高 3.5 台径 9.9	底部回転ヘラ切り 後粗雑なナデ 内面底部付近強いナデツケ 他はヨコナデ	⅔	(外⑥ 内② Ⓚ	良好	外面灰かぶり 底面に重ね焼きの土器片が溶着 若干ゆがみ
第14図 19	〃	口径15.4 器高 4.3 台径 9.8	底部切り離し痕不明 ヨコナデ	¼	(外⑨ 内① Ⓖ	不良	
第14図 20	〃	口径15.2 器高 4.0 台径 8.6	底部回転ヘラ切り 未調整 内面中央ナデツケ 他はヨコナデ	⅓	(外⑥ 内② Ⓑ	良	ゆがみ有り
第14図 21	〃	口径15.4 器高 4.3 台径 9.1	底部回転ヘラ切り 未調整 内面中央ナデツケ 他はヨコナデ	¼	② Ⓑ	良好	
第14図 22	〃	口径16.2 器高 4.4 台径10.2	底部回転ヘラ切り 後ナデ 内面中央ナデツケ 他はヨコナデ	½	(外④ 内③ Ⓐ	良	若干ゆがみ
第14図 23	〃	口径15.0 器高 4.3 台径 9.5	底部回転ヘラ切り 後粗雑なナデ 内面底部ナデツケ 他はヨコナデ	¾	(外⑤ 内③ Ⓙ	良	ゆがみあり
第14図 24	〃	口径15.6 器高 3.9 台径 8.8	底部回転ヘラ切り 後かるいナデ 内面底部ナデツケ 他はヨコナデ	¼	(外⑥ 内② Ⓑ	良	ゆがみ有り
第15図 1	〃	口径15.6 器高 3.3 台径 8.8	底部回転ヘラ切り 未調整 内面底部ナデツケ 他はヨコナデ	⅓	⑧ Ⓐ	良	
第15図 2	〃	口径16.5 器高 4.3 台径 9.8	底部回転ヘラ切り 未調整 内面底部ナデツケ 他はヨコナデ	⅓	⑤ Ⓙ	やや良	ゆがみ有り
第15図 3	〃	口径15.4 器高 4.5 台径 9.8	底部回転ヘラ切り 未調整 他はヨコナデ	¼	⑥ Ⓐ	良好	外面に緑色自然釉付着
第15図 4	〃	口径15.0 器高 4.4 台径 9.6	ヨコナデ	⅓	① Ⓜ	良	口縁端部に自然釉付着
第15図 5	〃	口径16.0 器高 3.6 台径10.5	底部回転ヘラ切り 後ヨコナデ 他はヨコナデ	¼	(外① 内② Ⓜ	良好	口縁部付近に自然釉付着 ゆがみ激しい
第15図 6	〃	口径15.8 器高 4.5 台径 9.0	底部回転ヘラ切り 未調整 内面底部ナデツケ 他はヨコナデ	¼	(外⑨ 内⑪ Ⓖ	不良	
第15図 7	〃	口径15.4 器高 4.3 台径10.6	底部回転ヘラ切り 未調整 内面底部ナデツケ 他はヨコナデ	¼	⑨ Ⓖ	不良	
第15図 8	〃	口径14.9 器高 3.9 台径10.6	底部回転ヘラ切り 後ナデ 内面中央ナデツケ 他はヨコナデ	½	(外⑤ 内④ Ⓔ	良	ゆがみ有り 底面にヘラ記号有り
第15図 9	〃	口径16.2 器高 4.5 台径10.8	底部欠損するため 底面の調整、切り離し痕は不明 体部ヨコナデ	⅓	⑤ Ⓙ	やや良	ゆがみ有り
第15図 10	〃	口径16.0 器高 3.4 台径 8.6	底部回転ヘラ切り 未調整 他はヨコナデ	¼	② Ⓔ	良好	外面の一部にまだら状に自然釉付着 ゆがみ有り
第15図 11	〃	口径15.3 器高 4.3 台径 9.4	底部回転ヘラ切り 後ヨコナデ 内面中央ナデツケ 他はヨコナデ	½	(外⑤ 内② Ⓑ	良好	ゆがみ有り

図版番号	器種	法量(cm)	成形調整技法	残存率	色調 胎土	焼成	備考
第15図 12	有台坏	口径15.0 器高 3.9 台径 7.8	底部切り離し後ナデ 内面底部ナデツケ 他はヨコナデ	⅜	外⑤ 内④ Ⓗ	良	若干ゆがみ
第15図 13	〃	口径14.9 器高 3.9 台径 9.5	底部回転ヘラ切り後かるいナデ 内面中央ナデツケ 他はヨコナデ	¼	外⑥ 内② Ⓙ	良好	ゆがみ有り
第15図 14	〃	口径15.2 器高 4.2 台径10.2	底部切り離し後未調整 内面中央ナデツケ 他はヨコナデ ツ	½	外⑥ 内⑫ Ⓐ	良好	若干ゆがみ
第15図 15	〃	口径16.0 器高 4.9 台径10.2	底部回転ヘラ切り後ナデ 他はヨコナデ	⅜	⑤ ④ Ⓐ	良好	若干ゆがみ
第15図 16	〃	口径15.8 器高 4.1 台径 9.9	底部回転ヘラ切り未調整 内面底部ナデツケ 他ヨコナデ	⅕	⑥ Ⓗ	良	
第15図 17	〃	口径15.8 器高 4.8 台径10.4	底部切り離し後粗雑なナデ 内面中央ナデツケ 他はヨコナデ	¼	外② 内④ Ⓚ	良好	内外面の一部に緑色自然釉付着 底面にヘラ記号有り
第15図 18	〃	口径15.0 器高 4.5 台径 9.2	底部回転ヘラ切り未調整 内面底部ナデツケ 他はヨコナデ	½	外⑤ 内② Ⓔ	良好	ゆがみ有り
第15図 19	〃	口径15.2 器高 4.8 台径 8.9	底部切り離し後ナデ 他はヨコナデ	¼	外① 内⑨ Ⓔ	やや不良	
第15図 20	〃	口径14.9 器高 4.6 台径 9.6	底部不明 他はヨコナデ	⅓	① Ⓜ	良好	内外面に緑色自然釉付着
第15図 21	無台坏	口径13.7 器高 4.4 底徒 7.4	底部回転ヘラ切り後ナデ 内面中央ナデツケ 他はヨコナデ	ほぼ完形	外⑥ 内② Ⓜ	やや良	若干ゆがみ
第15図 22	〃	口径13.1 器高 4.3 底径 7.7	底部回転ヘラ切り未調整 内面中央ナデツケ 他はヨコナデ	ほぼ完形	外⑥ 内② Ⓜ	やや良	若干ゆがみ
第15図 23	〃	口径15.8 器高 5.8 底径10.5	底部回転ヘラ切り後ヘラ削り 体部ヨコナデ 内面不明	⅔	⑤ Ⓜ	良	ゆがみ激しい 外面全体と内面に厚く自然釉付着 底面に坏蓋片が溶着
第16図 1	鉢	口径14.7	内外面ヨコナデ	1/10	⑤ Ⓕ	良	内外面に自然釉付着
第16図 2	すり鉢	口径20.0	内外面ヨコナデ 外面に沈線を3条施し、その沈線間を櫛描き波状文で充塡する。	⅕	⑥ Ⓛ	良	口縁部外面に「❻」のスタンプ文有り
第16図 3	〃	口径15.0	外面に縦立刷毛調整後ヨコナデ施す 体部中位に沈線 内面ヨコナデ	⅓	⑤ Ⓔ	良	ゆがみ有り
第16図 4	すり鉢 ?	底径 7.0	底面に平行叩きを施し、中央に穿孔 その周辺に24ヶ所の刺突を施す	底部のみ¾	① Ⓔ	良	
第16図 5	鉢 ?	底径 6.4	内外面とも同心円叩き後ナデ	底部のみ完形	外④ 内① Ⓗ	良好	
第16図 6	長頸瓶	口径10.0 器高(推) 21.5 台径10.0	底部回転ヘラ切り後丁寧なナデ 胴部下半削り 他はヨコナデ	½	外⑤ 内① Ⓚ	良	内外面に自然釉付着 ゆがみ激しい
第16図 7	〃	胴径17.6	胴部下半ヘラ削り 他はヨコナデ 肩部に2条の沈線	口頸部底部欠損の½	⑤ Ⓛ	良好	若干ゆがみ

図版番号	器種	法量(cm)	成形調整技法	残存率	色調 胎土	焼成	備考
第16図 8	浄瓶	胴径12.4	頸部に1条の沈線 他はヨコナデ	胴部下半以下を欠損する½	① Ⓞ	良	外面及び内面の一部に自然釉付着
第16図 9	横瓶	口径12.0	口頸部ヨコナデ 胴部外面に平行叩き、内面に同心円文叩き後一部ナデ	口縁部～胴部上位⅓	④ Ⓕ	良	自然釉付着
第16図 10	短頸壺	胴径18.0	底面ナデ 胴部下位手持ちヘラ削り 胴部外面カキ目調整 他はヨコナデ	½	④ Ⓜ	良	内面と底部外面に自然釉付着
第16図 11	〃	口径10.0 胴径19.4 器高17.7	口縁部ヨコナデ 胴部外面は平行叩き後中位付近カキ目調整、内面は同心円叩き後中位以上をナデ消し	⅓	⑦ ① Ⓞ	良	胴部上位内面に自然釉付着 ゆがみ有り
第16図 12	甕	口径16.8	口縁部ヨコナデ 胴部外面平行叩き 内面同心円叩き後ナデ	口頸部付近⅓	⑥ Ⓐ	良	ややゆがみ有り
第16図 13	〃	口径13.8	口縁部ヨコナデ 胴部外面平行叩き後かるいナデ、内面継位のヘラ削りまたは磨き調整	胴部上半以上¼	外④ 内⑤ Ⓑ	良好	口縁部に自然釉と砂粒溶着
第16図 14	〃	口径25.8	口縁部ヨコナデ 胴部外面平行叩き後かるいカキ目調整、内面に同心円叩き	胴部上位以上1/10	⑤ Ⓔ	良好	
第16図 15	〃	口径24.0	口縁部ヨコナデ胴 胴部外面平行叩き後一部カキ目調整 内面に同心円叩き後ナデ消し	胴部上位以上1/10	外⑤ ① 内⑤ ③ Ⓗ	良	
第16図 16	〃	口径23.6	口縁部ヨコナデ 胴部外面平行叩き後カキ目調整、内面同心円叩き	胴部上位以上⅙	外⑤ 内③ Ⓗ	良	
第16図 17	〃	口径20.0 胴径(推) 35.0	口縁部ヨコナデ 胴部外面に平行叩き後カキ目調整、一部カキ消す、内面は同心円叩き	胴部中位以上¼	⑤ Ⓔ	良好	外面と内面口縁部に自然釉付着 ゆがみ有り
第16図 18	〃	口径23.2 胴径(推) 41.0	口縁部ヨコナデ 胴部外面平行叩き後カキ目調整、一部カキ消す 内面は同心円叩き	胴部中位以上¼	④ Ⓝ	良	外面に自然釉僅かに付着

2号窯跡床面出土土師器

第17図 1	無台坏	口径15.0 器高(推) 3.2 底径(推)10.0	内外面とも磨滅が著しく調整不明	⅙	⑮及び黒色 Ⓟ	不良	内外面とも赤色塗彩
第17図 2	坏	口径13.3	内外面とも横方向のヘラ磨き調整	口縁部～体部中位⅛	⑮ Ⓟ	良	内外面に赤色塗彩

3号土坑出土須恵器

第17図 3	坏蓋	口径16.6 器高 3.5	天井部ヘラ削り 内面中央ナデツケ 他はヨコナデ	⅔	外② 内① Ⓐ	良好	内面に粘土紐巻き上げ痕有り
第17図 4	有台坏	口径15.8 器高 4.1 台径 8.8	底部回転ヘラ切り後かるいナデ 他はヨコナデ	⅓	外⑥ 内② Ⓐ	良好	ゆがみ有り 外面に焼砂粒溶着

第5章　考　　察

南加賀古窯跡群における8世紀前半の須恵器

1．はじめに

南加賀古窯跡群は5世紀末ないしは6世紀初頭に生産活動を開始すると考えられている窯跡群で、6世紀終末から7世紀初頭に窯場を分散・拡大し、第1回目の当窯跡群拡大期を迎える。そして、ここで取り扱う8世紀前半に、新たに、「戸津のオオダニ」の周辺と平野に面する矢田野地区を加えて生産規模を拡大する。この時期は南加賀古窯跡群存続期間の中で、最も窯場を拡大し、7世紀代に比べて窯跡数を激増させ、当窯跡群の全盛期として位置付けられる。しかし、この窯場の拡大と生産規模は8世紀後半には早くも窯場を収束させ、生産規模を減少させている。この短期間に営まれた窯跡は現在確認されているものだけで、17基を数え、発掘調査された該期の窯跡は、戸津オオダニ地区で戸津24・28・46・62号窯跡の4基と二ッ梨一貫山1・2号窯跡の2基、二ッ梨オオダニ地区で二ッ梨東山2号窯跡、三湖台に面する矢田野地区で矢田野向山1号窯跡、動橋川流域の那谷地区で桃の木山1号窯跡の計9基にも上る。今回はこの豊富な資料をもとに8世紀前半の須恵器編年を試みてみたい。

2．編年案

さて、8世紀前半代の加賀地方の須恵器編年については、これまで吉岡康暢氏の行った2期区分を踏襲して行われ、それぞれ平城Ⅰ期と平城Ⅱ期に対応させている[(1)]。西暦700年を前後する時期（平城Ⅰ期併行）には無返蓋＋有台坏と無台坏に須恵器食膳具が統一されることはこれまでの編年観にほぼ異論のないことであるが、それ以後については坏類の形態変化により1～3期に編年可能と思われる。

編年序列は、出土量が多く、形態的な変遷が比較的明瞭に見られる坏類等の食膳具を主体として試みた。1期は有返蓋＋無台坏のセットが消滅し、無返蓋＋有台坏と無台坏の食膳具セットが成立する段階で、前代の飛鳥Ⅳ期にみられた様相を残す。2期は飛鳥Ⅳ期の様相から脱して器形が定型化する段階であるが、偏平な器形の坏類が出現するなど退化傾向がみられてくる段階である。3期は2期でみられた偏平な器形の坏類に統一される段階で、この段階をもって偏平な器形の坏類はほぼ消滅する。この3期区分を前提に、各期の様相を以下に述べる。

（1）1期

桃の木山1号窯跡の資料を標式とする。この窯跡は本文でも述べたように、床の層位関係からⅠ次床とⅡ次床に分けられ、その前後関係も明白である。Ⅰ次床を1期の前半に、Ⅱ次床を後半に位置付ける。

桃の木山1号窯跡Ⅰ次床（前半期）

Ⅰ次床の有台坏は口径14.5～16.5cmを測り、径高指数が32前後の深身のもの（Aタイプ）と27前後の浅身のもの（Bタイプ）とが存在する。Aタイプは高台が高く、しっかりとした作りをしており、古い様相をもつ。高台の付く位置は、A・Bともに体部立ち上がり部分よりも内側にあり、口径・台径比が63程度にまとまる。高台の形態は一般的にしっかりとした作りのものが多く、高いものが目立つ。坏蓋はやや幅広の平坦部を天井にもち、この部分にヘラ削りが

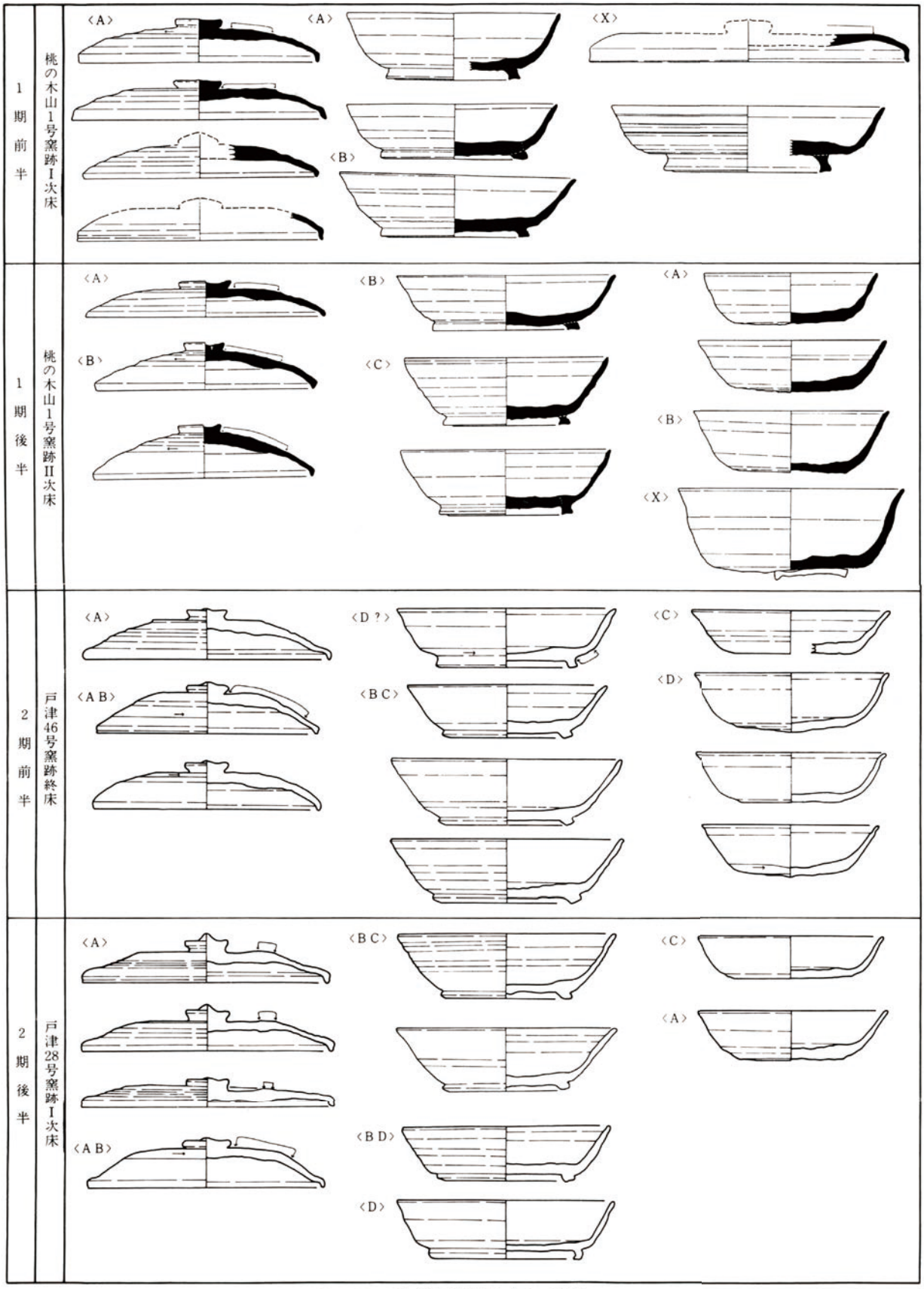
施される。口縁部は器肉が薄く、端部で長く折り返す、シャープな作りのものが目立つ。鈕の形態は偏平な宝珠形で中央が若干突出する。また、これら一般的な法量のほかに、口径が19cm台の大型品（Xタイプ）も一点だけ存在する。これは前庭部出土の製品であるが、形態からⅠ次床に入れて差し支えないものと考える。

以上の土器群は、飛鳥　期に位置付けられる黒瀬2号窯跡や能美窯跡群の湯屋窯跡A支群の土器群に幾つかの共通点が見られる。湯屋窯跡A支群の土器群特に無返蓋＋有台坏について木立氏が述べられた様相を抜粋してみれば、「坏蓋Bは、ほとんどが偏平で大形のつまみに変化している。口縁端部の形態には多様性がみられる。……高台は著しく退化し、太く低いものになっているが、依然としてよくふんばった古い様相を残している」（木立1985）とあり、この段階の土器群に極めて似た様相を呈している。しかし、この窯跡で一定量見られた深身のAタイプは桃の木山1号窯跡Ⅰ次床では少量しか存在していないことや湯屋窯跡A支群には有返蓋＋無台坏のセットが一定量存在していることは、確実な時間の流れを感じさせるものであり、型式を画する。また、黒瀬2号窯跡では口径が19cm台の有台坏が出土しており（北村・木立1987）、当段階のものによく似ている。この法量のあり方について、北野氏は「4様式（飛鳥Ⅳ期）にはⅠ（18～20cm）が一定量生産されるのを特徴とする」（北野1988）としており、飛鳥Ⅳ期を特徴付ける法量であるとしている。このように当期の様相は飛鳥Ⅳ期の無返蓋＋有台坏の様相に極めて近いものであり、飛鳥Ⅳ期の直後、有返蓋＋無台坏の消滅する平城Ⅰ期の中でも最も古い段階として位置付けられる。

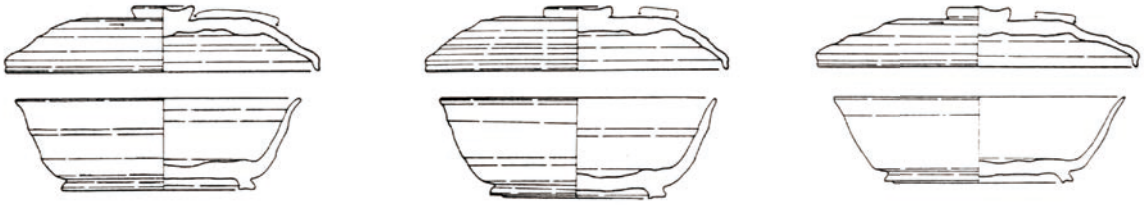
桃の木山1号窯跡Ⅱ次床（後半期）

Ⅱ次床はⅠ次床の系譜を引く形態のもの（蓋A・有台坏B）と系譜の異なる形態のもの（蓋B・有台坏C）が存在する。前者の土器群について述べれば、有台坏Bは口径や径高指数でⅠ次床と大差ない数値を示すが、Ⅰ次床で少量見られた深身のタイプは見られなくなり、高台の付く位置がやや外側になる傾向をもつ。しかし、高台の形態は高いものは見られなくなるものの、まだ、しっかりとした作りをしており、接地面が平坦であるものが一般的である。これに伴う坏蓋は口縁端部の折り返しが短くなって丸味をもち、Ⅰ次床で見られたシャープな作りのものから退化している状況が看取できる。また、この系譜上で考えられる無台坏に関しては、径高指数が28前後にまとまり、やや深身のAタイプとこれよりも径高指数を高くもつ33程度の深身のBタイプも存在する。このBタイプは椀として扱われる可能性をもち、器種の上からも分けられるものかもしれない。以上の土器群はⅠ次床よりも確実に退化しており、後出の段階として位置付けられるものだが、まだ、飛鳥Ⅳ期の様相を引きずっており、Ⅰ次床と同型式内に入るものと考える。

上記の土器群に対して、これと共伴して系譜を異にする蓋B・有台坏Cが存在している。その系譜については本文で述べているため、ここでは割愛するが、この形態の有台坏に近似した様相を示す窯跡に二ッ梨東山2号窯跡（望月・宮下1990）がある。この窯跡は焼成中または窯出し時に窯体の崩落した可能性が強く、床面に生焼け状態で蓋坏等が取り残されていた。この有台坏は全体的に器高が高く、体部立ち上がりの丸い、椀状の器形をしている。口径は14～15cmに中心をもち、径高指数33前後の椀形の器形のものと径高指数29前後の坏形の器形のものに分けられる。高台はしっかりとした踏ん張る形態を呈し、貼付位置が体部立ち上がり箇所よりもやや内側に入る。これはⅡ次床のCタイプと極めて似た数値を示し、これとセットとなる坏蓋は天井部に幅広の平坦部をもち、口縁端部をやや長く薄く外反して折り返すシャープな作り



第23図　須恵器編年図(1)（S＝1/4）



第24図　二ッ梨東山２号窯跡出土須恵器（Ｓ＝１／４）（望月・宮下1990より転載）

のもので、Ⅰ次床の坏蓋によく似た様相を示す。しかし、Ⅰ次床の坏蓋よりは鈕の大きさや口縁部形態でやや後出する傾向をもつが、Ⅱ次床のそれよりはシャープさが残っており、やや古手の感じを受ける。まとめれば、前半期の設定基準である飛鳥時代の様相を色濃く残す器形（有台坏Ａや法量の大きい有台坏Ｘ）はこの窯跡では欠落しており、細部形態で確実に前半期よりも後出の様相をもっていると判断し、後半期に位置付ける。

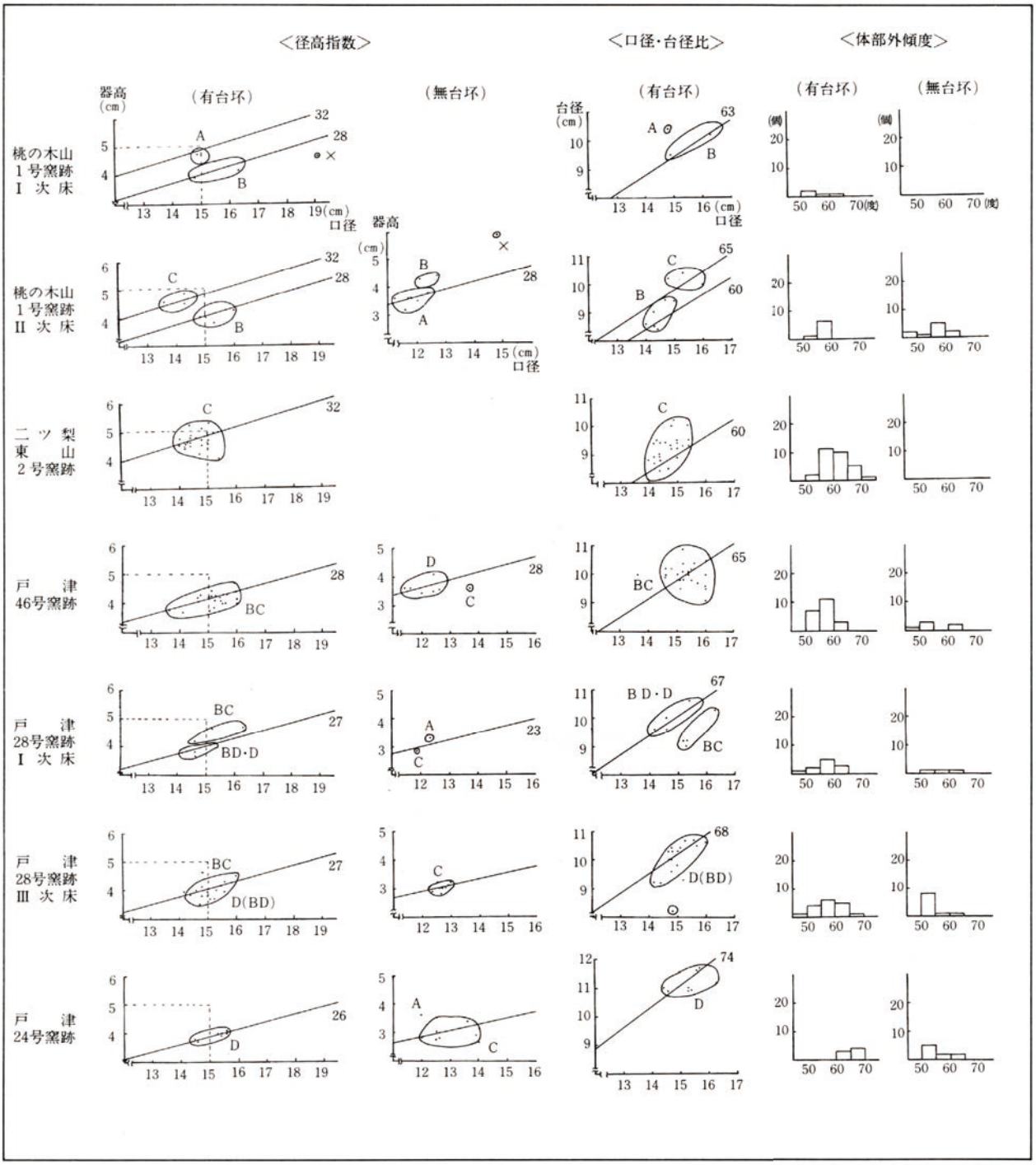
（２）２期

戸津46号窯跡と戸津28号窯跡を標式とする。戸津46号窯跡を前半期、戸津28号窯跡を後半期に位置付けられる。

戸津46号窯跡（前半期）

昭和59年度に発掘調査した窯跡（望月・樫田1985）で、最終床面の燃焼部付近から良好な一括資料が得られている。食膳具の構成は無返蓋＋有台坏と無台坏で前期のものと変わりはないものの、その形態において変化が見られてくる。有台坏は口径が14.5～16cmに中心をもち、径高指数28前後にまとまるもので、１期に見られたＡタイプとＣタイプの中間的な形態を示している。体部の器形は外傾して開くもので、外傾度も55に中心をもち、Ｃタイプに近い。高台は貼付位置が体部立ち上がり付近に移行して、厚く短い形態のものを外展させて付ける。以上の形態を一般的とするが、これとは形態的に異なる体部が開かず、高台接地面が平坦な形態（Ｄタイプ？）が２個体ながら出土している。坏蓋はＡタイプの系統と思われる天井部に幅狭の平坦部をもって開くタイプと、ＡタイプとＢタイプの中間的形態と言える全体的に丸味を帯びるタイプとが存在する。Ａタイプはヘラ削りを施さず、ナデのみで仕上げるものが多く、口縁端部を比較的長く折り返す。ＡＢタイプは天井部にヘラ削りを伴うもので、口縁端部の折り返しが短く丸味を帯びる。鈕の形態は両者とも偏平な宝珠形で１期と大きな変化はないが、若干高くなる傾向が見られる。Ａタイプは１期の坏蓋の流れを汲むものだが、天井部が狭くなり山笠状の器形を意識したものへと変化している。これに対し、ＡＢタイプはこの時期から新しく登場する器形で、Ｂタイプの丸味をもつ器形を取り入れて、全体的に器形を丸くしようとする意図が見られる。無台坏は径高指数28前後の深身のタイプで、底部と体部の境が不明瞭な椀状を呈し、口縁部で短く外反させるＤタイプが主体をなす。この器形は１期からの系譜では考えられないものであり、何等かの外的な影響によって出現したものであろう。また、１個体だけだが、径高指数24程度のやや浅身のタイプで底部が平坦なものが出土している。以後出現する浅身のＣタイプへと変化して行くものと考えられる。

これらの土器群と似た様相を示すものに、能美窯跡群の来丸サクラマチ３号窯跡（平田1984）が挙げられる。この窯跡には前段階からの流れを汲むものと東海地方の系譜で考えられるものが共伴しており、前者が当窯跡と似た様相を呈している。サクラマチ３号窯跡ではこのように同時に異なる形態のものを生産しており、そこには工人レベルでの何等かの接触があったことは間違いないと思う[(2)]。この現象は桃の木山１号窯跡Ⅱ次床においても見られたものであり、こ



第25図　須恵器坏類法量分布図(1)

のころに、東海地方特に尾張・美濃地方からの技術的な影響があって、坏蓋にみられる丸味をもった器形など在地の製品も変化して行った（蓋ＡＢタイプや有台坏ＢＣタイプなど融合的形態の出現）ものと考えられる。飛鳥Ⅳ期から継続してきた形態は、この段階で転換し、外的な影響などによって飛鳥Ⅳ期の様相から脱して行ったのではないだろうか。また、この段階は一器種一法量が完成する時期であり、在地色をもちながら、安定期に入って行ったと考えられる。

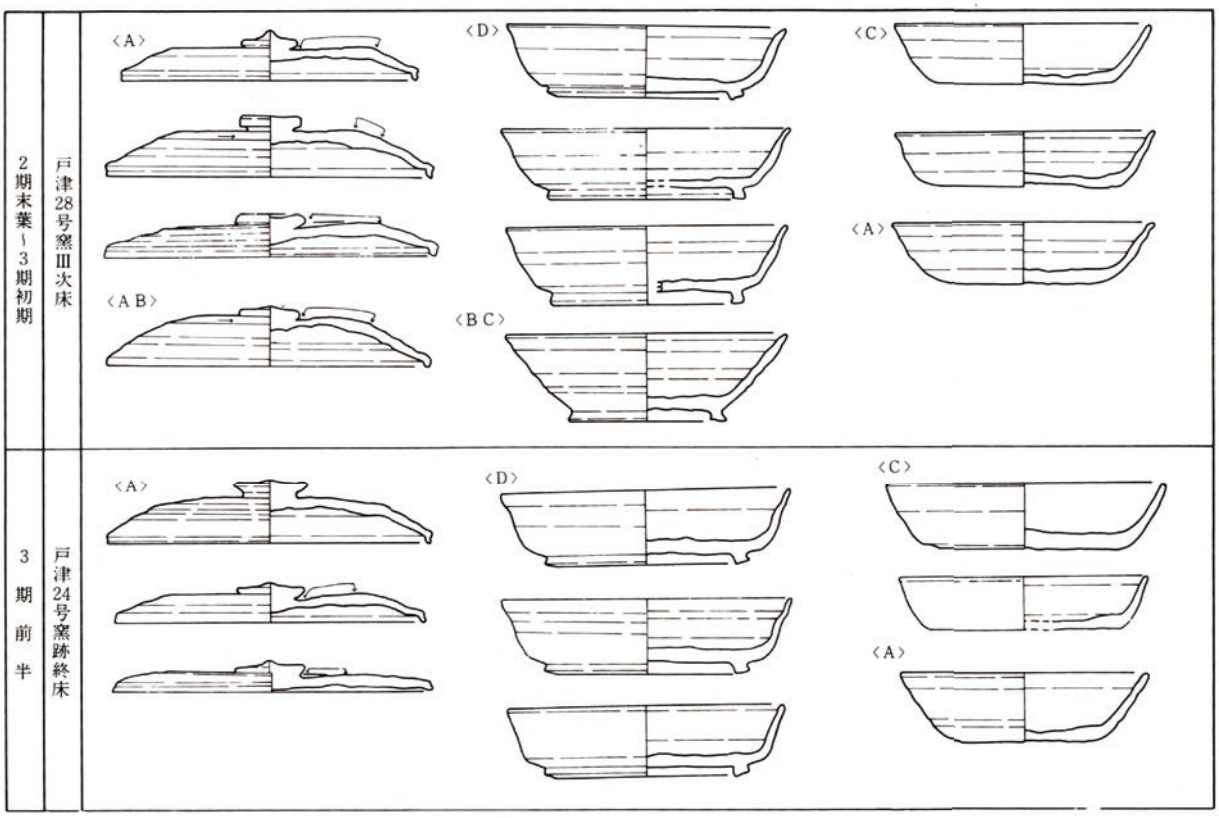
戸津28号窯跡（後半期）

この窯跡は昭和57年度に発掘調査された窯跡で、床の層位関係からⅠ～Ⅲ次床に分けられる（小村他1983）。そして、Ⅰ次床とⅢ次床では少量ながら一括資料が得られており、その中で

前後関係が看取できる。

（Ⅰ次床）

前半期で見られた器形はこの段階になって２系統に別れ、それぞれ発展的に退化している現象が見られる。有台坏については前半期では体部が外傾して開くＢＣタイプを特徴としていたが、この段階ではＢＣタイプの系統で体部が一層外傾して変化して行くものと器高が低平化して次の時期に主流となるＤタイプに近い形態へと変化して行くもの（ＢＤタイプ）とに分けられる。ＢＣタイプは体部外傾度が50程度に減り、前半期に比べて開く感じで、高台が外展するものから接地が平坦で踏ん張る形態へと変化している。これに対してＢＤタイプでは高台の形態、体部外傾度では変化は見られないものの、径高指数が26～27に変化し、偏平な器形へと変化している。そして、後者の器形を一層発展させた器形つまりＤタイプ（偏平で、体部の立ち上がり部が明瞭に屈曲し、短く直立する高台が付く形態）が一点だけ出土している。このＢＤタイプやＤタイプが以後に継続する形態であり、ＢＣタイプは以後減少する。坏蓋については前半期では全体的に丸味を帯びるＡＢタイプと天井部に平坦部をもつＡタイプとがあったわけだが、両者とも変化している。ＡＢタイプは全体的に丸味を帯びる点では前半期と変化はないが、口縁端部折り返しが断面逆三角形状のものから厚手ながらも折り返す形つまりＡタイプに近い形態へと変化し、鈕の形態が一層偏平となる。Ａタイプは天井の平坦部が幅広となり、その分だけ偏平化し、鈕の形態は中央が突出する器形へと変化する。全体的に作りは粗雑で、口縁端部の折り返しがあつぼったくなる。有台坏と同様、後者が以後に継続する器形である。無台坏では１期にみられた深身のＡタイプがこの段階でも存続するものの、器高の低平化と底部の大形化など偏平な器形へと変化している。また、これ以後無台坏の主流の器形となる器肉が薄く、偏平な器形のＣタイプが定型化されて出現する。



第26図　須恵器編年図（２）（Ｓ＝１／４）

以上の土器は前半期からの様相を色濃く残すものと３期へと継続していくものの２系統の土器が存在しており、数量的にほぼ同じ程度の割合で構成されている。

（Ⅲ次床）

Ⅰ次床で半数近くを占めていた前半期の様相を色濃く残す土器は、Ⅲ次床では著しく減少し、偏平な器形を呈す蓋Ａタイプ、有台坏Ｄタイプ、無台坏Ｃタイプが８割以上を占めるようになる。前半期の様相を残す器形はこの段階では占有量の減少だけで、器形上の目立った変化は認められない。これに対し、偏平な器形の土器群についてはⅠ次床のものから変化しながらも偏平な形で定型化してくる。有台坏ではⅠ次床で見られたＢＤタイプは器高を一層低平にして、量を減らし、１個体だけ見られた体部の立ち上がりが明瞭な器形のＤタイプは増産されてくる。また、坏蓋はⅠ次床よりも鈕の高さが低いものへと変化し、上面が平坦なボタン状偏平器形の鈕が出現する。無台坏は口径が13～14cmにまとまり、Ⅰ次床のものよりも大形化した分だけ偏平となって、径高指数22程度の定型化されたものになる。

戸津28号窯跡の段階は前半期の戸津46号窯跡で見られた土器が２つの系統に別れ、それぞれ器形の偏平化や細部形態の粗雑化という形で、退化している状況が見られる。そして、その２つの系統は一方の器形では前半期の形を守りながら減少・消滅し、一方の器形では前半期からの様相を当初は守りながらも、以後形態を一層変化させながら次の段階の主要器種として成長してゆく。この段階は以上のような２期前半期の様相から３期様相へと転換する過渡的な様相として位置付けられるものであり、Ⅰ次床からⅢ次床への変化は明瞭である。Ⅲ次床の段階はこの後半期の中でも終末期であり、３期に近い様相をもつ。

（３）３期

３期は戸津24号窯跡と矢田野向山１号窯跡Ⅲ次窯を指標とする。この期は２期後半の戸津28号窯跡Ⅲ次床で見られた偏平器形のものにほぼ統一される段階であるが、その中に新しい器種組成が導入される時期でもある。坏類偏平化の終局的様相を呈する戸津24号窯跡を前半期に、偏平器形の衰退傾向が始まる矢田野向山１号窯跡Ⅲ次窯を後半期に位置付ける。

戸津24号窯跡（前半期）

この窯跡は昭和57年度に発掘調査されたもので、床が３枚確認されている（小村1983）。この中で、Ⅲ次床（最終床）で良好な一括資料が得られており、これをもとに当期の様相を述べる。有台坏はすべてＤタイプで、口径14.5～16cmを測り、15.5cmに中心をもつ。径高指数は26程度に集中し、２期よりも口径が大きくなった分だけやや偏平になっている。高台の形態は戸津28号窯跡Ⅲ次床で見られたものと大差はなく、短く直立する形態と厚く短く外展する形態とが存在する。しかし、高台径は体部の外傾度が増した分だけ大きくなり、口径・台径比が74程度と高くなる。これに伴う坏蓋は資料的に乏しいため、はっきりとは言えないが、口縁端部の著しく微弱なものが存在することで、戸津28号窯跡Ⅲ次床よりも後出する様相と思われる。無台坏はＣタイプが主体で、口径が13～15cmにバラツキ、２期後半に見られなかった15cm前後のやや大ぶりのものも加わってくる。そして、体部の外傾度も漸移的に増加する傾向が見られる。

また、当期に位置付けられるものとしては矢田野向山１号窯跡Ⅰ次窯（望月・宮下1990）が挙げられる。後半期に位置付けた矢田野向山１号窯跡Ⅲ次窯は、主軸を同じくしてこの窯を改築して作ったものである。有台坏は戸津24号窯跡よりもやや大振りの口径を示し、16cm台に中心をもち、径高指数25前後のＤタイプが主体を占める。しかし、体部外傾度は60度台前半を測り、戸津24号窯跡よりも若干開く傾向にあり、口径・台径比は70前後に多い。高台の形態は畳

付き部が平坦に接地する短く踏ん張るものが多く、戸津28号窯跡Ⅲ次窯のものに近い。坏蓋は大きな偏平宝珠鈕をもち、口縁端部を厚手の三角状か外反して折り曲げる。無台坏は口径14cm台に中心をもち、径高指数22前後に分布するＣタイプが主体で、偏平で、体部をやや外傾するものが目立つ。これらの様相に関しては戸津24号窯跡に対比してかまわないが、これら主体的な器形のほかに、天井部が丸く山笠状を呈す坏蓋ＡＢタイプと器高の高い深身有台坏ＢＣタイプ、底部に丸みをもつ無台坏Ａタイプが少量ながら一定量存在する。これらの器形は２期の様相を引きずるものとして、若干古い様相をもつが、主体的な偏平器形に比べ、１割程度しか存在しておらず、総体的には偏平器形に統一される段階と評価でき、２期後半のものよりも有台坏Ｄタイプ、無台坏Ｃタイプが確実に偏平になっていることを重視し、当期に位置付ける。

この時期は有台坏・無台坏において偏平な器形にほぼ統一されることを特徴とし、２期後半から坏類の口径の大型化に伴う一層の偏平化と体部の直立化の進行に伴う高台径・底径の増加という形で変化する。また、無台坏の占有率が急増し、矢田野向山１号窯跡Ⅰ次窯では蓋坏を凌ぎ、６割程度、戸津62号窯跡[3]ではほぼ同量程度を有する。１期・２期に見られた蓋坏中心の組成はこの期を境に転換し、蓋をもたない器種を中心とした組成へと変化する。また、この時期は上記のような１器種１法量の原則を守る蓋坏・無台坏の須恵器組成と加賀市篠原遺跡（田嶋他1987）に見られるような蓋坏の多器種分化または皿等の新器種を含む多器種須恵器組成が出現・併存し、２重構造を示す[4]。現在のところ窯跡例としては当窯跡群では確認されていないが、ある特定の需要者にのみ供給される器種組成の窯が存在していたものと考えられる。

矢田野向山１号窯跡Ⅲ次窯（後半期）

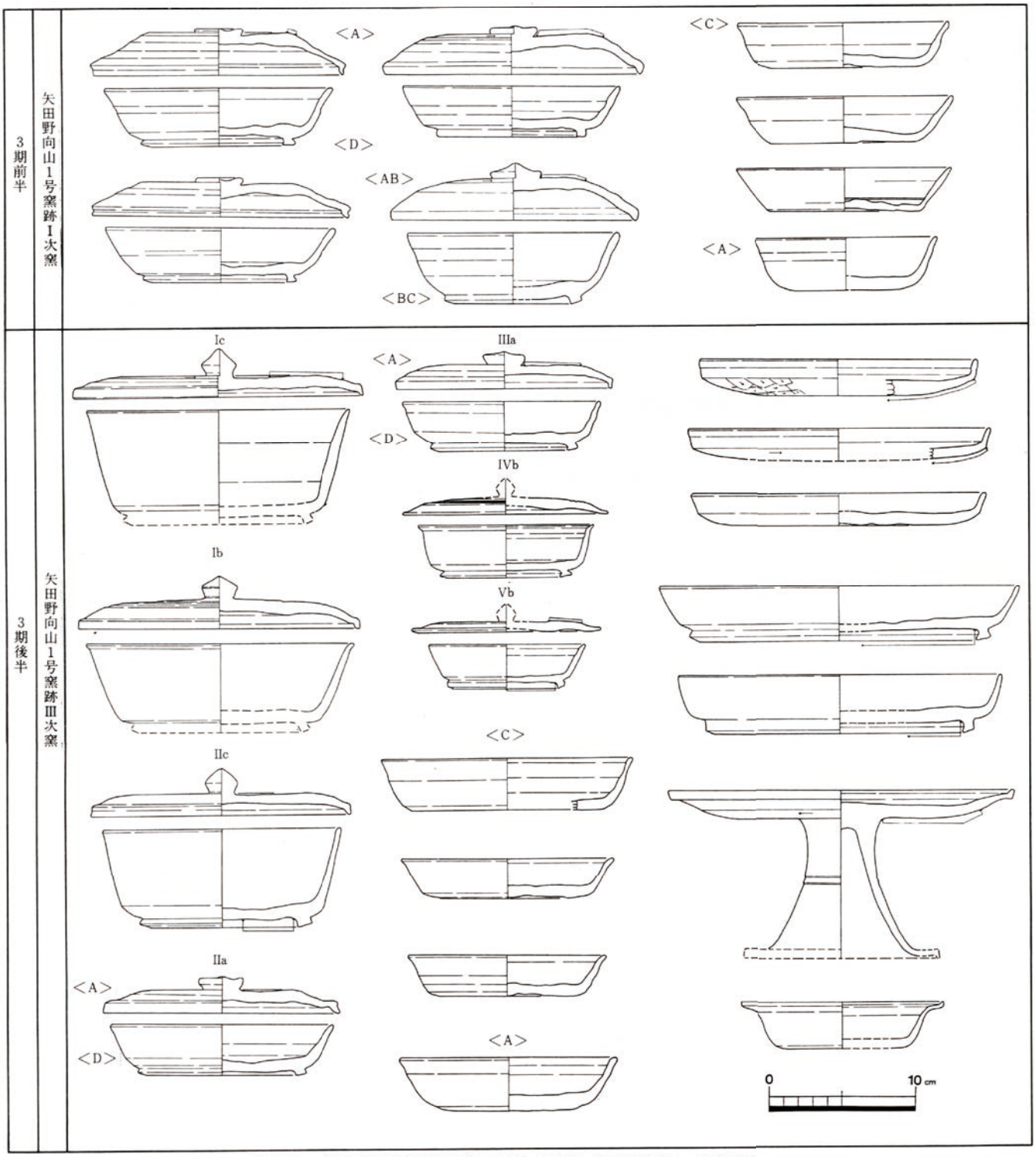
後半期は前半期の偏平器形を一層進展させ、法量の小型化が見られてくる。また、前半期に一部の窯跡で導入され始めた多器種組成が普及され始める段階として位置付けられ、矢田野向山１号窯跡Ⅲ次窯（望月・宮下1990）がそれに該当する。

有台坏はⅠ類（18～19cm）、Ⅱ類（15～16.5cm）、Ⅲ類（13～14.5cm）、Ⅳ類（12cm前後）、Ⅴ類（10cm台）の５法量が存在し、Ⅰ類は径高指数40前後のｃ類と径高指数28前後のｂ類、Ⅱ類は径高指数40前後のｃ類と径高指数23～24前後のａ類、Ⅲ類は径高指数23～25前後のａ類、Ⅳ・Ⅴ類は径高指数28前後のｂ類にそれぞれ分けられる。前半期から継続する器種はⅡａ類とⅢａ類であり、Ⅱａ類はその法量から前半期のＤ器形をそのまま引き継ぐ器形、Ⅲａ類は前半期のものから法量をひとまわり小さくして分化した一群として位置付けられる。Ⅱａ類は前半期よりもさらに偏平となり、Ⅱａ類・Ⅲａ類ともに高台の高さを低下させている。これに伴う坏蓋はⅡａ類・Ⅲａ類ともに偏平宝珠鈕を付すが、径を小さくし、やや頂部の盛り上がる形態となり、口縁部の折り返しは薄く折り曲げる比較的シャープな形態を呈す。無台坏も前半期の形態を引き継ぐ器種で、前半期に増加した数量をそのまま引き継ぎ、この段階でも主体的な器種として存在する。器形は前半期に比べ、若干口径を小さくして、さらに偏平となり、口縁部が外反する。

以上の前半期から継続する器種に関しては２期から３期へと変化した坏類偏平化の傾向をそのまま進展させ、全体に口径をひとまわり小さくする。この様相は確実に３期前半に後出するものと評価でき、次の二ッ梨横川１号窯跡の段階にも引き継がれるが、この期を境として消滅への道をたどる[5]。つまり、当期は８世紀初頭から続く蓋坏・無台坏器種の終末段階として位置付けられるもので、同時にこれ以後主体的となる新しい器種の初源的な段階と言える。

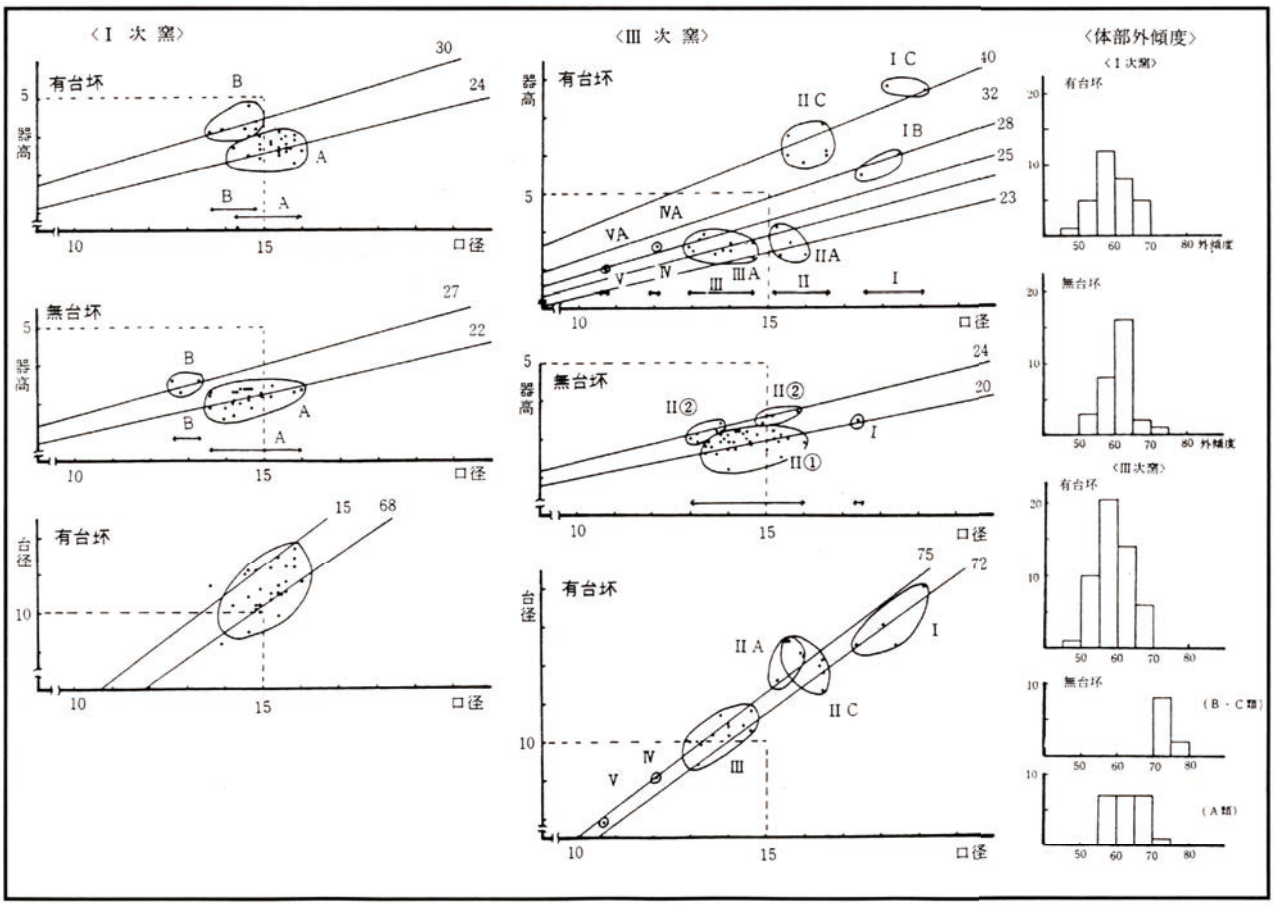
さて、新しい器種に関しては先にも述べた蓋坏Ⅰｃ類・Ⅰｂ類・Ⅱｃ類・Ⅳｂ類・Ⅴｂ類に

加え、無台皿、有台皿、逆蓋器形高坏等があり、また、蓋坏にはこの時期に顕在化する金属器指向型とも言える体部に沈線をもち、底面をヘラ削り調整するものが存在する。これらの器種は前半期に、先駆けて一部の窯跡に導入された宮都の器種組成が一般的に普及され始めたものと評価できる。前半期のこれらの器種と当段階のものを比較した場合、前半期は、有台坏のⅠ類径高指数が深身で37前後を呈し、径高指数50前後を測る一群が定量存在すること、無台皿に宮都の皿C形態（西1979）的な口縁端部面取り状のものが定量存在し、口径15～22cmの中でいくつかの法量に分けられること、有台皿の口径が21～28cmと大型法量を呈し、蓋を伴うものが



第27図　須恵器編年図(3)（S＝1/4）（望月・宮下1990を一部改変）

第28図　篠原遺跡７号土抗出土須恵器（Ｓ＝１／４）（田嶋他1987より転載）



第29図　須恵器坏類（矢田野向山１号窯跡）法量分布図（２）（望月・宮下1990より転載）

存在すること、稜鋺や鉄鉢などの仏具的器種が定量存在することなどに対し、後半期では有台坏Ⅰ類の深身タイプが40前後とやや深くなり、径高指数50前後のものは僅少となること、無台皿に宮都皿C形態のものは存在せず、底部を粗くヘラ削りする底部の丸い口径13～15cmのものにほぼ統一されること、有台皿は17～20cm程度と20cmを越える大型品は存在せず、蓋の伴うものは存在しないことなどを特徴とし、前半期から後半期へ宮都的な様相が薄れるとともに、確実に新しい様相をもって来ていることが窺える。前半期のそれが中央からの強いインパクトで導入された感じを受けるのに対し、後半期のそれは前半期の器種組成を在地化させたものと評価でき、次の時期にはその器形を出発点とする新たな器種組成が生まれて行ったと考える。

このように、3期は蓋坏中心の器種組成からそれが崩れ、蓋を伴わない器種に比重を移し、そして、中央から新しく導入された器種組成を在地の中に還元・融合させ、北陸固有（南加賀特有）の器種組成を形成して行ったものと考える。

以上、3期の概要を述べてきたが、これに後続する窯跡としては二ッ梨横川1号窯跡（望月・宮下1989）が挙げられる。この窯跡では3期後半で出現した新器種を主体として器種組成が組まれており、蓋坏は3法量に分けられ、無台皿・有台皿は合わせて4割近くの占有率を示す。矢田野向山1号窯跡　次窯の様相から二ッ梨横川1号窯跡へすぐさま移行するとは思われないが、その間に末窯跡群の浅川3号窯跡（出越1989）的な様相をもつ須恵器が存在し、平城Ⅳ期の様相をもつ須恵器へと推移して行きながら、在地的な様相を強めて行ったものと考えたい。

3．まとめ

以上、1～3期の編年序列とその様相を概述してきたわけだが、最後にそれらの暦年代観について考えてみたい。

まず、1期は先にも述べたように、飛鳥Ⅳ期の様相を色濃く残しており、前半期は飛鳥Ⅳ期の直後、飛鳥Ⅴ期・平城Ⅰ期の中でも最も古い段階に位置付けられる。年代観に関しては平城Ⅰ期が藤原宮の時期（678～710年）をあてることには問題がない（西1976）ことから、1期の上限を700年を前後する年代頃かまたは若干これを遡る年代をあててよいものと考える。3期については、前半期の段階で、偏平器形に統一され、一部の器種組成に平城　期に対応されるような宮都的器種組成が導入されることから、平城Ⅱ期に対比可能である。しかし、後半期には早くも前半期の様相を在地化させており、その法量の小型化が平城Ⅲ期的な様相も具備していることから、平城Ⅱ期から平城Ⅲ期への過渡期あたりに対比できるものと考える。平城Ⅱ期の暦年代はＳＤ3035下層出土の木簡等から、その一点を730年頃に置くことが可能とされており（西1976）、平城Ⅲ期の暦年代がＳＫ2101出土木簡等によって750年頃に位置付けられることから、総合して3期の暦年代観は8世紀第2四半期頃または第3四半期にかかる頃に比定する。つまり、1期を（7世紀末？）～8世紀第1四半期頃、2期を8世紀第1四半期～第2四半期、3期を8世紀第2四半期～（第3四半期？）の暦年代観が与えられるものと信じる。

註

（1）吉岡氏は8世紀前半をⅠ期とし、その様相を「須恵器は古墳時代末期の器種・器形が払拭され、……全体に依然畿内に準ずる様相を示す」と概念付けている。そして、前半の標式を春木3号窯跡としてⅠ$_1$期に、後半の標式を若緑3号窯跡としてⅠ$_2$期に細分し、Ⅰ$_1$期の様相は古墳時代末期に見られた有返蓋＋無台身と無返蓋＋有台身の基本的な2類型が解消し、無台坏と無返蓋＋有台身を基本とする組成が成立するものとして、平城Ⅰ期に位置付け、Ⅰ$_2$期の様相は坏類の平均的縮小化と深身の大型有台坏が一定の量比を獲得して器形が分化する特徴を提示し、Ⅰ$_2$期の古相が平城Ⅱ期に対比できるとしている（吉岡1983）。このように、8世紀前半を2期に分け、

平城Ⅰ期と平城Ⅱ期に対比する考えは、標式とする窯跡と概念規定に変動はあっても基本的にはその後も受け継がれ、田嶋氏または北野氏によってⅡ$_3$期とⅢ期に編年区分されている（田嶋1989、北野1989）。

（2）来丸サクラマチ3号窯跡の蓋坏器形について木立氏は「この段階に新器風・技術をもたらした山笠形の坏蓋は……より広範な地域で一斉に導入されたものと思われ……東海地域の須恵器生産組織と何らかの関係があった可能性が高い」と東海地方との関連性を指摘している（木立1985）。

（3）戸津62号窯跡は坏類の器形から2期の終末から3期前半に位置付けられるもので、窯体内取り残しの製品は少なかったが、蓋坏と無台坏の量は半々程度で、焼台に使用されたものを含めれば、無台坏が7割程度を占める（望月1991）。

（4）北野博司氏は篠原遺跡を標式とする土器群を前Ⅲ期と設定し、その内容について「多様な器種分化と法量の規格性が顕著な宮都の組成に準じた内容をもつ」とするが、一方では「Ⅱ期以来の食膳具セットの基本構成を引き継ぐ、組成的に比較的単純な一般集落や窯もあって、組成の2面性は明確化している」と述べられている（北野1989）。

（5）二ッ梨横川1号窯跡の偏平器形坏類は、全体では2割程度と低い比率を示し、蓋坏で口径13～14cm、無台坏で口径12～14cmを測り、径高指数を高くしながら、口径を確実に小型化している。矢田野向山1号窯跡Ⅲ次窯までに見られた坏類の偏平化はこの段階では消滅化という形で推移して行っている（望月・宮下1989）。

引用文献

北野博司　1988　「用途からみた食膳具の組成とその変化」『シンポジウム　北陸の古代土器研究の現状と課題（報告編）』石川考古学研究会　北陸古代土器研究会

1989　「北陸における須恵器生産」『北陸の古代手工業生産』北陸古代手工業生産史研究会

木立雅朗　1985　「能美窯跡群の須恵器編年（1）北群」『辰口町湯屋古窯跡』　辰口町教育委員会

北村圭弘・木立雅朗　1987　「黒瀬瓦窯跡」『北陸の古代寺院』　北陸古瓦研究会

小村茂他　1983　『戸津』　小松市教育委員会

田嶋明人他　1987　『篠原遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター

田嶋明人　1989　「加賀・能登の古代土器生産」『北陸の古代手工業生産』北陸古代手工業生産史研究会

西弘海　1976　「平城宮出土土器の編年とその性格」『平城宮発掘調査報告Ⅶ』　奈良国立文化財研究所

1979　「奈良時代の食器類の器名とその用途」『研究論集Ⅴ』　奈良国立文化財研究所

平田天秋　1984　『辰口町来丸サクラマチ窯跡（資料編）』　石川県立埋蔵文化財センター

望月精司・宮下幸夫　1989　『二ッ梨横川1号窯跡発掘調査報告書』　小松市教育委員会

1990　『二ッ梨東山古窯跡・矢田野向山古窯跡』　小松市教育委員会

望月精司　樫田誠　1985　『戸津－第4・5次発掘調査概要報告書－』　小松市教育委員会

望月精司　1991　『戸津古窯跡群Ⅰ』　小松市教育委員会

吉岡康暢　1983　「奈良平安時代の土器編年」『東大寺領横江庄遺跡』　松任市教育委員会　石川考古学研究会

付　記　　生産体制とその背景

この考察では8世紀前半の須恵器について、その器形変化を追ってきたが、ここではこの器形変化から見た須恵器生産の在り方について二、三考えてみたいと思う。

まず、須恵器器形の大まかな粗筋を述べれば、食膳具は700年頃を境として、有蓋無台坏は消滅し、有蓋有台坏と無蓋無台坏に統一される。また、同時に7世紀代見られた同器種内での法量分化は衰退し、1器種1法量の規制をもつ食膳具となる。1器種1法量の食膳具は8世紀前半代主体的に存続し、8世紀第2四半期頃に導入された新器種によって徐々に崩壊し、その新器種を中心とする器種構成へと変貌を遂げる。大略での器形変化は以上のとおりであるが、その器風にはこの間2つの系統が存在し、その器形変化とともに出現・消滅する。有蓋有台坏と無蓋無台坏のセットに統一された段階、つまり1期では、7世紀代の様相を残存させるとともに、6・7世紀代の主体的な畿内に準ずる様相が存続する。しかし、1期後半から2期前半頃、東海地方（特に美濃須衛窯）の影響を受けた器形が各窯で単発的に出現し、それとともに7世紀代の様相を払拭して、その東海的器風と畿内的器風を混ぜたような在地特有の器形を作り出す。きっかけは東海地方の影響と判断できるが、その性格は畿内一辺倒の様相から脱し、在地の様相を形成する段階として性格付ける。2期に見られる1器種1法量の固執はこのような在地様相の形成を意味するものと考えられ、2期後半から3期前半へ東海的器風が徐々に薄れ、北陸では一般的な畿内的器風が顕在化する。

以上のような須恵器器形に見られる畿内的・東海的器風の受け入れ、または器種構成の畿内遵守の形は何を意味するのだろうか。社会的な背景または生産組織の在り方からその流れを考えて見たい。

まず、1期以前にあたる、7世紀後半の様相について考えてみたい。この時代は寺院創建の時期に当たり、南加賀では保賀廃寺・津波倉廃寺・弓波廃寺・宮地廃寺、北加賀では末松廃寺など多くの寺院が建立されている。この寺院創建には瓦工・木工・仏工などの専門的技術を有した工人が中央から派遣されてきたと思われ、瓦から見ても、吉岡氏が「屋瓦様式の主流は紀寺式であり、越前を経由することなく畿内方面より直接技術導入が計られて」（吉岡1976）

いると指摘するように、生産組織レベルでの畿内との密接な結び付きを感じる。この瓦生産は能美窯跡群湯屋窯など瓦陶兼業窯というかたちをとっているものが多く、須恵器生産においても瓦とともに、以上のような畿内からの技術導入が計られる可能性が大きいわけである。このような寺院創建という政治的な要因によって、特殊な形での須恵器生産体制があり、須恵器に畿内の様相がストレートに導入されて行ったものと考えたい。このような特殊な場合を除いて、本来の須恵器生産にはどのような形が採られていたのであろうか。律令期の窯業生産の在り方について、浅香年木氏は多彩釉陶器と瓦はその生産に官営的な要素が存在していたことを指摘しつつも、「須恵器生産に関する限り、その窯址群が概ね一群一窯址群への指向を帯びるところより見て、その生産と交易を支配するものは、郡領層に代表される、それぞれの地域の伝統的な支配勢力であり、通常の場合、ほぼ郡単位の交易権に支えられていた」（浅香1971）と推測している。つまり、在地勢力を支配者層として在地の技術者を構成員とする、郡を一単位とした在地の中での須恵器生産として理解できるものであろう。また、若干対象とする時代が古くなるが、共同体の理念を取り入れたものとして、萩本勝氏の考察（萩本1985）がある。氏はその中で、「生産と経営の主体は陶工集団を内に含んだ村落レベルの首長層ではなかろうか」として「焼陶伐薪の山の経営を始め、広く在地の要求に答えるべき陶工集団として、在地における『デーミウルギー（村抱え）』的位置付けを考えなくてはならないだろう」という興味深い見解を述べている。このような見解を総合すれば、須恵器生産を掌握していたものは郡領層という中央との結び付きをもった人間であったとしても、直接須恵器を作り上げていた人間はもともと在地にいた村抱え的な技術者であり、その技術者を根本的に取り纏める人間もその村の首長的な位置にあったものなのであろう。

以上のような生産組織の形を前提として考えれば、7世紀後半に顕在化した寺院創建という政治的事象が過ぎ去った西暦700年以後というのは、本来の須恵器生産の形に戻ったものと考えられ、政治的な強制力の弛緩とともに直接須恵器製作にあたる工人に畿内的器風が薄れていったのではなかろうか。また、この段階には窯場の拡大と増産が見られ、新たな須恵器工人の確保とともに一層村に根差した形、つまり「一器種一法量」を特徴とする蓋坏や東海地方の作風を取り入れた形態等在地的な色彩をもったかたちでの須恵器生産が行われるようになったのだろう。ただし、この須恵器生産組織のトップに立つのは郡領層であり、在地豪族がこれにあたっていたとしても、律令制の支配機構に組み込まれた「畿内貴族の地方支配に協力する末端官僚の役割をもつもの」（浅香1978）である側面ももっていたわけである。このような状況により、以前にも述べたように器形上では畿内に準ずる形を採るといった基本的な原則は遵守されていたものと考える。

しかし、3期前半に再び7世紀後半で見られたような直接的な畿内からの須恵器様式の導入が見られる。これは越中の流団NO16号遺跡1・2号窯跡（上野他1980、山本他1986）でも同様のものが見られ、北陸全般において期を同じくして導入された可能性をもつものであり、何等かの政治的変動に起因するものと思われる。その要因としては律令制の確立と中央集権の強化などを想定したいが、中央でも国分寺造営・大仏開眼に示される律令古代国家の発展がみられ、この時期に宮都でも土器様式にさらなる発展が見られる。平城宮の宮都完成と律令経済の安定または経済進行は、強い影響力となって地方官人に向けられ、宮都の多様な器種分化と食器構成を真似て、地方官人にいち早く宮都的土器様式が導入されていったものと見る。

しかし、このような畿内的な様相を直接的に受け入れる須恵器様相は長くは続かず、後半の矢田野向山1号窯跡Ⅲ次窯ではすでに宮都的器種組成が在地的に還元され、次の二ッ梨横川1号窯跡や箱宮5号窯跡の段階では、さらに展開して、地域色を一層濃くしながら、北陸固有とでも言うべき、須恵器様相を形成している。つまり、この段階は須恵器生産を掌握するトップの位置にあった郡領層においても、「中央の形に従え」といった基本方針をやや軽視する傾向が出てきた段階として評価でき、そして、この背景には律令制支配の弛緩や荘園制的土地支配の萌芽等社会的な要因が存在したと想定できる。この社会的な変動に伴って、末端官僚としての位置にあった郡領層に対する中央からの支配力も低下したものと考えられ、その郡領層を支配体系のトップに置く須恵器生産組織も中央からの規制が弱まっていったものと考えたい。このような状況により、須恵器生産は一層在地に根差す形となり、郡単位での生産組織を形作ると共に、各窯跡群での地域差の出現など地域に根差したような形での須恵器様相を生み出して行く結果となったのであろう。

引用文献

浅香年木　1971　「平安期の窯業生産をめぐる諸問題」『日本古代手工業史の研究』　法政大学出版局
浅香年木　1978　「第3章第3節　江沼の国造」『加賀市史』通史上巻　加賀市史編纂委員会
上野章他　1980　『小杉流通業務団地内遺跡群－第2次緊急発掘調査概要－』　富山県教育委員会
萩本勝　1985　「山陰東部古墳時代後期の須恵器」『北山茂夫追悼日本史学論集　歴史における政治と民衆』日本史論叢会
山本正敏他　1986　『小杉流通業務団地内遺跡群－第6次緊急発掘調査概要－』　富山県教育委員会
吉岡康暢　1976　「平安前期の地方政治と国分寺（上）」『金沢大学日本海域研究所報告』第8号　金沢大学

1号窯跡II次床全景

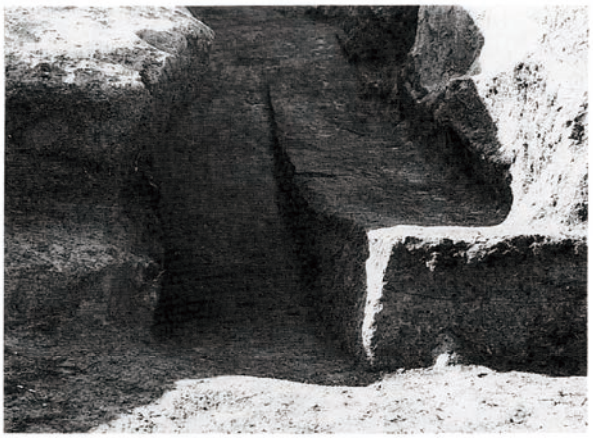
調査前遠景

調査風景

1号窯跡II次床焚口部炭化木材

1号窯跡II次焼成部土師器甕出土状況

1号窯跡窯体南側地山遺物出土状況



1号窯跡Ⅰ次床・Ⅱ次床状況

1号窯跡Ⅰ次床全景

1号窯跡焼成部右Ⅰ次床・Ⅱ次床状況

1号窯跡Ⅰ次床前庭部排水溝

1号窯跡燃焼部左Ⅰ次床・Ⅱ次床状況

2号窯跡

1号窯跡前庭部全景 北より

2号土坑

3号土坑

調査後遠景

考古地磁気測定資料採集風景

13-1
13-2

9-7

9-11

9-15

9-19

9-22

9-25

13-13

8-2

9-8

9-13

9-16

9-20

9-23

9-26

13-14

14-1

8-3

9-9

9-14

9-18

9-21

9-24

13-12

13-24

14-2

8-12

8-13

8-14

8-15

9-28

9-29

10-1

10-2

10-3

10-4

11-4

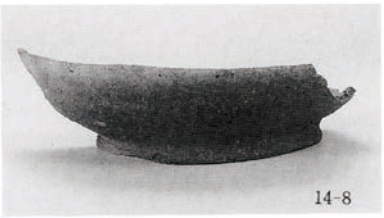
11-6

11-12

11-13

14-4

14-5


14-8

14-11

14-23

15-8

15-11

15-15

15-18

15-19

10-6

10-7

10-8

10-9

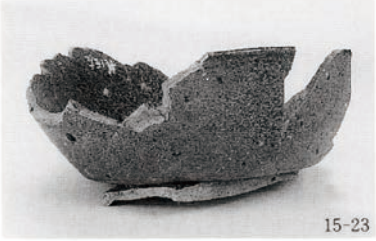
10-10

10-11

11-16

15-21

15-22


15-23

10-13

11-17

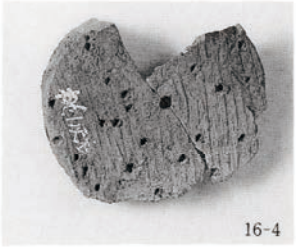
11-21

11-20

16-2

10-14

16-5


16-4

8-18

16-11

12-3

8-17

11-22

8-19

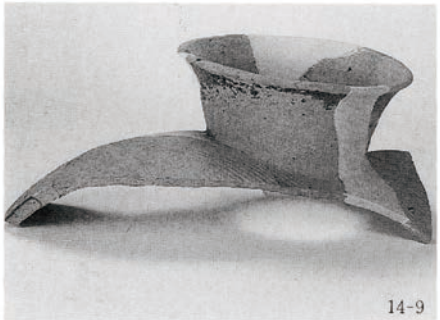
8-2

16-6

16-7

12-1

16-8


14-9

12-4

12-5

16-13

12-8

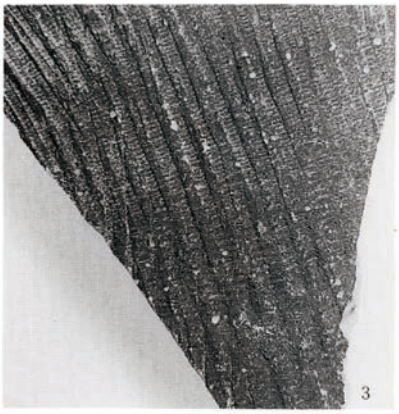
12-9

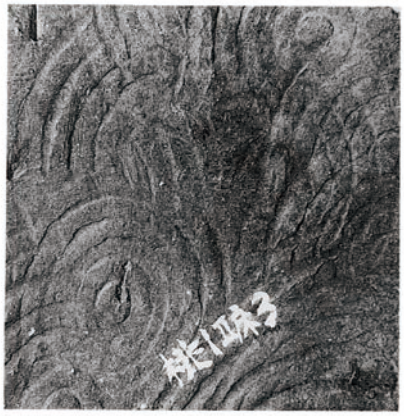
17-1

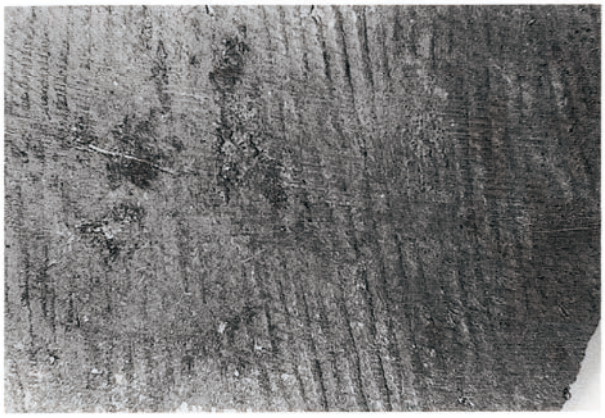
10-18

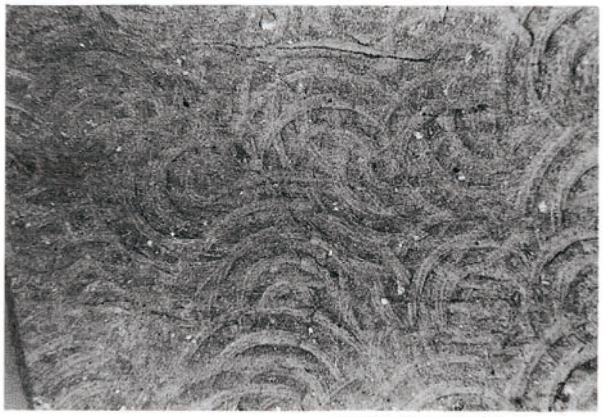
9-17

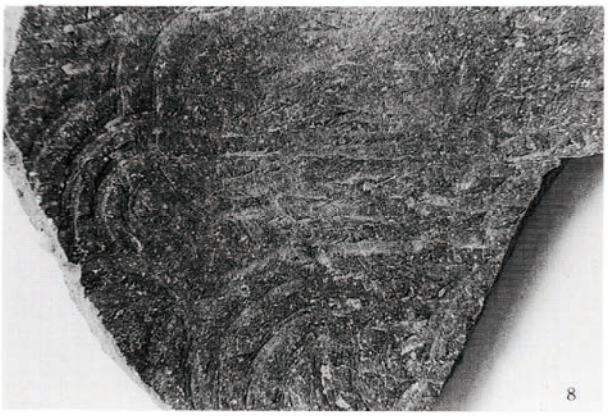
17-2











1・2は坏蓋の天井部に有台坏の高台が溶着したもの。
1は縦1列に重ね焼きした、2は交互に重ね焼きした痕跡が残る。
3～9は甕胴部叩き目文で、3は平行線文a類、4・5は同心円文a類、6は平行線文c類、7は同心円文b類、8は同心円文b類が同心円文と平行線文が融合したもの（DH類）に切られているもの、9はDH類である。

那谷桃の木山古窯跡
発掘調査報告書

平成3年3月20日印刷
平成3年3月31日発行

編集・発行　石川県小松市教育委員会
石川県小松市小馬出町91番地
〒923　電話0761（22）4111

印　刷　英　文　堂